

---

# 正にその義は煌く拳

本間 一平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正にその義は煌く拳

### 【著者名】

本間 一平

ZZード

ZZ690W

### 【あらすじ】

私は変人である。だけど目指すは正義のヒーロー。どんな困難が来てもどんなに辛くてもそれをやめることは絶対に無いことに断言しよう。

計画的なのか臆病なのかそれとも単なる思い付きでしかないのか分からぬ自他共に認める変わり者、木堂正志の奮闘記。

## プロローグ

話をしよう。俺こと木堂 正志の形を色をしてアホさ加減を、その脳裏に描いてもらひたためのそんな話。

日本生まれで日本育ちな良き父と母のたゆまぬ愛の結果、俺は特に問題もなくポンッとこの世に生まれた。その後もママ、ダダと初めての言葉を発して父に微妙な顔をさせ、ほふく前進と直立不動を経て、いたずらが恒例行事となつた第一次反抗期も終えてすぐく育つた俺。

まあ言つてしまえばどこにでもいる子供といえばそつなんだろ。順風満帆、このまま進めば平凡ながらも確実な幸せに向かつて邁進すること間違い無しの人間だつたに違いない。

しかしそれは小学一年生の夏休みの事だ。暑く素晴らしい休日を楽しむために俺は朝からテレビをつけて寝転がつてアイス食べてグダグダと實に有意義に過ごしていた。そしてなんとなしに見ていたテレビだったのだが、ある番組が再放送で始まつたのだ。その時のことの一言で表すならばそうだな……

「震えた」

まさに頭のてっぺんからつま先、指の爪から一本一本の髪の毛に至るまで全身全てに電撃が落ちたような衝撃と、全ての血管と心の臓が破裂するかと思うような興奮と鼓動が俺に襲いかかってきた。

その番組は古い特撮物でかなりの有名どころではあったが、物作りという唯一の楽しみを除けばそれ以外にまったく興味を持つていなかつた当時のおれは名前すら知らないものだつた。

今考えれば予め知つていればあれほどの衝撃はなかつたのかなとも思う。100までしかない計測器がいきなり0から一瞬で上がつてくればその枠外まで飛び出して限界を突き抜けてしまつて壊れてしまつるのは仕方なかつたのかもしれない。

そう俺は憧れてしまつたのだ正義のヒーローに。

その日から始まつたアホもとい自他共に認める変人街道快進撃。ヒーローに憧れるどこが変人なんだよ、そんなの男の子なら割と普通じゃないのか？ という疑問をお持ちの男子諸君は多いだろう。その感覚がわからない女子でも、小さい頃に一度はお姫様や魔法少女に憧れた事を思い出せばなんとなく想像はつくだろう。

確かにヒーローに憧れるなんてはある種の本能レベルで刻み込まれたようなもので、ごくごくありふれた話だろう。しかし俺の場合は憧れ方がそもそもおかしかつたのだ。

それは成りたいと思つたのではなく成ると決断してしまつたことにある。

テレビに向ひてこじる//ユージシャンみたいになりたいとかスポーツ選手を見てあんな活躍をしてみたい。そういう憧れはかなり悪い言い方になるかもしけないが一種の願望と言えるだろう。

俺はあろうことか初めて見て感動した架空上の人でしかないヒーローに成ることを自分で決定してしまつたのだ。……自分

自身の事を振り返ってみてはいるが本当にアホだな、むしろ俺が親ならば頭おかしいんじゃないかと疑つて病院に連れて行くほどだらなこれは。

だが俺の両親はよっぽど懐が広かつたのか底が抜けていたのか、いきなり体を鍛えだし、さらに物作りの趣味を眼の色を変えながら本格化させていった小学生を暖かく見守つてくれた。むしろ勤勉だと喜んでいたような気がする。初めて見た機械は直ぐにバラバラにして、庭に手製のサンドバック作つて毎日パンチやキックの練習していくのを勤勉と呼ぶのは無理があつたと思うんだけどな。

ある時なぜそんなに頑張るのかと母に聞かれた事があつた。その理由については説明した記憶はあるが……もしかして見守られたたんじやなくて遠い目で見ら  
いや考えるのはやめておこう。なんだか触れてはならない物がある気がする。

そんなこんなの中余曲折を経て、俺は迷うこと無く工業高校に進学。なぜ工業高校なのかといえば話は簡単。ヒーローといえば、スーツ！ ギミック！ そしてバイク！ 有り体にいうならマッシュイーン！ が重要極まりないものだつたからだ。青春の大半を物作りに割いていた俺の技能と知識はすでにかなりの領域に達していて、一年生の間にはロボ研（ロボット研究会）の先輩からは『機械の鬼』なんて呼ばれるほどになつっていた。ゆくゆくは自衛隊の開発部あたりに入つてパワードスーツや装甲バイクを作つていきたいと真剣に計画していた。

ちなみに俺はヒーローになるという事に関してだけは無理という言葉を一切使わなかつた、というか欠片ほども思いもしなかつた。

スーツが無ければ作ればいい、体が弱けりや鍛えればいい、正義なんて幻想だ？ なら本物にすればいい。まさに一心不乱な男であつた。だが友人曰くそれって盲目で言つたほうがいいんじゃね？ と返されさらには。

「普段そんなに喋らないお前はヒーロー絡みの話になると途端にテンションショーンがマックスまで駆け上がる。端から見てたらまるで一重人格だぜ。おもしろいけど」

盲目に対しては一言物申してもらつたが、二重人格の部分は……心当たりがなくもない、というかかなりある。分類で言えばあまり目立たない方に入る俺だが、ヒーローや特撮物の話になつた時の長舌ぶりでドン引きされた事は数知れず。いじめの現場やカツアゲ恐怖なんかを目撃し不良をぶん殴る様子を見た知り合い達の「お前誰だ！？」という一様に変わつた同じ顔など何回見たことか。

まあ驚かしたのは悪かつたとは思うけど、いやこの程度の刺激はむしろ人生のいいスペイスではないだろうか？ そうだ！ そうに違ひない！ 自分を貫き、かつ人まで喜ばしてしまうなんてなんて俺は良い奴だ！ はつはつはつはつはつはつはつはつ。ホントすみません心の底から反省しております。だがしかし後悔はしていない！

人生を道に例えるならば、人はよく変人は他の人とは違う道を行くなんて表現をする。みんなはまっすぐ歩いているのに一人だけ右

に向いて歩いていくつて感じでね。でも人の人生なんて様々だ、360度どんな方向に向かつたって同じような人生を歩んでいる人はどこかにはいる。右や左を向いたくらいでは変人なんて呼ぶのはまだ甘い。

変人は道を曲げてるわけでも、ましてや踏み外しているわけでもない。

俺たちは自分の道を空に向けて新たに作っているのだよ。空中を歩く発想をして、さらに実行してしまうような奴こそが本物の変人だ。

順風満帆であつた船を魔改造し、空飛ぶ海賊船にして乗り回した人生を送つてきた俺に大きな、それはそれは大きな転機が訪れた。乗り回したというよりは転がして遊んでたともいえなくもないかもしれないが。

高校一年生になつた17歳の俺は健康優良児に育つた。身長は175センチとやや大きめ、体は幼少から習つてゐる空手のおかげで引き締まつたものだ。無駄に多くの筋肉を付けたくないと思いながら鍛えたものだが希望通りここまで太い腕と足にはならずに鍛え上

げられたその四肢には、我ながら絶賛したい肉体だった。髪型は黒髪で前髪を残してオールバックにして頭の後ろで結んでいた。もしかしてオシャレさん？と思つた人、残念！ ぶつちやけ散髪に行くのがめんどくさいだけです。限界まで伸ばしたあとは見事な坊主への早変わりが見れます。

そしてお顔はといつと……まあ上の下つてといじやない？ いや自分採点だから更に一段下げる中の上かな。色恋沙汰やら服装とか流行なんてものにはまったく興味を示さず生きてきた俺には正直わかりません。時折

「優しそうな顔をしてるわ

つていうふうに褒められることはあつたな。近所のおばちゃん達からだけどな！

そんな俺は高2の冬休みを使い家族と共に海外旅行へと繰り出していた。行き先は某ハンバーガー大国にある国立航空宇宙博物館。もちろん俺の提案である。歴史において革新的な発明品やら乗り物などが展示されたあの場所は機械オタクの俺から見れば誇張抜きによだれ物である。実際パンフレットを見ているだけでヨダレが垂れた。

もうすぐ眼の前にお宝の山が現れる！ なんて欲望を滲み出していたのかいけなかつたのかもしれない。

「全員手を頭の後ろに回してその場に座れ！」

某国に降り立つた空港でなんと空港ジャックに巻き込まれた。おまけに逃げ遅れた俺は人質になってしまつ。ちなみに両親はその時離れた場所にいたので逃げ延びていた。

ここでヒーローの出番か！？ なんて思つたがさすがに銃を装備した10名以上の手練を相手に素手で勝てるわけもなく、無抵抗のままにおとなしく従つていた。だいたい30名ほどが人質に囚われていたが、そんな中でにいた小さは少女、たぶんまだ小学生であろうその子が震えて俺の隣うずくまつていたわけだ。

自分でいうのもなんだが俺は無類の子供好きだ。おつとロリータコンプレックス、略してロリコンでは決してないからな。違うからな！！ 絶対違うからな！！！ 男であるうが女の子であるうがヤンチャであろうが根暗であるうが、俺は子供が好きだつた。そして元から持ちあわせていた正義感も相まって強盗達の支持した位置から手を離して俺は少女の頭をそつとなでていた。一瞬驚いたのかビクッと体を震わしていたが、なるべく優しい笑みを心がけていた俺の顔を見て安心したのか、綺麗な金髪の少女は俺に抱きついてきた。ああよほど怖かつたんだろうな。当たり前な話だけどね。

だがその様子を強盗に見つけられ咎められた……と思つたぶん。いやだつてここ日本じゃねえし、相手は英語でしかもすつげえ早口で迫つてくるんですよ？ わかるわけないじゃん。

「 ! - ? - - - ! 」

しかしあからぬ為に無言だった俺をシカトされたと勘違いしたのか、激昂した強盗はその手に持つた拳銃で俺の頬を思いつきり打ち付けてきた。いわば鉄の塊で顔を打つ叩かれたわけだから、かな／＼り痛かつた。その衝撃で2つほど歯が折れるくらいだったしね。

俺のうめき声に周りの空気が静まりかえつていた。その静かな場

所に隣にいた少女の泣き声が大音量で響き渡った。まずいと思つたよ。目の前にいる強盗の男は実に短気だ。そして今は更に緊張も相まって子供だからなんて言い訳すら通用しない状態だらう。おそらく「黙れ」とか「静かにしろ」と何回も言い放つていたけど、少女は更に泣き続け、男は平手までかましやがつた。

いやいや痛みで子供が泣き止むわけないだろう。と意識朦朧としていた俺はツツ「ミミ」を心の中で入れていたが予想通り少女の泣き声は絶叫の域にまで跳ね上がつた。当然の結果ではあつたがなんと強盗は拳銃を直上に発泡してその銃口を少女に向けてみせた。

「 ! ! !

錯乱する少女に恫喝なんとしてしても黙るはずないだろう。だが焦りを見せる強盗はその引き金を引いてもおかしくない。いまだに激痛走る体を起こしておれは少女を抱きしめる。子供をあやすには万国共通、抱擁が一番有効だらうことは明白だ。母親の愛を忘れてしまつたであるう強盗ではおもいつきもしないのは仕方ないのかもしれませんがね。

俺は左手で少女を抱え、右手を強盗へと突き出して牽制する。これ以上しても少女が泣きわめくだけだと悟つたのか舌打ちを残して強盗は離れてってくれた。

ああダメだねって心底確認できたよ、悪はやつぱりだめだね。

こういう大きな人質事件は時間が掛かってしまうものだが、なぜかその日の夕方には話が付いたらしく俺たちは開放されることになつたらしい。どうやら強盗達は身代金を受け取りそのまま飛行機で海外に逃走するようだ。人質もすでに何人か開放されており、残りは老人と子供の10名ほどとなつていた。この残し方から察するに犯人の首謀者はかなり頭が切れるらしい。もしも警官が突撃を敢行した際にろくに動けない老人は助けづらく、指示も聞けずに混乱するであろう子供は邪魔にすらなる。

開放されていく人質達と、逃走の用意をする強盗たちを俺は隣の少女と手を繋ぎないで見つめていた。助かると思ってやつと安堵していた俺は周りの様子に気をかけるほどには緊張をほぐしていた。そして気づいた、強盗の内の一人の視線が隣の少女に度々向けられているということを。

その日の色を見た時、あることを思い出す。おみやげに買ってきていた評判のショートケーキを食い入るように見つめる母の顔を。それは欲望に駆られてそれを見ずにはいられない、獲物を狙う顔だ。完全に肉食系の顔をしていましたよ母上。

それに気付いた時、その男はリーダーらしき男と何かを話しだす。リーダーがこちらを一瞥し首を縦に振ると、男はこちらに向かつてきた。

ああわかる、わかつてしまつた。こいつがロリータでコンフレックスなお方で、今まさに隣の少女をその歯牙にかけることを決めたことが。迫り来る足音に動悸が早まり、流れ出る汗が冷えていき、口の中は一滴も残さず乾いていた。

## 「スタンダップ」

ゆうべりと立てと少女に命令しその腕を掴む口コロソ野郎。それ

を見て俺の脳裏には少女にとつて最悪の結果が浮かび上がる。

そして俺にそれを見過ごしてしまったなんて選択肢は無かつた。

「うおおおおおおおおお」

自分を奮いたたせる為に吠え、男の顔面に鉄拳を食らわせてやつた。なかなか良いあたりを出したはずだったが、男を氣絶させるには至らなかつた。急な痛みに焦りながらもこちらを認識した強盗は右の腰にぶら下げた拳銃を引き抜こうとする。すぐさま俺は接近し左手で男の右手を持つて構えよつとしたピストルを押さえ込んだ。そして右手で相手の襟首を持つて体勢を崩し3メートルほど向こうにあつた壁へと走る速度で押し付ける。銃への恐怖で無我夢中であつたが背中を強打した男はその衝撃に僅かに怯むのを見て、その隙に掴んだ右腕の手首に親指をめり込めせる。あまりの激痛に男は思わず拳銃を地面に落とした。

絶好のチャンスに空手の奥義、超短くではあるが息吹をあげて右手を引き戻す。

「セイヤツ！……」

全身全霊渾身の正拳突きは男の喉に命中し、その生命活動を停止させた。残心を取る俺の目の前の鬼畜野郎は地面へと崩れ落ちた。それは開始から5秒ほどの出来事だったはずだが、俺にはまるでスマーモーションな世界に迷い込んだようだつた。

そして3発の銃声が響き渡る。

人一人、その身一つでできることなんてたかがしれてる。そして俺が出来たのはこのロリコン野郎を再起不能にして少女にせまる辱めを退けるので精一杯だ。

わかつてたさその結果、死ぬことになると。

仲間をやられた他の強盗はすぐさま俺を拳銃で撃ちぬいた。急所には当たらず、即死はしなかつたものの右胸と左足に一発命中して俺はすでに一応立つてはいるが瀕死の状態。まあ満足……かな、目的は達成できたさ。俺に銃口を向ける男を睨み返す。止めを刺すために引き金を引く様がとてもスローモーションに見えていた。

(これが走馬灯つてやつなのかな)

両親と友人に謝罪の念を抱きながら目を閉じて行く。しかしその寸前に男との射線上に金髪の少女が立ちはだかる。

いやいやいやいやいやいや、せっかく助けたのに何やつてんのよこの子！ 終えようとした思考と消えかけた体の力が一瞬にしてマグマのように湧き上がる。細い腕を引いて体の位置を入れ替える。最後に放たれた弾丸は首を僅かに削つていつた。知つてた？ 銃で撃たれるとすつごい熱いんだぜ。ちなみに俺が首を打たれた瞬間に考えていたことは

(女の子って柔らかいんだな)

である。さつきまでロリコン野郎死ね！ って頑張つてたはずだが俺にも疑惑が……。もはや半死半生の身にしてはやけに心に余裕があるな。

抱きしめていた少女の無事を確認して映画のワンシーンとしては悪くない位置だな、なんて思いながら笑顔でその場に倒れる俺。

「――！」

「――！」

いやイタイイタイ痛いよ若者よ。少女が俺をゆすりながら何かを必死に叫んでいる。すまんもつと英語の授業真面目に聞いてりやよかつたな、まつたくわからん。

そんな声と一緒に遠方からけたたましく銃声が聞こえてくる。この量からして、たぶん警察がさつきの銃声を聞いて突撃してきたかな。よかつた、どうやら少女は無事に帰れそうだ。

意識が消えて行くを感じる。終わり、それを実感して心配そうに声をかける少女の頭を撫でて最後に先に逝く者から言葉を送つておこう。

そう、偉大な偉人が残した俺の好きな英語の格言。

「Boys, be... ambitious...（少年よ、大志を抱け）」

そうやつて俺こと木堂 正志の第一幕は終了したのである。

「つて相手は少女やないか――――――！」

最後にやつてしまつた大間違いにエセ関西弁風にツツコミを入れた場所は真っ白でありながら揺れているのがみてとれる不思議な空間だった。

## プロローグ（後書き）

思つこて書を出したら一晩間の記憶が消えただいじれる。

## 第一話 木堂と愉快な神様

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「拍手をやめい！ 拍手されながらおめでとうとか俺はビリヤの人  
造アニメの主人公か！」

死んだはずの俺は謎の白く揺れる謎の空間で馬鹿でかいおっさん  
やら女性やじり爺さんやら困まれていた。

「おお、死んでからシシコリの才能が開花するとはおもしろい」

何が流石なのかわからなー。というか今のシシコリを褒めたとい  
うことは確信犯かよ。あつなるほどこれは夢か、にしてはリアルだ。  
夢だとすると俺はもしかして助かったのか？

「ざんねん！ わたしのまづかんはこ」でおわってしまったー。

「心を読まれた！？ あと俺の声真似でゲームのモーマネすんなよ  
……てかディープだなおい」

「」の若者たるに見えるキャラ。兄ちゃんは実にさつきから楽しそうだな、というかなぜか全員楽しそうだったり興味深々で俺を見ているがどうしたことだ？

ちなみに特撮つながりから俺の趣味はアニメ、ゲーム、小説から映画に至るまでコンテンツ産業系は名作有名作などはほとんど網羅している。

「ではまず貴殿の疑問をお答えしよう。簡潔に言えば君は死んだ」まあそうだと思ったぞ、あの時死んでいく感覚があつたしな。にしてもこの爺さんだけは真面目そうだな～他のやつはソワソワしきだらマジで。

「そして我らは君たちで言つ所の神だ」

「え、あ、もしかしてこれから天国か地獄かを決める的な？」

さすがに神様の名を出されたらびっくり。せつこう系統かなとは予想してたけどまさかこ本人とは。

「まあよく似たものだがその話はまた後だ」

いや～さすがに神様。風格も言葉も威厳があるな～ってその他大勢がこっち見てクスクス笑つてやがる。オラなんだかむかついてきたぞ。

「地球の神よ、そろそろ本題に入らうではないか。我らはそろそろ待ちきれんぞ」

さつきかなりのオタクネタを飛ばしてきた兄ちゃんが満面の笑み

のままこちらに乗り出してきそうな勢いだ。いや軽く見て30メートルはあるからね君たち。こつちにきちゃつたら私は踏まれてお陀仏ですよ。あれ？死んでからも死ぬのかな？

「まあわからんでもないな。では木堂よ、此度このように呼び出した事には訳がある。貴殿が最後に成し遂げた偉業についての話だ」

「最後に成し遂げた？……あつ！あの女の子どうなりましたか！？」

「そり、まさしくそれだ」

「どれだよ。

「君は命を賭して彼女を救つてみせた自己犠牲の精神は素晴らしいものだ。しかしそれだけでは偉業とは呼ばない。無事帰還した彼女は自分を守る貴殿の姿をその身に焼付けて人生を歩んだ」

「そうか無事だったんだ……本当によかつた。

「その結果、あの少女は世界平和機構のトップにまでなり、世界紛争や飢餓、病疫を解決し、さらには第三次世界大戦をも未然に防いでみせ聖女と呼ばれる存在にまでなったのだ」

「なん……だと？俺の目指した先とは少し違うがまるで正義の味方。ヒーローじゃないか……。ん？あれ？なぜに過去形？」

「おつと言い忘れておつたな。今は君が死んでからすでに100年が過ぎておる」

「…………」

「まあどうでもいいじゃないか！ 確かに少女へと多大な影響を与えた事は偉大な功績だ。しかし我らアトレアの神々は君そのものに賞賛を『えたい』

「むむむ、よくわからない」とになつてしまひました。あとゲーオタ臭いあなたは自重を知つたほうがいいのではつてあんたも神かよ！ てか衝撃の事実を軽く流された！

「地球の神はかの少女の始まりである」とを褒めたが、我々は君自身の人生を諸手を上げる喝采を送るほどに感動しているのだよ」

アトレア？ 地球？

「やつ我らは君の世界とは違う場所の神だ」

薄々感じたけど心読まれてます？

「神ならそれぐらじ当然だ。とくにこの神界ではない」と思つてな

「オウフウ……恥ずかしい……」

「まあこじまで我らを喜ばした異界の民である君に、褒美を上げたいと思つてな」

「あげるつて俺死んでますけど？」

「そり、だからその先の人生を歩んでみないかな？ 我らの統べるアトレアで、だ」

「……アトレアとまだんな世界ですか？」

「こきなり乗り気になつたわ、思つたとおり面白い男ね」

「期待に胸が高まるな」

「一緒に酒を酌み交わしたいわい」

やる気の一端をみせたためか今まで会話に加わっていなかつた、グラマラスでセクシーロ線の姉ちゃんと髭モジヤの酔っぱらい爺と筋肉隆々なやたらと怖いおっさんが話に加わりだした。いやだから乗り出さないでつてば近いよ顔が！ でかくて怖いわ！

「怖いとわ失敬ね。えつと私たちの世界がどんな場所だつたかしら。そうね中世ヨーロッパ風で剣と魔法の世界つて言えばあなたなら判るでしょ？」

「オケ把握した」

満足のいく死に際ではあつたが、やり残したことほいくつもある。もし剣と魔法の世界ならばそのやり残しは地球よりも叶う可能性は高いんじゃないだらうか。

「そうじやの。科学はそこまで進歩しとらんが魔法に關してはそこそこ進んだ物を持っておるからお主の願いは叶うかもしけん」

「受けます」

「うひょー！ 即決とかオットコマハ——」

「ほんといい男ね」

「危険度さえ聞かんとは潔し」

「今夜の酒は美味そうじゃ」

なんだらう俺のイメージする神様からどんどんかけ離れていくぞ  
この四人。

「では」

グラマラス姉ちゃんが手から光の球を俺に飛ばしてきた。それが  
俺の手の中に収まると何かが握られている感触が現れる。

「えー!?」の後に羽根がついて前に針があるこの形状は……

「それでは——ル————レットオオ——!」

「「「「スタート!」よだじゅ」

えええええええ——なにこれなにこれ!?

「アテレアの世界にはオレら神からの恩恵としての力を受ける奴が  
けつこういるんだよね。それで君に似合ひそつな者を四人で選出し  
てルーレットで決めることにしましたー」

なんか重要そつなことだけどいいのかこの決め方。

「ちなみにタワシは当たりません

あんた田本に詳しそうだろ――――――!

ほとんどヤケクソ氣味にダーツをルーレットに投げつける。不覚にもツシ「ミの勢いで投げてしまった。ルーレットが止まり、ダーツの刺さった部分が見える、のだが読めん!? 向こうの文字なのだろうかまつたくわからない。

۱۰۷

「へえ」

「ふむ」

「フォツフォツフォ」

それを注視していた四人の神がそれぞれに反応を示しているのだが、その様子を見て良いいのか悪いのかすら想像がつかない。なんか怖くなってきたな。

「じゃあこれとは別に我々4神からそれぞれ特典をあげるけど……」  
説明がめんどくさいから向こうに行つてから自分で確認してね

おこちゅつと待てダメ神わ。なんだよ」の雑い説明つぱりわ。  
一から十までの一すら説明してないじゃないか。あつ、田から星な  
んか出して誤魔化そうとするんじゅつて、うああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああ  
あ。

「おお我が世界の子羊よ、そつちの世界でも達者でな」

奈落の穴に引きこまれながら一つ気付いたよ。アトレアの神は完全に面白がって俺を呼び込んだってことがな！ おお、神は死んだ。

## 第一話 仕様なの？ ワザとの？

はいどつも～神々に弄ばれた木堂 正志だよー。

「はあ～」

いやため息の一つも出るつしょ普通。確かに悪くない話で願つたり叶つたりなわけですがまさかあんな大雑把なままの説明でボツシユートされるとは思いませんでしたよ。もしこの世界にあの神様の像があつたら絶対ラクガキしてやる。

まあ切り替えよう、もし今度話せる機会があつたらなにかせびつてやるとしてだ。

「どいだよこい……」

ボツシユート最中に氣を失い、次に目を覚ましたのはどいこかの森の中。アトレアに無事着いたのはなんとなくわかつたよ、だつて紫とかなり黄色い太陽が空に2つ見えてますからね。だが地理の知識も世界の常識も知らない状態でこんな深い森の中に居るのは。

「遭難スタートとか難易度高いよ……」

無闇に歩くのも体力消耗の危険を伴うのでとりあえずそこらにあつた岩に腰掛けて思考する。地球ですらアウトドアに行つたことがない俺にとつてはまさに大ピンチ。持ちうる知識を使って解決策を導き出す。

考える像そつくりなポーズで考へ出してからだいたい20分くらいしてだろうか、近くにあつた茂みが揺れ動く。瞬間に立ち上がり準備していた木の棒で構えをとる。

剣と魔法の世界なんて単純に説明されたが、俺の知るなかではほぼ確実に魔獣やらモンスターなんて呼ばれる人を襲う化物がもれなくセットでついてくるのがごくあたり前だ。その危険性を一番先に思い立ち、先の尖ったそれなりに太さのある木の棒と幾つかの大きな石をポケットに忍び込ませてある。元から体を鍛えていたから大型犬程度ならなんとかなる……はず。だがなるべくなら今は出会いたくは。

「グルルルルル」

なかつた。てかデケエ！なんか頭が妙にでかいが熊っぽいそれは茂みを出た時には既に俺のほうに視線を向けていた。俺の美味しそうな匂いがしたから来たんですねわかります。

こいつを体長2メートルの熊と同じ戦闘力と仮定して一瞬でシミレーションしてみるが、ダメ。まったく勝てる要素が見当たらない。

「難易度高いじゃんか無理ゲーかよ」

脳裏に俺が四神に囲まれていじめられている図が浮かびがるが、信憑性が妙に高い可能性があるものの直ぐに否定しておく。あの神

様をデイスツた回数ごとに不運度が上がっている気がする。ならもしかしてあの神様達を崇めれば幸運度が上がるのでは……とおもつたがあの神様を崇める部分がないので諦める。

「グオ————！」

組み易しとみたのか熊公がこちらに迫つてくる。獣の見た目ほどは早くないなこいつと思いつつ右側に大きく回避。命のやり取りで緊張したのか踏み込みすぎて若干よろけるものの回避は成功。熊に目をやるとおれに向けて放つた右爪が座つていた岩を砕いていた。

「熊つてレベルじゃねえ！」

それを見てすぐさま木の入り組んでいる方の森へと逃げこむ。こいつはパワーのわりには早くは見えない。ならば足の速さと小回りを活用して逃げきるまでよ。

「あばよ、といつあ～ん」

人生で一度は言つてみたい俺語録第4位の台詞を置き土産に스타コラサッサですよ。5分ほど走つた後であることを思い出す。無闇矢鱈に走るのがまずいからあそこで留まつて考え方をしていたという事を。

といつことで現在崖にぶつかり、しかも一匹増えた熊さんが前と左右を見事なチームワークで塞いでおられます。

「無理ゲービーひか詰んでるじゃねえか……」

もちろん愚痴が言えているあたりはまだ若干の余裕がある。この熊の攻撃は俺からすれば遅く、避けるだけなら簡単だつたからだ。

まあ一匹だけならの話だけど。そこでおそらく同時にかかるつてくるであろうう熊の右手側の顔面に石礫を投擲、ひるんだところでその脇から再び逃走する算段だ。え？ 倒さないのかだつて無茶言つなんよ人間が素手で熊を殺せるか！ 手に持つた木の武器はつてか？ そんなんもんはさつき走りだした時にまつさきにぶん投げたわ！

「グワッ！――！」

予想通り三匹同時に掛かつてくる瞬間に右側に全力で石を投げつける。よしついい「コース直撃間違い無し。

カアアアアアアーンと厚めのガラスが砕けたような音と共に右の熊さんの頭が跡形もなく弾け飛ぶ。

「は、はいいい！？」

投げつけたと同時に走りだすつもりではあったのだが、あまりにもショックキングな映像に足を止めてしまう。

「グワアアアア――！」

俺と同じように真ん中の熊も驚きのあまり動きを止めていたが、左側の熊はそれに気付いてないのか俺に襲いかかる。隙だらけではあつたが熊の攻撃は所詮のろくて単純、軽々と避けてみせる。

投擲のとんでもない結果とさつきから感じる壮大な違和感を照らし合わせて、その答えを得るために避けたあと熊の横に回りこみ速さを重視して軽く突きをはなつてみる。触れたと同時に即退避。だがその軽いはずの突きで俺の体重の数倍はあつうといふ熊の体が僅かに揺れた。

「うわあマジですかい」

「グウウウ」

苦悶の表情を浮かべてこちらを睨む熊。その隣に気を取り戻した中央の熊が並んでこちらに身構える。あつちも驚いた様子だが確實に俺の方がおどろいてるから！ だつてさつき熊を揺らした正拳は俺の全力からみれば2割程の突きだ。さつきから熊が遅く見えること、走ってきたのにまるで切れない鳥。そしてさつきの「石投げ」と突きから考えるに……。

「いや答え合わせはここからで試すか」

「やりと笑つて見せると足元にあつた拳大の石を持ち上げる。そして全力で振りかぶつて熊の片割れに投げつける。受け止めようと腕を突き出すがそれ」と熊は数メートルふつ飛ばされていった。

「はい大正解でしたー」

ふつとぶ熊に振り返つてしまつたもう一匹の熊の足元に駆け寄り、その胴体に正拳三段突きをお見舞いする。殴られた場所が風呂桶ほど凹んで血反吐を吐きながら熊は転倒していった。

「これは……神さんの言つてた特典の一つか？」

非現実的である身体能力であるにも関わらず今の今まで違和感なく受け入れられていた事を考えるにこれが神の仕業と考えたほうが辻褄が合つ。正直度肝を抜かれたがまあそのおかげで助かったんだ感謝はしどうかな。なーんて思いながらニヤついて手を開いたり閉じたりして異界で不思議な魔法の世界。元の世界でいえば有り得ない事が平気で起こる世界なんだという実感を確かめていた。

がそれが油断大敵雨あられ、つて古いか。

「ウキヤ————」

熊の血の匂いに釣られてか崖の上から大きな猿型の怪物が襲いかかってきた。気づくのが遅すぎてその爪が体にあたりそうになる、正直こんな森では軽傷だつて下手をすれば命取りだ。

「ヤバツ」

しかし猿はその爪が俺の服に当たった所で細切れに切り裂かれた。  
……おうショッキング映像の次はスプラッター映像かよ……今空腹でよかつた。胃酸だけ逆流しそうになつたがしつかり飲みましたよ。

「油断大敵雨あられ、遅らせながら風の妖精フイリー主の名によりここに馳せ参りました」

じつちも古い。血の舞い散る森の中、羽根の生えた手乗り少女が満面の笑みでおれにお辞儀をしていた。スプラッター + 美少女……これはまさかヤンデレフラグか！？ やだー。

## 第一話 仕様なの？ ハザとの？（後書き）

八百萬の神々の中にもふぞけた神様っていらっしゃるんだろうか？

## 第二話 本当に大丈夫なのかこの世界

「大変遅くなつて申し訳ありません。なにせこの広大なヨルガの森のどこかに居るとだけしか主人は教えて下さりませんでしたので～」

何だか申し訳なさそーに俺に謝る自称妖精。頭を下げて真摯に謝罪する少女を360度グルグル周りながら観察する不審者極まりないおれ。

「あの～なにをなさつてるのでしょ～？」

「いや、ごめんな。妖精って言われてついね」

なんせフイリーは見た目は幼い少女だがその大きさは十センチほど、薄く透明な小さな羽根を四枚背中に持ち、フリフリの可愛い服を着たまさに可憐な西洋の昔話に出る妖精そのものだ。

「あはは。つまり一目で私の可愛さの虜になつてしまつたわけですね～うつふつふどつしましょ～」

中身はどうやら若干残念なようである。

「おつと血口紹介を改めてさせてもらいます。私は風と歌の神ナーブ様が使徒、春風の妖精フイリーでござります。この度は主の命により木堂様のサポート役として遣わされました」

風と歌の神……いやそもそも神様の知り合いなんてあの四神しかいないし、すると風……歌……ああ、あの軽そりで一番喋つてた兄ちゃんか。弦楽器っぽいもの持つてたしな。

「それつてもしかして、えーとナーブ様？ が付けてくれた特典つてことなのかな？」

「それに関してナーブ様より伝言が「事情を知つて、なおかつ理解する子が一人くらいてもいいじゃない」だそうです

「軽つ！ ほんと軽いわあの神様。でもまあ気をつかつてくれた事には感謝しこうかな、明日の朝ぐらいまでは。

「じゃあサービスっぽいね

「それどじ質問や疑問は多いと思ひますけど、その前に

何やら背中を向けて、ゴソゴソと何かを探すフイリー。

「はい。この世界で始めての達成記念です」

大きな球を取り出し嬉しそうに笑いかけてくれる のはいい  
けどどう考へてもその球の体積あなたの体より大きいよね！？ どこから出した！？

「私が支えますので、ぶら下がった紐を引っ張つてくれますか？」

「え？ これ？」

パッパカバーン、ヒビヒからとも無く聞こえるワッパのファンファンアーレ。

「おめでとうござります。木堂様は一つ目の特典に気付かれました

— ! ?

「なになに、『よくぞ我が特典にたどり着いた。我、火と武の神であるバーダグノミスの特典は肉体強化常時三倍である。これを使いこなし一層の武の励みとせよ』か……つむ計算が合わんぞバーグさん」

さつきの戦闘から肉体が強化されたのはなんとなく想像はついてはいたが、元の肉体の三倍程度ではあんな芸当はとてもではないができない。

「あつ納得できませんか？ その場合の伝言を地球の魂と肉体の神様から承っています。『地球とアトレアの人間では元から三倍ほど肉体に差がある、そこで元の肉体から換算してそつちに合わせて作り替えてあるから安心するように』だそうです」

ああ成程、3倍ではなく3×3で九倍なんですね。確かに空手で瓦割りが最高で12枚だから9倍だと108枚か。。。ハハハ つて笑えねよ！ 怖いわ！ やりすぎだろこれは！ ハツ 今気づいたが他の特典もこれ並みなのか？ 例の特別な力はもつと 上？

「よし俺は考えるのをやめやが」

「え、どうもったー？」

「気にしなくていいよ」

神様の上で「口口口遊ばれてる気がするが心労が増すだけなので忘れる事にする。うん、それがいい。そんなの問題の先送りでしかないじゃないですか！」と問責されそうな話だが決して俺のせいではないと弁解しておく。

だつてさ、死んでしまつてからこつち驚きとか衝撃とかで心労がかかつてない時のほうが時間的に短いんだよ。死んだと思つたら神様がいて、なんだかよく分からぬままに居世界へと飛ばされ、森で熊さんとお猿さんに会つたらヒヤッハーですよ！？ いいじゃないかちょっとぐらゐ現実から目を背けたつて。こんな力オスすぎる状況は変人の俺でも噛み碎いて飲み込むにはすぐ時間がかかりますよ。

「さてそれでは質問に答えていきましょ」

「……じゃあまず一つ、アトレアの言葉つて地球とは全然違うよね？ なんで俺は君と会話できるの？」

神様ルーレットに書いて会つた文字は見たこともない文字だつたし、言語形体が一緒なんて偶然は流石にないだろうし。すると質問を聞いた妖精さんは、パツと花が咲いたように笑顔なり再びくす玉を取り出した。

血生臭い場所で会話をするのもアレだし、夕暮れも迫つて來ていたようなので今晚を過ぎる場所を探して移動する。幸い熊と一戦かました近場に縦穴の洞窟を発見してそこに陣取ることにした。ちなみに発見した後、あの熊を一匹引きずつてきて石切包丁を作つて皮を剥いで焼いて食つた。正直なかなかのグロテクスな作業であつたがフイリーがバラバラにした猿の映像のほうが遙かにすごかつたがか吐かずにはすんだ。身につけて来た常識と倫理観が音をたてて崩れる音が聞こえてきそうだ。しかし俺は目的の為なら苦労も心労も厭わない男。これぐらいわ……いややっぱちょっとキツイわ。

そしてこの日の夜と、次の日一日を掛けてフイリーとの問答は続いた。その結果いろいろとまずいなつてことがわかつて直ぐには人里には向かわず、しばらくこの森で生活することになった。

あつ、ちなみにさつきのくす玉は風と歌の神ナーブからの特典でこの世界の言語を理解できるようにするというものだつた。コメントは正直むかつたので略してやる。

### 問題点その1。戦闘力の安定化。

身体能力と空手の技である程度はなんとかなるが、『これは剣（拳）』と魔法の世界。それだけはまだ半分だ、そこでフイリーに魔法の基礎を学ぶことになった。魔法つてのは簡単に言えば生命に流れる魔力をつかつて火の玉を飛ばしたり水をどこからともなく出したり風を起こしたり地面の形を変えたりする、そうあれだ不思議パワーだ。まあ一応科学で代用出来るのがほとんどだな。『発達した科学は魔法と見分けがつかない』なんてのは誰の言つた言葉だつたか。まあこの世界はそれなりに魔法が発展していて科学では代用できないような事もできるらしいが実際見る機会は来る日はあるだろうか。フ

イリーの説明は感覚的な話だったのでいつかその構造やらの詳細を調べてみたいものだ。早速自分で使ってみたら小石ほどの炎が出たので才能が無いわけではないようなので安心した。

## 問題点その2。金が無い。

完全無一文の俺が人と生活をしていく上では金が必要不可欠となる。もちろん俺の目標を達成するためにも金はあればあるほど好都合だ。てか絶対いる。そこでこの森で取れて、金に成るものがある程度集めることにした。どれぐらいで売れるのかまではフィリーも分からなかつたが。間違いなく金に成るものはなんとなくわかるらしいので協力してもらひつことにする。あの熊達の毛皮はいい値段になってくれるといいな。

## 問題点その3。常識が無いどひうかマイナス値。

常識が無いのは当たり前なのだが、俺には地球での常識が存在しているわけで、それをこちらの常識などと捉えればどんな問題が起ころか分かったものではない。おそらく悪いことだらけのイベント盛りだくさんなのは眼に見えてる。まあ妖精であるフィリーも人間の常識を持ちあわせているかと言われれば、あんまりではあるけれど最低ラインはあるらしいので参考にさせてもらひつことにする。

これらはある程度までクリアーしてから街に繰り出すことと相成ったわけだ。西洋ファンタジーに入ったのに最初のイベントが山籠りとは色気がないなーと思いながらなんとかフィリーの癒し成分で耐えることにしよう。しかしづつと熊ばっか食うのは辛いなーと零した翌日にフィリーが食べれる果実やきのこを持って来てくれた時は彼女が女神に見え、俺の中ではあの四神よりもランクが上になりました。傷心の魂が清められる————。

「ひれ伏せつて言われれば喜んでひれ伏しますよフィリー様！」

つて心の声が漏れてしまい、フィリーにドン引きされました。

「そんな趣味があったの？」

と聞き返されたのはクリティカルヒットで俺のハートを砕いていました。

はい、そんなこんなで30日が経過しましたー。えつ修行風景は？ ねえよそんなもん。俺様のパーフェクトかつなんの困難もない華麗なる風景を延々と見たってつまらないだろ？ フフン。

はい嘘です。正直なところ問題点2と3は順調だったんですがね。1に問題がありません。魔法の習得は大分難儀しましたよ。フィリー曰く。

「想像力は凄い！ 全属性をここまではつきりイメージできるのは大したものだと思うよ。でもって覚えもいいしね。でもキドーは魔力の制御が下手すぎるよ～」

だそうです。ちなみに敬語と様付けは気持ち悪かったんで初日に変えてもらいました。フィリーも慣れない言葉遣いは気持ち悪かったそうです。まあ向こうの世界には魔法が使えるゲームなんて腐るほどあつたからイメージはしやすかつた、使い方もなんか儀式とか円陣を書くやつとか難しいのがあるらしいが、習つたのは初級だけ。イメージと魔法の燃料である魔力を頭で編み込んで呪文を唱えるだけと至つて簡単なものだった。

しかしあれは魔力を注ぐ行程がかなり下手というかめちゃくちゃで、一滴の水でいいのにコップ一杯の水を汲んでくるほどだそうだ。自分でもアホだと思うよ。だが魔力は感覚で操る物で、いまだその感覚はあやふやなままだ。この世界基準で言えば生まれた時からこの感覚をもつているのだろうが、おれは残念なことに一ヶ月前にそれを持ったばかりだ。年季が違うのだよ年季が！ 悪い意味でな！ 赤ん坊にお箸を持てとか無茶ですよ奥さん。なんでも中級に進むには魔力制御を完全に身につける必要があるので道はほんとうに遠そうだ。

だがなんとか初級の魔法はいくつか治めることには成功した。だがその消耗度の問題から連発とか広範囲にばら撒くことはできないない。

「まあ慣れだな、慣れ」

魔法は今後に期待である。期待して、期待できる？ いや期待しよう。……現実としてはどうなるのか分からんの一言だ。

そもそもつて俺の様相も凄い変わりようだった。最初は向こうで死んだ時に着ていた長袖のシャツにパークーとGパンといった格好で過ごしていたのだがいかんせん汚れやら傷やらが目立つて仕方ない。正直なところこれが地球を思い出す唯一の品だけに破損とか捨てるという状況は意地でも迎えたくはなかつた。つまりその結果、森で倒した鹿っぽい何かの皮で作った服を来た原始人ルックな男の

完成なわけですよ。フイリーがいたのでもちろん上下完備である。毛皮を来て石を投げたりして戦う俺の姿はまさに教科書に載つていた北京原人そのものである。俺的にはこれが一番きつかつたよ、精神的な意味で。

さらに俺らは10日かけて人里に降りる準備を整える。フイリーがナーブから託されていた地図によりここから最も近い村は判明していたが、そこに立ち寄るつもりは無かつた。東にあるその村から更に東南東にある大きな街、ブローナスそこが俺の目的地だ。理由は色々あるのだが、最も大きな理由はそのブローナスが現在居るブロニアスという国の首都で最も大きな街であるというのがその要因だ。

もしも、せめて、もしかして、であるならば、かもしれない。俺なりに色々な可能性を考えての一案である。まあ何か問題を起こしてしまつてもまたこの洞窟まで逃げねばすむ話しさ。40日をすごした洞窟は既に入り口が設置されており、中には木で作つたベッドと熊の皮で出来た布団が設置されたちよつとした小屋状態になつた。やっぱ野宿とはいえ人間なんだから環境がいい方がいいじゃん？夜の間は暇だつたからつい凝つてしましましたよ。やっぱり趣味、物作りは魂の洗浄だね。カオル君バリに一人夜中に越に

浸りながらの作業風景は一度見たら毎晩うなされこと請け合いの光景だらうね。俺には「ごく」普通な日常の光景の一つなんだけだね。

さて全ての準備が整い出発の時が来た。これまた木で作った背負籠にありつたけの荷物を積み込んで背負い込む。その形はそうだな、二メートルくらいのごついタンスつてのが一番近い形かな。重さは80キログラム弱つてところだと思つ。大きさのわりには大分軽いのは獸の皮と薬草の類が大半を占めているからだ。体積的に一番思いのは道中で俺とフイリーが食べる食料だらう。しかも80キロと言つても筋力が9倍に膨れ上がつたおれには9キロ相当の荷物でしかなちょっとおもいくらいにしか感じない。

さて目的地のブローナスはここから大体馬車で10日はかかるらしい。俺的予測に基づいた計算によるどいたいその距離300キロの道のりのはず。もちろん俺は馬車など使う予定はない。というか金が無いのが問題点なんだから買えるはずもないしそんなゆつくり旅をする気も毛頭ない。この世界を知りたいという知的欲求はすでに限界を超えて精神全体を両手で搖らし続けている。

そこで俺は自分で走ることにした。実験的に同じくらいの岩を担いでジョギングのペースで走つたところ問題なく走れた。しかもジョギングといつてもおなじみ強化がついてるのでその速度はかなり速い。そしてフイリー直伝の森の薬草から作った疲労回復薬を補給しながらだと、たぶん一日6間くらいは走れるはずだ。おそらく順調にいけば5日程でブローナアに到着するはず。

だが問題点もあつた。フイリーにこの重さの物を持つて走り回れるのは普通か？と聞いたところ。常識の勉強やり直す？と聞き返されてしまった。まあなんとなくそうだと思つていましたとも。俺だって自分の身体能力にはドン引きしているんですから。そこで俺は舗装された街道はから外れて直線上に平原や森を突つ切る予定だ。ちなみに川はフイリーの風の魔法で運んでもらう予定だ。この重量を風で運べるフイリーの魔法も大概なものだと思つんだけどな

一。でもフイリーからすれば最初に猿を細切れにした風の魔法もまるで本気ではないらしいのでまさしく可愛い顔して怖い奴である。街に着いたら餌でも買ってあげようかな。

フィリーは最近定位置と化しているおれの右胸ポケットに入つて出発の音頭を取つていた。

「ヨツシャー——冒険の始まりだ——！」

苦節40日、長いようで短いようなお試し期間を乗り越えて遂に俺の念願を叶える冒険が始まった。

「おお、やつと出発したか）。サバイバル生活もなかなかよかつたがやっぱり君は波乱万丈な人生が一番輝く男だよ。さあしつかり活躍して躍動して奮闘して僕達を楽しませておくれ正志君、いや僕達期待の正義のヒーロー」

## 第三話 本当に大丈夫なのかこの世界（後書き）

いい意味でも悪い意味でも適當です。

## 第四話 ややこじやー

さて道中は問題もなく進行した。人に会わない場所をあえて通つて来たのだ問題があつてもらつてはこまるが。あえていうなら化物、この世界では魔獸と呼ばれるやつらに何回か襲撃されたがヨルガの森にいたやつに比べれば実に雑魚極まりなかつた為戦闘シーンは大幅カットだ。

そして目的地ブロニアス王国首都、ブローナスに二度目の侵入を出発して3日目に行つた。

なにを言つてゐるのかわからねえと思うが俺もなんでこうなつたかわからない。

まず問題としては俺のジョギングのペースは体感よりかなり速かつたというのが一点。あと疲労回復薬が予想よりも優秀で一日八時間も走れたのが一点。問題及び迷子の可能性を考えての日程だつたのだがそれらもほぼ無しでの行程となつたのを合わせての合計三点だ。これらのことからブローナス到着はなんと一日目の夕方に

なったのだ。正直街が見えた時は違う場所にしてしまったと勘違いしたほどで、フイリーがその姿を知つていなければ通り過ぎてしまうところだったほど信じれなかつたよ。

まあまあ速いことは悪いことじやない、むしろ良い事だらうからとりあえず置いておく。そして俺は街から少し離れた森に荷物一式を隠して街へと向かつた。なんでそんな面倒な事をするかというと、俺には一つの懸念があつた。それはフイリーにも解決し得ない事でもあつた物価の把握だ。

俺が持つてきた荷物はそのほとんどを金にするために運んで來たものなのだが、それが安い場合は問題ない。しかし高すぎた場合が問題だ。そうで合つた場合出所を聞かれたり、有名になつてしまふ危険性があるが、それは今は全力で回避したい。街道を逸れて走つてきたこともそうなのだが俺は極力目立ちたくない。これは性格的な問題ではなく、俺が叶えたい目標のためににはわりと必要なことだからだ。そして俺が持つてきた中で魔獣を倒して得たものはフイリーの常識でいうならば安いとは全く思えないものだ。

その内約はクマ型の魔獣の皮4爪5、猿型の皮と爪8セツト、狼の皮が21に虎の皮が1だ。常識的に言えばたぶん熊と虎はかなり強い部類で希少性も高いはずだ。熊の皮はかなりの強度を持つて、俺の全力の投球にも頭の部分以外だと破れることもなかつた。まあ衝撃を受けてめきれずに内蔵がひどい事になつてたけど。そして問題の虎だ。こいつは森で会つたなかでもダントツで強かつた。正直なとこ魔法を習得し切れていない俺ではかなりの苦戦を強いられ森で唯一フイリーの助力を借りて倒して獲物だ。その見た目は虎を一回りぐらいでかくして、その頭からは1メートルほどの曲刀が生えていると言つた魔獣だ。しかも俺命名のサーベルタイガーは見事にその大木をバターのように切り裂く曲刀をつかいこなして攻撃していく厄介極まりないやつだった。爪、噛み付き、曲刀の三段攻撃まじめんどくさい。

え？ サーベルタイガーは安易すぎるつて？ いや曲刀を使う虎

とかそれ以外ありえないだろ、ネーミングセンスの問題じゃなく見たらそう思うつて。

ちなみに剥ぎとつたその曲刀は森での私生活に大きな実りと幅を俺にもたらしてくれた。おもに工作的な意味で。

「問題が山積みになつていくのが見えてくる」

そうフイリーにこぼしながら街に入り一日を掛けて街を練り歩き物価を調査してたぶん問題ないとふんでいた狼の皮を売り宿を確保。ちなみに狼の皮も予想よりは大分高かつた。そして改めて荷物をとりに戻つて現在にいたるのである。

調査の結果俺の心配は杞憂に終わ

らなかつた。狼と薬草の

類は大丈夫そうだが、その他は軒並みやばかつた。猿と熊はそれなりに流通しているが、個人でまとめて売りに来るやつなどほほいな。商団が他の街で買い集めて売りに来るのが普通だつた。そして懸念どおり虎はやばかつた。素材どころか倒しただけでもかなりの懸賞金が得られるほど凶悪な奴だつたようで、その懸賞金2万デイクス、曲刀にいたつては5万デイクス（1デイクス約100円）といつ合わせて700万円相当の破格さである。あぶないあぶない、この腰に下がた刃を売つたらたちまち有名人の仲間入りしてまうとこだつたぜ。確かにあいつは強かつたな、フイリーと協力してなけりや俺もやばかつたし。

「さて忍び込みますか」

現在みなさんは夢の中へと旅立つた丑三つ時の真夜中だ。なぜ忍び込む必要があるのかといわれればこの街は城壁に囲まれており南北東西にそれぞれ大きな門が設置されており、街の人以外の人は入国審査ならぬ入街検査が行われるのだ。つまり荷物もチェックされてしまう。そうすると荷の内容がバレる可能性があるので。今思え

ば腰に下げた虎の曲刀は一回目の審査でよくバレなかつたものだ。まあ元からのレアさに加えおれはそれに柄と鞘を作つて加工しているのでたぶんわからなかつたのであらう。ただおれの服装を見て奇異の目を向けていたのはどうかと思う。

森の頃の原人ルックは勿論卒業している。現在はGパンになぜか袖が無くなつてしまつたシャツとその上に原人時代にお世話になつた鹿の毛皮で作つたベストを着てゐる。一応この世界で違和感はない感じにしたはずなんですけどね。

もしかしたらまた俺の常識が合つていらない部分があるのかも知れないし、いつか調べておこう。

「ではフイリー頼んだよ」

「ぬつふつふ。首都に忍びこむとかなかなかスリルがあつていいね

敬語をやめるようになつてから気付いたがフイリーはかなり遊び心がつよい、といが満載だ。イタズラやら遊戯といった物に目がない。さすがあの神にしてこの妖精ありだな、と凄く納得できるものがあつた。

「見つからぬいようにね」

「大丈夫よ。私くらいの妖精だと許可した相手か、よっぽど特別な力を持つた人以外には私の姿は見えないもの」

ほほう實に妖精っぽいですな、てか實際妖精なんだけどね。

「じゃあ、風よ吹き荒れよ！ 『ワールウイング』」

呪文を唱えてフイリーは街壁の方へと飛んでいく。ちなみに現在

フイリーさんの呪文により一部街壁が暴風圏に陥つており大変危険です。一般市民の皆様はおとなしくお家に帰りましょう。

「よし、行きますか『ライトプラス』」

俺が使つた魔法は光を強化するものだ。簡単に言えば元からある光を更に明るくするといつ至極単純なものだ。この世界の魔法は、こうここのいう効果がこいつふうに掛る。なんていうふうに決められているのだが、対象とか出力とか例えば飛ばす時はどれくらいの速度でどこに飛ばすかなどの効果以外の部分はわりと自由だ。どこまで自由なのかフイリーに聞いた事もあるのだが「さあ？」なんて可愛く首を傾げて返されて壮絶に悶絶せられた。

うむ、話がそれたね。ええっとフイリーの可愛さについてだけ？ よろしい三日三晩語り明かしてくれ。え？ 違う？ チツ。

とにかく俺は初級の魔法しかまだ使えなかつたのでそれらを色んな方法で工夫を凝らして使つて。そこから生まれた俺式ライトプラス。プラスシリーズは元からある火とか水なんかを多くしたり出力を上げたりするものだ。ライトプラスの場合マッチの光を松明替わりにしたりするために使われる魔法なのだが、俺は俺の目に入る光を少しだけ強化するように使つた。

「つむバツチシ見えるな」

目つていうのは光を取り込むことで風景を見てるわけだ。暗い所でなにも見えなくなるのはその光の量が少なくなつて。いるわけで、しかし基本的に全く光がないなんて場面はそうはない。だからほんの少しだけ目に入る光を増やしてやれば真夜中だって結構視界は良好だ。

準備万端整えて俺は南西の街壁を登りロッククライミングよろしく登りだした。事前調査の結果ここがわりと手薄な警備でこの時間

が最も忍び込み易いと予測した。まあほどんと勘ですけど。

そして作戦はまず強めの風を起こすことでおれの足音とか背中の荷物の音を悟られないようにする。そしておれの進路に合わせてフイリーが兵隊の持つランプの灯をそつとけしていくというものだつた。文化的にも進んでおらず明かりが街を一日中覆つているわけがない。ちなみに正門とお城は明るかつた。たぶん高いんだろうな色々と。ましてや今夜は三日月。例え地球と違つてその数三倍もある突きではあるがそこまで大きくはないので明るさは大したことがない。そんな中で手元の灯りを消されては足元すら確認するのは困難だろう。

さすがに隠密行動なんてやつたことなかつたのである種の力技で押し通ることにしたのだ。……気配を察知するなんてスキルを一般兵が持つてないでしようね？　ないよね？　大丈夫だよね？

すでに一人ほどやり過ごして現在壁のほぼ上段。そんなとこまで来て若干の不安を抱いていた。

「我ながら大胆なんだか臆病なんだかな？」

「この間抜けめ！」と自分を躊躇<sup>なぶ</sup>いつつ上辺に登り着く。左右確認をすると、少し距離のある場所で兵士が急にランプが消えてしまつてあわてて火種を探している様が見える。どうやら上手く行きそうだ。周辺の兵は至急確認求む

突然周辺に誰からかの声が響き渡る。学校の校内放送を思い出すそれではあつたがそれが俺の事をしているのはすぐに察しがついた。

「探知魔法とかあつたりするのかな」

さすがに首都の街壁に容易く侵入できるというのは公算が甘かつたかな。よし、うむ、仕方ない。必死に自分を鼓舞する。

え？ 何をするのかだつて？ 決まつてるじゃん逃げるんだよ！ なんで気合が居るかというとだな。

「ソ――――――イ」

高さ30メートルの壁から飛び降りなきやいけなかつたからだよ！

「ぬおおおおおおおおお」

身体は強化されてるが現在巨大な荷物を背負い中。下手すりや両足骨折の見るも無残なことになること受け合ひ、良くても背中の物はバラバラチリジリなのは目に見えてるぜ。だからおれは奥の手、プランBを使つぜ！

「『ウインドボール』！」

下級魔法のボールシリーズの風版。それは各種の属性の球、サッカーボール大のそれを相手にぶつける攻撃魔法だ。いや光属性のライトボールは単なる光の球だから攻撃はできないか……まあいいや。それをなぜ今だしたかと申しますとこれも俺式に工夫もとい魔改造して使うわけですよ。

俺の下方向にそれを出現させ俺はそれを四肢を使ってガツチリキヤツチした。つまりウインドボールはぶつかつた相手を吹き飛ばす風の塊。その力で俺の落下速度を相殺、吹き飛ばされる力は俺の四肢で抑えこみ、それでもっておれが球を地面まで移動させれば万事解決だ！

「ぐおおお

なんとか着地に成功した俺はそのまま近くに予め取つていた宿へと向かい、予め開けておいた窓から侵入もとい帰還を果たす。

「ハアハアハアハア、いやーなんとかなるもんだ」

そう一息付いていとこりにフイリーがやつてくる。なにやら機嫌の悪そうな顔をしているが……もしさ俺の身を案じてくれているのかー？「無茶ばかりして心配したんだからね」的な。

「…………私は今まで風の魔法は優雅で綺麗なものだと思って生きてきたけど…………キーデーの風術は無理やり過ぎてなんだか汗臭いよ」

どうやら自分の属性の魔法のイメージを傷付けられたらしための不機嫌さのようだ。確かに力技極まりないなのははたから見てもそうだろうじ何よりダサさは自分でもどうかと思えるレベルだつたしな…………あれ？ 目から汗が溢れてクルクル。ちなみにプランBの意味は何も無いだ。

第四話 もじこせや（後書き）

頭の良さとこなれっここと、ひたりと遅っここと、ひのの差が、木堂君でした。

## 第五話 想定外テース

さて侵入劇から一夜あけ、傷心な俺は激痛と共に目が覚めた。

「おお、これはひどい」

昨晩のプランBで俺はウインドボールに拘まるという凶行に出た。成功したから良かつたものの本来ウインドボールは風の衝撃波で相手を吹っ飛ばす魔法だ。それに触れ続けるといつ

ことは衝撃波をくらい続けるといつになるわけで。

「一見まるで病氣のようだ

「わー気持ち悪いー」

素肌で触れていた腕の内側の部分が内出血の為青い斑点がアチラコチラに浮かび上がっていた。多少ましだらうが服の下にも何個かはあるだろう。だつてすでに痛いんだもん。気持ち

悪いといいながらもフィリーがおもしろがつて斑点をつづいてくる。その嬉しそうな表情は傷心の俺への最高の妙薬ではあるが。

「ヒギイー！」

壮絶に痛いのだよフィリーさん。空手で打ち身などは数えれないほどしてきたが、これはそれの中でもひどい部類に入る。それが全身にあるのだ、一つの痛みが連鎖的に全身を駆け巡

る状態はさすがに苦悶せざるおえない。

「キャツキヤ」

「フイリーさんもしかして俺が痛がるのを見て喜んでる！？ いかん！ 俺の癒し系妖精がドS系妖精に様変わりしてしまつ！ 俺は痛みを堪え立ち上がり、食事にしようと話を逸らした。

「ねえキドー」

「なんだいフイリー」

穏やかな笑顔でフイリーに振り向く。そんな仕草も激痛が走り、笑顔の反面服の中では冷や汗が吹き出していた。

「なんで傷薬飲まないの？」

「あ」

以前疲労回復薬なるものの作り方をフイリーに習つたと言つたと思うが、その他にも幾つか薬の作り方を習い実際に作り置きしてあるものが幾つかある。その中でも森の中で重宝した

傷薬。傷の治りをよくし、痛み止めの効果も持つ大変便利な薬だ。いやいや修行期間の前半にしか結局使う機会が無かつたからすっかりしつかり忘れていた。

気合で宿の食堂まで降りて水をもじりと粉状になつた傷薬を口に流しこむ。飲んで数分で痛みがかなりマシになり、まるでロボットみたいな固い動きはしなくてよくなつた。走るの

はやばそつだが歩く程度なら問題なさそつだ。

しかもこの薬は効果抜群で血が流れるほどの切り傷も3日でふさがるほどの良薬だ。内出血程度なら3日で跡形も無くなつてゐる」とだう。

「回復魔法が使えたらいんだけどね~」

傷を瞬く間に癒していく回復魔法なるものがあるらしいのだが、光属性の中級以上にしかないらしく今の俺ではとてもじやないが使えない。なんでも神様に仕えて加護を受ければそれ

に属する魔法が割りと簡単に使えるようになるらしいが、正直この世界の神様がアレであつたため信仰する気はさらさら無い。

ないものねだりをしても虚しいだけで、今は今朝の朝食への期待で胸をふくらませようじやないか、痛さもましになつたしね。そして待つていると厨房のほうから食事を載せたお盆

がひとりでにこちらに向かつて来るのが見えてきた。これは……お盆の下に何か居るー?

「トトとお盆が俺等の待つ机に置かれる。そしてその下から現れたのは

「ハニワ?」

そう若干等身が短くデフォルトされているがまさにあの土で作られたハーフそのものだった。

「違うわよお密<sup>ヨーレ</sup>さん、それはミセスハーハウトイトよ。家事専門型の自動人形だけど見るのは始めてかしら？」

「ああ、俺はこの街には昨日着いたばかりだし遠くから旅をしてきましたもん」

「じゃあ後でもう一体のそれのつがいなミスター・ハーハウスがどこかで見れると思<sup>ハシ</sup>うから楽しみにしどとおくれ」

なるほどこいつは一応主婦型でもう一体旦那方のハーフがいるわけだな。たしかによく見るとエプロンを付けているし、なにやら少しだけ胸の膨らみがある。  
しかしハーフだ。

「どうしたのキーデー？」

「いや、実にファンタジーで俺としては喜<sup>ハシ</sup>びのだが、なぜか納然としない部分もあるんだよねこれが」

だつてハーフって和風じやん！ デザインした奴出てこい！  
考えても仕方ないので……なんか最近思考を投げ出している感がないなめないが、異世界に来たんだ問題何てぶっちゃけ全部なんだ。いちいち考えていては切りがないので、まあいいや

で済ましておく。

朝食は実に満足のいくものだった。焼きたてのパンとカボチャつ

ぽいスープに玉子焼き。そして見たことがない形状の野菜が色々入っていたサラダも実に美味しく頂けた。パン主体の

朝食としては満点ではないだろうか。昨日露天で食べた食べ物も軒並みおいしかったし、どうやら食文化はなかなか進んでいるらしい。メシマズの生活は元日本人としては耐えれないの

ではないかと心配していたので一安心だ。

さて俺としてはこのブローナスの街を拠点にしていきたいつもりなので午前中は街を散策という名目の観光をフイリーと一緒に行つた。昨日は露天に並ぶ商店通りしか歩いていなかつ

たので色んな発見や情報が次々と見つかって非常に楽しく有意義なものになつた。

まずあのハーフシリーズは結構な場所で見つけることができた。どうやら単純労働力として人気なようで建物に入ると大体のところを使っていた。露天しか回つていなかつた俺が見て

いなかつたのも仕方ないな。あともうとでかいゴーレムも警備隊の

詰所らしきところに鎮座していたが、さすがにハニワではなく「」つい  
い人型だった。まったく動かないのと兵隊さんに聞

いたら有事の際は動くらしい。あと警備兵さんが見回りの時に連れて歩いている探索型のハニワが兵隊さんの後を数体がトコトコ歩く様子はなかなかの鼻血ものだつたよ。

こつちにきて気付いたが俺はどうやら可愛い物に割りと目がないらしい。もしかして子供好きもそこからきてるのか…?

そして昼飯を済ませて俺はかなり大きな商館の前に来ていた。服装は午前のうちに買った長袖のカツターシャツと皮のベスト、そして綿でできたつぽい長ズボンに着替えていた。わざ

わざ着替えたのは目利きのできる商人さんにあのGパンとパークーを見せるのはまずいような気がしていたからだ。見た目に痛い腕の痣を見せるわけにもいかないし、商談つて格好でも

ないしね。

そう商談なのだ。

午前中に狼の皮だけはそれなりの商人に売りさばいたのだが、問題の猿とか熊の売り物は扱いは難しいが金に成るのも確かだ。そこで俺が考えた答えは、この街で有名な商人に直接売

るといったものだった。有名で腕の立つ商人ならばこちらの秘密を他に漏らすような信用を失つて損をする真似はしないだろうし、値

段も正当な額で引き取ってくれるだろ」と踏んだからだ。

露天や宿屋のおばちゃんに聞きとつた情報では、この街には五商家と呼ばれる国王認定のとても大きな商家があるらしい。その中でも評判が良くて手腕も確かなのは、傾きそつこ

なつた商家を僅かな期間で立て直した若手のホープ、ボライアズ家のジー二ー・ボライアズのようだ。

そんなわけで現在ボライアズ家の前に到着しております。是非とも一度直接噂の彼に会つてみたかったので在宅中に訪ねようと思つていたが、偶然今日は家にいるはずだという事を小

耳に挟んでいざ即刻直談判ですよ。

「お待たせしました。ジー二ー様がお会いになるのです」

取次を頼んだ門番君が帰つてきた。こんな名も知らぬ一般市民に会つのかどうかなんて期待は薄いと心配だつたが、門番君に持たせた売却リストに興味を持つてくれたようだ。目録は

傷薬などの材料になつたフライラジア、ヌスス、ミラーゼという薬草を15束づつ。これもかなり希少らしいので二つに回した。後は猿の皮と爪セツトが2と熊セツトが1である。わす

が有名な商人であつても熊やら猿の商品を一気に売るのは危険だと判断して期間をおいてちょっとづつ売ることにした。田の前に崖が見えてるのに突つ込むのは单なる無謀ですから。

商館の中はかなり豪華な内装を想像していたのだが、あまり装飾に派手さは無かつた。しかし色々な所にセンスを感じる配置や家具の数々にその手腕の高さが伺えた。

「いい仕事してますね～」

商人の手腕なんてのは測れないが、物の良し悪しは存分に計れま  
すぞ！ この匠の技が込められた家具を選ぶ商人が出来ない奴であ  
るわけがない！ この色、ツヤ、芸術的な曲線、あ

あいいな～あの椅子……いやあの机もなかなか……。

応接室に案内されて良質な家具にお花畠を咲かしてトリップして  
いると一人の若者が入って来た。

「お待たせしました。私がジーーー・ボライアズで御座います」

俺に丁寧な礼をするジーーー。

「あ……ああ、『ジーニー』」

「若っ！ いやいや若いって聞いてたけどこれは予想外に若すぎる  
！ 頭首ではまだないらしいけどその手腕と実績から、すでにそれ  
と変わらない働きを見せてるらしいじゃん？ なの

に田の前にいる青年はたぶん俺よりちょい上の二十歳前後ってところだ。若すぎるだろ！ 街の人から褒めちぎられるような男だから若いと言つてももつと上を想像してたわ！ というか

その若さで国で有数の頭首クラスってどんだけだよ！  
と内心のツッコミを全力で隠しつつ挨拶を交わす俺。

「すいません。お名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

「失礼致しました。私の名はキドーと申します。今日はよろしくお願ひいたします」

「フィリーによればキドウやマサシは、ひと口ばかりの言葉では発音しきこりしきので普段はキドーと名乗ることにしておる。

「いえいえ、ちがいかな若輩ものですがよろしくお願ひします」

「はい、内心バレバレなんですね完全に。なんか怖くなつてきましたよ。

「それでは早速商品のほどを見せていただきたいのですが」

俺は持つてきた包みを机の上で開いて見せる。

「これはほり「ステの爪と皮ですね……」うちのハッグベアーの皮なんて久しぶりに拝見しましたよ。おやこの薬草は……」

ひとり言をブツブツいながら品物を鑑定していくジニー。真剣なんだか目の輝きが半端ない……なんだかちょっと俺に似ているような気もしてきた、自分の分野に夢中になるつて

所で、10分ほど時間を掛けて隅々まで鑑定し終えたのか長く息を吐いて姿勢を正すジニー。俺の予想に反して薬草の鑑定に一番時間が掛かっていた。なにかまずいどこでもあつただ

るうか。

「それではハッグベアーの皮が一万一千ディクスと爪が三千ディクス、リコステの皮が一千ディスクに爪が八百ディスク。あと各薬草がかなり良質でしたので少しおまけして千ディスク

で買い取らせて頂きたいと思います」

合わせまして二万一千六百かふむ、高いな。日本円で216万円か  
……ぱねえ。

「はい問題ありませんのでその価格で結構です」

さすがにこの金額を釣り上げる商売根性は持ち合わせてねえよ。

「ありがとうございます。付きましては一つお聞きしたいのですが  
よろしいでしょうか?」

やべえ!? もしかして身元とか出所とか聞かれちゃう…? こ  
の人なら聞かないと思つてここにきたのに――!!

「……何でしょうか?」

「この薬草の根を包んでいるものは何でしょうか?」

んん? 根を包む? ああ草が枯れないように俺のなけなしのシ  
ヤツの袖を破つて根っこを土ごと巻いて水を含ませてたやつね。お  
かげで俺はノースリーブのお兄さんに進化出来たぜ

、大事な服の袖を泣きながらな破つたおかげでな。

「ああそれは  
」

普通に答えそうになつてあることを思いつぐ。この人程の方が態  
々俺に聞いてくるということは、もしかしてこの草を口持ちさせる

方法を知らないのでは？ 僕の婆ちゃんの園芸知識

からだからそこまで専門的な知識ではないはずだけど……。計算だけは早い俺の頭脳がそろばんをはじけさせる。

「さすがジー二ー様。それに付きましても商談をしたいと思つていましたのですよ」

今思い付いたんだけどね。

「ど、いこますと」

「これからその包みに関する話をさせて頂きますが、その詳細を買  
い取つていただきたいのです」

たぶん情報を買い取るなんて事は概念としても薄いだらうからこ  
れはかなり部の悪い賭けだ。確率は低いがうまく行けばリターンは  
デカそうだ。

「ほつ、話を買つところのはおもしろい事をおつしやる。しかし聞  
いてもない話に値段付けれませんがよろしいのですか？」

そういうの話は聞いてからしかその価値がわからない。なので聞い  
た後で金銭をジー二ーさんが払わなくても何の問題も無いのが痛い  
ところだ。

「はい、私が全てお話をした後でジー二ー様の「」采配で値段を決めて  
いただいて結構です」

「…………わかりました。お聞きしましょ」

さて、この若い商人さんの器はどれだけでかいのかな？

そして草の根を土」と保存することで劣化を防ぐ方法の詳細を俺なりに詳しく述べて話しあげます。ちなみに獵師であつた実家の秘伝だということにしておいた。

「素晴らしい

まあ贋いつくよね。この方法なら取つてから10日は完全な状態で持ち運びできるからね。今までそれをしてこなかつた環境だったのなら、これからこの薬の質の平均がガラツと様変わりするだらうしね。

「實に有意義なお話を聞かせて頂きありがとうございました。つきましてはこの話の値段なんですが……」

敬語で取り繕つた感謝ではなく、心からの感謝だと目を見て感じ取れた。まあこれだけ感謝の気持ちが伝わって来ただけでも話した

価値は結構あるな。人に感謝されるのはビックリ

界でも実に気持ちいい。

「20万ティクスでいかがでしょうか?」

「へー?」

「ああ、お気に召しませんでしたか!? それでは25万で!」

「ウハイ!?

「ええ更に上!? 仕方ありません28万でお願いしますーー。」

あまりの金額に言葉も出なくなり首だけカクンカクンと縦に降る俺。

「いやありがとうございます。キドー様とはこれからも長いお付き合いをさせて頂ければ大変ありがたいと思つております」

「ここのどばかりの輝くほどの営業スマイルを携えておれの右手を両手で握つて握手を交わすジーニー。」

すまん、見誤った。この御方の器の「力」はとんでもない大きさだったようだ。

度肝を抜かれて半分魂がはみ出た状態な俺だったが、その後も話を詰めて俺は商館を後にした。

とりあえず28万ディクスはその金額が金額だけに銀行で受け渡しすることになった。この世界にはしっかりと銀行制度がある。しかし俺は手続きも何もしていないので利用するこ

とはまだ出来ない。

持ち込んだ皮や薬草の代金だけ受け取り。そしてジーニーに話した薬草の保存方法は他には漏らさないことを契約書を作つて約束しそんでもつていつでもジーニー及びボライアズ家

の誰かと交渉できるようこの商館への入館証をもらつた。ただのペーぺーの俺に対し破格の条件なんだらうことはジーニーのはしゃぎようからなんとなくわかつた。商才にござい俺

では、あの話でどんな儲け話が生まれるのか分からぬが、彼にとつてはとんでもない価値があつたらしい。

持ち込んだ品と話の価格を合わせて30万ディクス余りの現金を手にした俺。

どうしよう。

## 第五話 想定外テース（後書き）

価値観の違いとはいつの世も大きな実りと戦乱を呼んで来るもので  
す。

## 第六話 ハーフモーモーハーフ

実りがありすぎて圧死しかけたボライアズ家からの帰り道、俺はなんとか理性を取り戻しホクホク顔で食事処や露天を練り歩っていた。

「フイリー今日は好きなお菓子なんでもおじつてやるぞー！」

「ほんとにー？ イヤツホー！」

超甘党のフイリーはなんでもというワードに興奮して商品を決めるためあっさりフラフラこっちにフラフラしていた。俺もせっかくだから晩飯は豪華などこで食事しようと周りの店を

涎を堪えれない状態になつて見まわつてゐる。なんという食欲という煩惱に弱いコンビなんだ俺らは……。

満足いくまで食べた俺らは宿への帰路についた。おみやげのお菓子まで買ったことに興奮してフイリーは俺の周りを飛び回り続けている。普通の人には見えないがもし見える人が男の

周りを妖精が飛び回る様子を田のあたりしたらどう思つんだろうか。腰を抜かす？ 僕に詰め寄る？ それとも苦笑い？

明日は色々装備品とか物資調達に買い物に出かけますかな。まだ魔法が不完全な俺では有事の際に対応できない場面があるかも

しない。そのための対応策は一応考へてあるので

武器屋か防具屋でもいって検討してみよつ。これだけ金があれば結構融通効くはずだしね。いやーお金って大事！

そういうえば銀行の口座も作らなきゃだめなんだよな。あんまりジーーさんを待たせるのも悪いし宿の女将さんに聞いてみるかな。順調すぎる未来図に浮かれて、まあなんだ俺は油断していたんだろつね。いいことあつたから。

「ぶつからないよに気を付けろよフイリー」

フイリーに注意を促した時、後方から俺に向かつて注がれる視線に気がついた。危険と隣り合わせの森で過ごしていた俺は、気配というより敵意みたいなものに敏感になつっていた。こ

のしせんはまさに獲物を狙う肉食獣のそれだ。だけどこは街中で俺が獲物に見えたとするならば。

「フイリー、めんな、『機嫌な』悪いけどさ俺等付けられてるみたい」

「えつ。あつほんとだね~顔の怖いお兄さんが三人ほどついてきてるよ~この街つてああいつの多いよね~」

少し上空に上がって目視で確認するフイリー。おつ三人もいるのかよ、聞き捨てられない話も飛び出したがまた今度にしてどうするか……。走つてまいちまつのも手だけど付きまとわ

れて宿の場所がバレるのも嫌だし、ほつておくには俺の主義に反するな。

宿には向かわず、むしろそれとは違つ方向にじばりへ歩き、薄暗い裏路地に入り込む。

「おつと兄ちやんそ」で止まりな

周り込んだのかつけて来ていた男の一人が正面に立ちふさがる。こんな分かりやすい誘いに乗つてくるとは三流なのか俺を甘く見てるのか、つてどいつも当てはまりそうだなこの駄目

さが溢れる顔からして。

「……なにか御用でしょつか？」

「あんた今日なかなかいい稼ぎがあつたんじゃねえか？ それを俺たちにも分けてほしくてよ」

むむ？ 稼いだことを知つてゐることはこつらボライアズ家あたりから付けて來たのか、気が緩みすぎだろ俺…………商館のあるあたりでほくほく顔でかい硬貨入れをぶら下げ

てりや、アホでも儲かつたってわかるだろ?に。しかも今は町人風の一般市民的な服を着ていい。悪党からすれば夜中に歩いている俺は丸々太つた皿そうなブタさんに見えただろね。

「稼ぎたかつたら汗水垂らして得たお金の方が気持ちよくなれると思ひけど」「稼ぎたから汗水垂らして得たお金の方が気持ちよくなれると思ひけど」

「はつそんな馬鹿なことより、てめえみたいな間抜けから頑いちまつたほうが俺らは酒がうまくなるのさー」

「ほほつ。苦労してお金稼ぐのが馬鹿ですか。そうですかそうですか」

「ほほつ。やりつけりは遠慮のいらない//のよつだ。今の発言にはピシコと眉間に来るものがありました。

「お断りします。てめえらみたいなクズに恵んでやる金は一デイクスも持ち合わせておりません。とつとと大人しへママのこむお家に帰つたらどうですか豚野郎」

すつごい見下した目線で挑発してやる。

「このガキほれやがったな」

強盗どもは眼の色を変えて獲物を引きぬく。

「せいや悲鳴を上げて後悔するんだなー!」

三人同時に俺に斬りかかる。もうほんとキレやすい最近の若者はこれだから困る。まあ俺のほうが確實に若いけど。

俺は振りかかるその手を正確に狙つて拳を放つ。持つていた獲物が三つ飛んでいき、それぞれの指は見たこと無いような方向に曲がつていた。

「ああああああああああああああ

痛みに絶叫るのはいいけどお前ら、なんで手を抑えるリアクションがまったく同じなんだよ！」ウトウト俱楽部って呼んでやろうか！ 痩せ、丸、じついと見た目もちょっと似てる

しな！

人が集まるのも困るので全員の顎を揺らして意識を断つ。すぐさま三人抱えていつも通りスタコラサッサですよ。

「こいつらなんだか汚いね」

ある意味では正解なんですけどフイリーって結構口悪いよね。

「さて確かこの辺に……いたいた

じゃあこいつらを君たちの「主人様のところまで引きずつていってね。

翌日、巡回に当たっていたワニワゴーレムが縄で括られ、額に「このひと泥棒です」と書かれた紙が貼られた三人組が運ばれてくる事件が起こつたらしい。

ハニワ君つて凄いね！

第六話 いざむことむかひ（後書き）

ハーフ回？

## 第七話 職人たちの晩餐

ものを言ひ事もできず大した戦闘力も持たないハーフゴーレムが強盗をしおり引いてきた一件は、しばらくの間酒場とかの話題にはなつたものの、結局俺のところまで辿り着く事は無

かつた。田撃者が話もできないハーフでは無理もないし、あの小悪党ではあの暗い中で俺の顔をしつかり見えていたとも思えないの大丈夫だとは思っていたんだけど

翌日の朝、宿屋の女将さんに早速銀行の口座の開き方を聞いてみた。なんでも身分証明書みたいなものがあれば誰でもすぐに作れるらしい。

「おうう。無いよそんなの」

「ならどうかのギルドに金を払つて登録するといいんじゃないかい？」

ギルドってたしか地球でいう総合協力組合みたいな？ 学校でいうなら委員会だな。ただ地球での団体よりこちらのほうが権限も強く、金をやり取りする額を大きいらしい。どうやら

そこへ登録すれば身分証明書的なものをくれるらしい。金には余裕

があるし、元から入るつもりでいたからこれは好都合だ。

「じゃあ生産ギルドに入りたいんで本部がどこか教えてもらいます？」

「フィリーからの予備知識により大事なところはバッチリ覚えている。

「生産ギルド本部は西門のところからもうちょっと北に行つたところにあるからここからは少し近いね。西門までいってそこの兵隊さんに聞いた方が早いとおもうよ」

「ありがとう女将さん」

「なにいってことよ」

「この女将さんまじ男前！ 勿論ほめていますよ？」

朝食を堪能した俺は生産ギルドにさっそく赴いた。フィリーはお菓子を食べ過ぎたのか俺の腰に付けたポーチで眠っている。この街の服には胸ポケットが付いていなかつたため急遽買

わされたのだが、ゆくゆくはお気に入りの服には全部胸ポケットを付ける予定だ。

俺の胸ポケットからヒョウ柄と顔を出すフィリーはマジで鼻血も

んだからね！俺としても是非これは叶えておきたかった。

さて生産ギルドの本部に着いたわけなんだが、この街の建物はほとんどが石造りか木造の家がほとんどだ。そんな中ギルド本部は全面を黒鉄で覆つたとてつもない建物だった。

「要塞かつ！」

ヒッシロミながら中へと入場。中も外に負けないほどに鉄だらけ。粗相でもしたら地下に設置されてそう拷問部屋に案内されるんじゃねつていうくらいなぜか圧迫感のある様相だった。

。

「ようこそ生産ギルドブローナス支部へようこそ！ 本田はどんな御用でしようか？」

「じへ一般的な接客なのに建物のせいで今日はやけに恥しくみえるぜ。もしかしてこれが狙いか！？」

「えーと、新規の登録をお願いしたいのですが

「はいありがとうございます。ギルド規約のほうはお知りでしょうか」

「いえ、説明お願いします」

なんでも階級が別れており最初は銅から始まるらしい、そして鉄、鋼、ミスリル、オリハルコンとランクアップしていくようだ。しかし義務として半年に一回査定が行われ実績及び成

果を一定以上示さないよランクが下がり、銅の状態で半年を過ごすと即除名になるらしい。

階級によって特典があるらしいがそれはあがつてからでいいか。あとは製作依頼とか仕事の斡旋を回してくれることがあるらしいが、基本生産、ギルドの面子は自分で仕事を探すのがほ

とんどでギルドから回される仕事はかなり特殊なものがほとんぢらしい。しかし成功の際にはかなりの高評価が得られるらしい。

それにも魔法鉱石ミスリルと神が人に与えたと言われる鉱石オリハルコンって実在するんだ。いつか手に入れてみたいものだ。といふかこの世界は魔法があるし神様が實際にいる

わけで、なにやらちょいちょい干渉してるのでそれがあつてもそこまで不思議なことではないのかな。

「それでは登録料千ティクスとこちらの容器に少量の血を入れてくださいませ」

用意された針で指先を突いて容器に血を垂らす。なんだか血を垂らす所を美人のお姉さんに見られるのは、いけないことをしているようでなんだか恥ずかしい。

「では証明書となるカードを発効致しますが、作成にやや時間が掛かりますので明日改めて受け取りに来て下さい。それではキター様の「J活躍をご期待しております」

銀行の為に証明書が欲しかったのだがビーハヤウ留田まではお預けのようだ。予定がなくなつたので午後から行こうと黙つてこいた武器屋くと足を延ばすことにする。ラッキーな事に武器

屋多い一角は生産ギルドに使い場所にあつたのでつこどとしてば都合がよかつた。

「おじや ましまーす」

店の前に並べられた武具を見て品定めし、良やうな店を見つけて入店する。

「いらっしゃい。何をお求めですか?」

愛想良く迎えてくれた妙齢の女性。

「えーと武器とか防具を見にきたんですか?」

「どんな物をお使こな?」

「おれは拳闘を得意にしてるんで拳につけるナックルなんてのがいいですね」

ナックルは「ひでいえばヤンキー御用達のメリケンサックみたいなんだな。

「ほつ珍しい客が来たもんだ」

奥の方で無表情のまま本を読んでいた爺さんが会話に入ってきた。目付きが鋭いが見た感じおそらくこの人がここにある武具を作った鍛冶屋なんだろう。

「まさかそんな体で魔獣にまで拳闘で挑むつもりじゃあるまいな」

「そのつもりですけど？」

「ハンツそんな細腕じや殴つた腕のほつが先に壊れるぞい」

カツチーンときた、職人さんには敬意を払つと決め手はいるがそこまで侮られては黙つていられない。

「昔気質の職人は武具を作る技量はあつても使い手の実力を見抜く目は持ち合わせていないんですね」

「抜かせ小僧が！ 過信をし過ぎると早死すると言つとるのだ！」

これは説得しないと売つてくれなさうな空氣だな。

「お義父さんお姫さんこそそんな喧嘩腰にならなくとも」

「うるさいわい！ ワシが売った武器を使う奴がみつともなく死んでいくなど許せるものかよ」

いい志ではあるが、おれには傍迷惑な話でしかない。しかし個々の武具はかなりの良質で、予算的にも手が届くこの店で、是非武具なんかを手に入れたいし仕方ない、実演といきます

か。

「お姉さんこの紙ちょっと使つていい？」

「あらやだお姉さんだなんて。いいわよ一枚くらい」

40手前っぽい女性のお姉さんは無理があるかと思つたが効果は抜群だ。

「爺さんその閉じかけた目でよく見てな

俺は紙を空に投げ出し構えを取る。胸の高さまで落ちてきたそれに貫手を放つた。

「どうよ、これで信用はできたかい？」

落ちたその紙には俺の放つた指一本の貫手によつて穴が開いている。紙に穴を空けるのなんて子供でもできそつなことではあるが、宙に舞う紙は軽すぎるため空圧で飛んでしまつた

つても破ることも難しい。それを俺は速さと鋭さを備えた貫手でど真ん中に丸く穴を開けて見せたのだ。力、速さ、そして技量を伴つていないとできない芸当である。

その紙をみて爺さん曰を限界まで見開いてしばらへ凝視していた。

「おんし何者だ？」

「セイは企業秘密です」

「なんのことかわからんが聞かれたくないのなら聞かんわい。だが確かに腕はあるようだ、わびを兼ねてどんな奴でも一個だけ半額にしてやるわ」

「じゃあさっきから気になつてたこのナックルの右手側を一個下さい」

「なんでい左手には装備しないのかい？」

「はい右手は攻撃を左手はなるべく防御に回すため軽めの鉄甲をつけてよいかと」

「なるほど、悪くない選択肢だ。それならあの奥にあるのはどうだ。四肢を守る為の鉄甲と脚甲のセットだ。速さ重視の戦士の為のかなり軽量に気を割いて逸品だ」

左手の鉄甲を試しに付けてみる。手の上側だけに鉄をしつらえてあるそれはかなりの軽さながらその強度も期待できそうだ。脚甲も前面はプレート入だがその他は丈夫な皮で作られた

軽装だ。かなりいい感じだし、俺の希望していた条件ともピッタリと合った。いい仕事してますね～爺さん。

「じゃあ後はお前にあわせて調節するからひとつ待つてろ」

返事も待たずにナックルと防具を抱えておくに引っこんでいく爺さん。

「あ、値段聞いてない奥さんお幾らになりますか？」

「はい、ええっと全部で5千2百ティクスですね」

予想通りなかなかのお値段。しかしこの質でそれならばむしろ安いかもしない。よし決めた！ 他の武具も同じで全部買つてしまおう。

「えっと他にも欲しい物があるんですけどこんなのがありますかね？」

爺さんが裏で金槌を鳴らす音を響かせる中で俺は奥さんと相談しながらさらりと多くの品を買い上げることになった。

結局あの爺さんの店『ピート&ガツツ』で大量の買い物をした俺は大風呂敷で荷物を背負つて宿屋に帰還中だ。なんだか最近背負つてばかりな気がするな。そのうち子泣き爺も背負う

んじゃなかろうか。いやいやそんなの想像したら背中の荷物が重く感じてきた。

人通りの多い中央通りのテクテク歩いていると、またあの視線が向けられたかなり弱々しいそれだったのだがどうやらスリだつたようで俺の腰に下げた皮袋に伸ばされた手を掴みとつ

た。

「いやいや一日連續盗みに合づとか狙われすぎだろ俺」

呪われてる、もしくはとても間抜けな鴨にでも見えるんだろうか？ 視線も向けずに掴んだ犯人には体を向き直す、だが何だか違和感があるぞ。細さとか高さとか手触りとか。

「なにすんだよ！」

そこにいたのは盗人もとい小さな子供だった。

「人の物に手を出すのはいただけないな」

見るからにボロを来て顔もいつ洗ったのか分からないようなほど汚れている。そして何よりガリガリだ。いつたいこいつの親は何を考えているんだ。

「うるせえ！ まだ触つてもいいだろ」

「まあね」

暴れて逃げようとする少年を掴んだままやり取りしている中にグウーといつ少年の腹の虫が鳴り響いた。

「なんだ腹が減ってるのか、俺も減ってたしついでだ少年、お前もなんか食うか？」

「え？」

奇つ怪な物を見たような顔で俺を見つめる少年。ふつふつふ変人と呼ばれた俺にはその目線は慣れすぎて何も感じねえよ。それもどうかと思つのは無にしてくれ悲しくなるから。

少年をそちらにそちらのベンチに座らせて露天から肉と野菜を挟み込んだ大きなパンを一つ購入してくる。特製ソースが自慢の一品らしいがそのソースの香りは俺の食欲をじつとう際

立たせていた。待たせている間に逃げるかと思っていた少年はちゃんとベンチに座っていた。どうやら周りの露天から匂う香ばしい香りに食欲が勝てなかつたらしい。帰ってきた時お腹

を抑えてこっちを睨みつけてきた。

なんだろう。待て！ お手！ ちん ん！ って言いたくなつて

来たけど」「ちで通用するのかな」の話。

「ほれ出来たてホヤホヤだ、急いで食つて喉詰まらせるなよ」

パンを受け取った少年は一瞬だけ悩み唾を飲み込んだ。まあ見も知らぬ他人から食べ物なんかもらつたら疑うのが当たり前だよな。なかなかこいつはしつかりしているようだ。

五秒ほど悩んで意を決したのか少年は一心不乱にパンを貪り出した。見た目そудな10歳くらいかな。歳のわりにはちょっとデカすぎるかなと思ったがこの調子だとあっさり完食できそうだ。

無言で食べる少年の横に俺も座つてパンを食べだす。うむ、この間に挟まれたソースはケチャップっぽいがかなり酸味が効いていて肉と抜群の相性を發揮している。露天で買った食い

物の中では一番の当たりだなこれ。

俺が食い終わつて少年の方を見ていると下を向いたまま固まつていた。

「なんでだよ……」

「なにがだよ」

「なんでおれに食い物奢ったのか聞いてんだよー。」

少年の顔には涙を流した後が見れ取れた。あーなんだろうチクチクしてきた。

「お前腹がへつて腹がへつて仕方なかつたから俺の金を盗もうとした

てたんだろう?」「

「……そうだ」

「でも俺はさすがに全額取られるのは困るんだわ。だから間をとつて晩飯を奢ることにしたわけだ」

少年に全力のドヤ顔を披露する。しかし少年はなんとも言えない表情をしていた。あつれーツツツツ待ちだつたんですけどねー。

「ウザさが凄い」

フィリー やんツツツツツツモー。

「わけわからんねえ……わけわからんねえよ…………」

そりゃ わからんだけ。だって思い付きだしね。

「ん? パン全部食べなかつたのか?」

てつまづ完食したものと思つていたパンはその半分が少年の手の中こぼだつた。

「これは帰つて妹たちにやる……」

おこおこおいおいそんな劣悪な環境にまだ子供がいるのかよ。明日になつたら殴り込みにいつてやるうつか。

「オーケー分かつた。だがそれは俺がお前にやつたんだ全部お前が食べー!」

「でもっー。」

「そのかわり

俺は腰の革袋から中銀貨一枚、百ティクスを少年に差し出す。

「これで土産でも買つて帰つてやれ」

「ううのは偽善なんて呼ばれるんだううね。畢竟は無くはないが、見逃す選択肢はもつと無い。」

何も言えなくなつた少年はボロボロと泣きながら残つたパンを頬張り出した。

この時俺は今だ想像が追いついていなかつたのだ。生まれた国が豊かすぎて平和ボケしていたのだろう。この世界の果てしない厳しさと理不尽さを、そして悪意持つ者たちの姿を

あのボロを着た少年と少しだけ話しをして俺は宿に戻った。彼については思うところが多々あつたが、何かあつたらこの宿を訪ねて来いと言つてあるので大丈夫だろう。苦労したのか幼いくせにしつかりしてたからな。

「キドーってホント変わつてるよねー」

「だがそれがいい」

「私も面白いからそれでいいけどね」

「自他共に認める変人が妖精にも認定されたよ！ やつたね……いややめとこう。」

とりあえず今日買い込んだ物を自分の部屋の床に並べる。爺さんに調節してもらつた意外のものは俺なりに改造して使うつもりでいるからだ。買つてきたのは皮で出来たポシェットと小さな手投げナイフ30本とそれを収める皮の入れ物10個だ。徒手空拳で戦いしかも魔術が不完全なおれではどこかでリーチのなさが問題に成ることがある。実際ヨルガの森のサーベルタイガーにはフイリーの援護無しで触れる位置まで距離を詰めることができなかつた。

そこで投げナイフだ。森では石を投げて代用していたが、それが

鉄でしかも刃物であるナイフならば更に殺傷能力は上がるだろう。他にも色々応用が効きそつだし俺の肌にもあつてると思うので戦闘スタイルに取り入れてみる。

ポシェットは腰を一周して腰の位置に小さなカバンを固定するものだ。カバンといつても拳が丸々一つ入るほどの小ささなのだがそれが右側に設えてある。そこには武器屋で買ったナックルを収納しておく予定だ。定位置に設置しておけば手を突っ込むだけで装備が完了するという手早さはなかなか魅力的だ。

次にポシェットの皮と同質のもので出来たナイフを頑丈な糸で五つ一組で斜めにして組み合わせていく。皮加工は社会見学で一回だけ体験した事がある程度だつたが、繋ぎ合わせるだけならなんとかなるだろつというよくわからない自信で行つていた。まつ結局成功したんですけどね。そしてお次にそれをポシェットの腰巻の後ろにあたる部分に金具を使って固定していく。そして左側のスペースには細い筒が入るように皮を6箇所追加してそこへ買つてきた小さな試験管のようなガラスの筒を指し込む。試験管の中身はフイリー直伝の水で溶いたものを入れる予定だ。疲労回復、傷薬に解毒薬を一本ずつだな。そんでもつてその腰巻には更にズボンのベルトとも連結出来るように金具を追加して完成だ。

「できた――！」

作業に集中していた為に時間の経過をかなり無視していたらしい。喉がカラッカラに成つていたので机に置いておいた水を飲み干す。

「ふつはー！ 作業の後のこの一杯

昔からおっさん臭いとよく怒られた恒例行事だが、この時に飲む水はどんな飲み物よりもうまいんだから仕方ない。

「おーおー

夢中で作業する俺を黙々と見つめていたフェリーが完成した俺式ホルスター（収納するのは銃ではなくナックルだが）を近くによつて輝く瞳で観察している。期待の眼差しに答えるために早速自分の腰に装着してみる。しつかり固定されているかチェックしてみると「どうやら問題は無さそうだ。

「よしよし、一から作つたわけじゃないがこっちに来て作った作品第一号だな」

ヨルガの森で壁やらベッドは作つたが俺的プライドにかけてあれは作品と呼べるものでは断じて無い。

ここまで言えどわかるだらうがつまり俺は必要な装備を手を使わずに収める場所を皮のポショットを改造して作つたわけだな。これに鉄甲と脚甲を装備すれば第一段階としては完成だ。本当はホルスターの前部分にも付けたい物があったのだがそれは後日にする。もちろん第一段階なのだから第一段階もあるがその完成は大分先になるだろう。今のところ目処すら立つていないわけだしね。

「それにしても……」

鉄甲と脚甲、ホルスターを装備し武器も全て設置した状態で部屋に用意された鏡の前で自身の姿を確認する。

「…………いい

特撮ヒーローといつぱりちかといつと忍者だがその姿は大いに俺を悦らしてくれる。

「うれしかったね、キドー！」

「おー！ フィリーに会えた次ぐらいに今感動しているぞーー！」

俺はしばらく色々なポーズをとつたりして「一二三四顔で動作チェックを繰り返す。今の状態を他人に見られたら俺はこの街を出ないといけないかもしれないぐらい恥ずかしい様相だったが今は完成の喜びが上回っているので考えてもやめられない。

だいたい十分ほど鏡の前に立つた頃には既にフィリーが目を擦つてオネムの状態に成っていた。もうそんな時間が、確かに外からの音も全く聞こえなくなってきたな。

この世界に来て最も困った事は時計が無いことだ。太陽とか星とかを観察すれば大まかな時間がわかるのだが室内ではまるでそれがわからないのだ。

いい感じに疲労したし俺も眠ろうと装備を外そうとしたその時、宿屋の階段を駆け上がりこちらへと走ってくる音が廊下から聞こえ出した。襲撃！？ とつさにナックルを装備してドアへ構えを取る俺。

「兄ちゃん！ 助けてくれ！」

ドアを開けて現れたのは毎間に泣きながらパンを食っていたあの少年だった。

騒ぎに飛び出してきた女将さんに事情を説明して謝り、取り乱す少年リックキーをなんとか落ち着かせた。少年の話を聞いて俺は愕然としてしまった。

俺はてっきり家庭内暴力、そんな程度の問題だと思つていた。ああなんて甘い、なんて大馬鹿野郎なんだ俺は。

彼はストリートチルドレン。親も家族も家もなくその日その日を路上で暮らす孤児だったのだ。一人でなんとか生きてきた彼は最近ストリートチルドレンが集まつて暮らす集団に仲間入りしたらしく、妹達といったのは彼の年下の女の子のことらしい。彼等にとつては共に生きるのは家族同然の信頼関係があるのかもしれない。

俺に100ディクスを貰つた少年はありつたけの食料を買い込んで仲間の待つ場所に帰つたらしい。うまい飯を腹いっぱい食べたこの彼等にはこれ程嬉しいことはなかつたつてさ。もちろん仲間たちは大いに喜んで食べ物に飛びついて食べていつた。その嬉しさのあまり一時はお祭り状態になつた。

そんな騒ぎを彼等の住むスラム街のボスが通りかかつた。大量の食料を食べる子供たちを見て彼はこう言つた。

「ほう今日は大漁だつたらしいな。なら三ヶ月たまつての場所代を払つてもらおうか糞餓鬼ども」

なんでも彼等がボロ家に不法滞在しているのを黙つといてやる替りに毎月スリなどで稼いだ金の一部を払わされていた。しかし三ヶ月前に一人の女の子が病気を患つてしまつたためその金は滞納してしまつていたらし。

「違うんだ！ これは貰つたものなんだ！ 本当なんだよ！ だからおれが稼いだ金じやないんだ」

スリで稼いだ金じやないんならそのボスの取り決めには違反してはいないので当然の言い訳だろ？

「ああん？ 誰がてめえらみてえな汚いガキにこんだけの食いもん恵んでくれるやつがいるんだよ！？ それに百歩譲つてそうだとしてその金をオレ様に献上しない理由はないだろ？ がつ！！ なめてんのかテメエ！！」

ボスに近寄り懇願していたリッキーは殴り飛ばされてしまう。それを見て一人の少女がリッキーに駆け寄る。

「まあいいや。予定より少し早いが攫つちまうか

ボスが指を鳴らすと周りから「コロッキが十人以上現れた。

「あなた最初から私たちを売るつもりだつたのね！」

リッキーを介抱していた少女がボスに言葉で噛み付く。

「相変わらず乞食の癖に頭がよろしいなトウカ。この俺が態々警備兵に金を握らしてまで前らを庇つてやるわけね――――だろ――

がよ。やつとお前らを奴隸として売る算段がついたんだ。しつかり今までの恩をたっぷりの金にして俺に返してくれよ？」

トウカと呼ばれた少女にボスが手を伸ばしたがそれを少女は全力ではねのける。

「触らないでこの外道！ あんたに触られるくらいなりじで舌を噛んで死んでやります」

「そんなこというなよつれねえな～」

今度は油断なくトウカの襟首を掴んで片手で持ち上げるボス。

「おんや～お前今までそのなげえ髪と顔の傷で気づかなかつたがなかなかいいモン持つてんじやねえか。湯浴みでもして綺麗に着飾れば美人になるぜ。そうだ今夜は俺の相手をしてくれよ、最近色々溜まつて困つてるんだよ」

その時トウカは舌を突き出して噛み切るために口を開ききる。

「おつと死ぬのはいいが、さつき殴ったガキの確か～リッキー？ だつたか、お前が寂しくないようにはいつも一緒に道連れにしてやるがそれでも死ぬか？ それにお相手してくれるなら一人くらいは見逃してやってもいいんだぜ？」

「宙吊りになりながら増える少女。

「あんたは地獄すら生温いわ！」

「商談成立だな。野郎ども一人残らずかつ攫え！！！」

そこで気絶したリックキーは次に目覚めた時は奴らのアジトに連れ込まれる寸前で、自分はどうやら気絶していた為拘束されずに肩に抱えられていたので、必死にもがいて逃げ出し、ここまで一心不乱に走つて来たのだ。

「もう兄ちゃんしか、兄ちゃんしかいないんだ。警備隊のやつはグループだし俺たちみたいな乞食なんて騎士が助けてくれるわけない。むしろ居なくなれば清々するだろうさ。でも…………でもアイツらはおれにやつとできた家族なんだ！仲間なんだ！頼むよ…………頼むよ兄…………ちゃん…………俺なんでも…………するから…………死んだつて構わない…………だから…………たすけてください」

俺は泣き崩れるリックキーを抱きしめる。

「よくここに来た。よく逃げ出してきた。お前は偉い、本当に偉いぞリックキー」

頭を撫でてやると体の強張が解けていった。

「後は任せとけ。愛を守つて悪を碎くのがおれの役目だからな」

立ち上がり用意してあつた赤いバンダナを頭に巻く。ああ力が溢れてくる、まるで死きる」とのない無限の如く。

「フィリーー

「わかつてゐよ。付いて行けばいいんでしょ」

「いや君はここにてリッキーを守ってくれ

「……一人で平氣なの?」

「大丈夫さ今夜の俺は誰にも負けない」

力が体の外にまで溢れ出して空気が揺れているよつた氣がした。

「わかつたよ。お土産期待して待つてゐるわ

本当に今日彼に会えてよかつた。本当に今日装備が整つていてよかつた。本当に彼がここまで辿り着けてよかつた。

不謹慎だがこれは幸運、運命かもれない。心の底から感謝してやるよ神様方。

今日俺は成りたい俺になる。やつ正義のヒーローに俺はなる。

私はトウカ。11歳の頃、理由もわからず親に捨てられてストリートチルドレンになつた。絶望と理不尽への憎しみに苛まれて消えてしまいそうになつた私ではあつたのだけれど生存本能つてやつは思ったよりも強くて、気が付けばご飯を探して街を彷徨うストリートチルドレンの仲間入りを果たしていた。

最初の一年は本当に酷かつた。私が女で乞食つて知つた悪人顔の男が私を狙つて拐かそうとするなんて日常茶飯事で、ほんとうにこの寸前までいつたことも結構あつた。だけど幸か不幸か、結局私はなんとか変態どもの手から逃れる事に成功して生きていた。

ある雨の日、例によつて私は男に襲われ命からがら逃げ出して下水の入り口で座り込んでいた。

「なんで……なんで私ばっかりこんな日……」

夜には泣かない日の方が少なかつた。そして憔悴しきつた私は本当に心が折れてしまいそうになつていて。終わらない飢餓感、安寧のない暗闇、襲い来る欲望に汚れた手。一人の人間の心を碎いてしまうにはどれ一つとっても十分なものだと思うわ。

「寒いよ……誰か助けて……」

自らの命を断つ事を思考に浮かべ出した私が聞いた声は下水の奥から聞こえてきた。

まるで私自身の気持ちを代弁したその声の主を探すため私はヨロヨロと立ち上がり下水の奥へと進んでいった。そこで見たものは闇で覆つてしまつた私の心を見事なまでに打ち碎いた。

私と同じストリートチルドレンだというのは人目で分かつた。で

もそこにいた彼女は私より遥かに年下、六歳ほどしかない少女だったのだ。なぜかさっきまで弱音を吐いていた自分がン情け無くて下唇を噛み締めていた。

ついさっきまでは私は世界で一番私が不幸で恵まれていないと思っていた。そして恨んでもいた。なぜ誰も助けてくれないの？ なんで私はこうなってしまったの、と。だが今出会った少女は同じ環境に六歳の身で過ごしている。

それがどれだけ辛い事か、どれだけの恐怖に怯えて暮らしていたのかを私は想像することが出来なかつた。だけど既に骨と皮だけのようになってしまった体がその壮絶さを私に物語ついていた。私は普通であつた頃の知識を使ってなんとか生き延びれている。だけどこの子は……。

「大丈夫、大丈夫よ」

別に何かを考えたわけじゃなかつたけど、自然と体が動いていた。

「私があなたを守つてあげるから」

きつと私と似ていたから、暗闇の底に囚われた私たちには助ける光が必要だつた事を知つていたから。

誰も助けてはくれない世界。絶望がどれだけ恐ろしいのかを知つている私だつたから。

だから決めたんだ。私が助けようつて。世界中の人私が私を助けて

くれなくつても私が誰かを助けようつて。

それが私なりのささやかな世界への復讐だつたのか、それとも希望だつたのかは自分でもまだ分かつてはいない。

私は街にいた子供達を集めることから始めた。一人が弱々しくても一つになれば少しばらしになるはずだ。それに私たちには誰かの助けが必要だつたから。

歳の小さな子はすぐに合流しだしたけれど、大きな男の子達は反発する子が多かつた。理由はその目を見れば直ぐに分かつたしまつた。信用できないのだ。騙し騙され、裏切ることでなんとか生きてきた子には「助け合おう」なんて言葉は一番信じられない言葉だつたと思う。分かるわよ、私だつてそうだつたから。

だからこそ無理強いはせずに根気良く説得し続けたわ、話を信用してもらう前にまず私を信じてもらうために。私がどれだけ本気なのか知つてもらうために。

一年もかかつちやつたけど私はなんとか街中のストリートチルドレンを集めることができた。総数で34名の大所帯になつたのは驚いたし、何より15歳になつた私が最年長っぽいというのがすごいく意外だつた。

集めたのも私なら引っぱって行かなきやならないのもどうやら私のようだ。心に決めた決意はさらに強みを増していく。彼等彼女等を守る為には私が居なきやいけない。信頼を預けてもらつたんだ、最後まで責任をもたなきやだよね。

だから私は人であつたこの最後の嬉しかった思い出を消すことにしてたんだ。

今だに私を狙う男は少なくなつたけども居なくはない。そいつらから狙われなくなるために私はボサボサに伸びた髪を留めていた紐を解き、捨てられる前に父様にかわいと褒めて貰つた顔に傷を付けたのだ。家族になれた子達を守る為ならなんだつて喜んで差し出すわよ。

その日から私を狙う男は居なくなつた。

相変わらず苦しくてひもじい日々ではあつたけどなんとか一人も欠ける事無く一年を過ごす事ができた。きっとこれは順調だと私は胸を撫で下ろしていた。でもそんな安堵は悪意によつて叩き壊された。

突然スラム街のボスが私たち全員を売りさばくために攫つてしまつたのだ。

そして今、私はボスの無情な条件を飲み込んで守り続けた貞操を引換にたつた一人だけを救える契約を果たそうとしていた。5年ぶりに湯浴みをし、破れていない綺麗な服に袖を通す。本当ならば喜ぶべきことのはずなのに私の心は死んでしまつたように動かなくなつてしまつた。

やつと……やつと小さいけれど幸せを感じれるようになつていたのに、笑顔で誰かに笑えるようになつたのに、助けることが出来たと思つたのに。

男たちの集まる部屋へと私は足を踏み入れる。一番嫌いだつた肉欲の目線を全身に浴びたがそれでも私の心は揺れもしなかつた。

「へつへつへ、見ろ俺の目は確かだつたるう、ほんともうちよい肉を付けて傷を隠せば超が付いてもいい上玉だぜこりや！」

私が守ってきたものを全て奪つ男が自慢気に語る様を見て私は憎

しみの目で睨んで見せた。死にかけた心が最後に選んだ心の形が憎しみだつたのは残念だつたけど。でも終わり。ここで終わり。決意で闇を切り裂いたつもりだつたのに、私の心はまた絶望に沈んでしまう。次こそ耐えられないだろう。私の心は粉々に砕けてしまう。でもつ……。もう自分の意志で動かせないでいる体に一滴だけ残つた心を注いで唇を動かす。

「タ……ス……ケ……テ」

絶望に飲み込まれるその中で、それでも私は手を伸ばして天を仰いだ。  
誰も助けてくれないとつても願わざる負えなかつた心の叫びを叶える者が天から舞い降り、最後まで諦めなかつた彼女に奇跡を与えた。

## 第九話 正義の鉄拳

リッキーに聞いていたアジトは直ぐに見つかった。荒廃したスラム街にそびえる旧ナーブ教会。しかもきつちり強面の見張りまで立たせているんだ目立ち過ぎにも程がある。そしてそこまできた俺は最後の装備を装着する。鼻と輪郭を隠すマスクのような鉄の仮面だ。仮面と言つても目は見えているし、口も影になつてはいるが少しは見える構造だ。これは露天に売つているのを一目見た瞬間に衝動買いしてしまつたものだ。せつかくなので改造して顔に装着できるようになっていた。これで完全に見た目は忍者ルックそのものである。別に狙つたわけではない。気に入つてはいるけど。

さて作戦はどうする？

誘導？ 一人じゃ無理。

ちょっとずつ奇襲？ 時間がかかり過ぎる。  
人質だけ救出？ 30人超えは厳しすぎ。  
ならば？

「悪党に小細工無用！ 正面突破あるのみよー！」

小細工も嫌いじゃありませんけどねー！

隣の建物の屋上に上り全力疾走。そんでもつて建物に見えます大きなガラス窓に向かつて全力ジャ一＼＼＼＼＼ンブ！  
ガラスを見事に突き破り着地に成功！ つとしまつた！？ 今の大ジャンプで窓を壊す時はヒーローらしくキックにするべきだったか！？ 次の為の課題にしつくか。

「テメエ！ フザケてんのか！？！」

どうやら敵の集まる広場のド真ん中に降り立つたらしい。これは

「ラッキー。おや？」の田の前にいる女性は……顔に傷があつて16歳くらいでうつすら赤くて長い髪……。

「もしかしてトウカさんでしょ？」「

「はつはつー！」

なんだ、この麗しの生物は……。

「しばしお待ちを。あなたを蝕む闇を今から掃除しますゆえ」

「む我ながらキザすぎた。いつの間にこんな歯の浮く台詞を言えるようになったんだ俺？ 初ヒーローで興奮しそうたか？ 謎が残るが取り敢えずはまず悪党退治だ。おれはボスが座りそうな椅子に座る汚い野郎に体を向ける。

「ええとこのボス、名前はたしかゲ……ゲ……ゲロ？」「

「ゲイロスだ糞野郎！」

「一応一回だけ警告してやる。いまから一切合切の犯罪行為をやめろ。そんでもって明日からは真っ当に働くなら見逃してやつてもいいが、どうする？」「

「はああ！？ 貴様頭いかれてやがるのか！？ この人数相手にためえ一人でどこに見逃す要素があるんだよ！」「

「まあ了承するなんて思つてはいなかつたさ。お前ら性根の底まで糞みたいだからな」「

騒ぎを聞きつけて他の野郎も姿を見せ始める。

「ほざいてやがれ。じゃあ俺様からも聞いてやるよ。今から泣いて命乞いをするなら両手で勘弁してやるぞ？」

「ん~ 人数は百人くらいか

「残念だつたな！ もつと少ないとthoughtかあ！？ ゲイロス様の作った組織は巨大で無慈悲な極悪集団なのよ！」

「ああ実に残念だ。千人くらい居るかと思つて来たが、がつかりだよ」

喋り終わつた瞬間一番近くにいた一人に自分でも見えないほどの速さの突きを放つ。かなりの巨体だつたが見事に吹つ飛び体の半分くらいが壁に埋まつてその勢いはやつと止まつた。

「警告は終わつた。生きるか死ぬかは運次第」

腹に全身の力を溜めて解き放つ。

「だがてめえら外道に手加減する気なんて一切ねえから覚悟しやがれえええええ！…………！」

建物が震えるほどの大声で宣戦布告に近い死刑宣言をかましてやる。全力で叫んだのはこつちにきて始めてだつたがこれもすごいわ。遠目に見える窓ガラスにひびがはいつてやんの。

殺氣を隠すことをやめた俺は全力で攻撃を繰り出すしていく。突進しながら正拳突き、そこから隣へ回し蹴り、着地と共に前蹴りを放ち、再び目標に駆け寄つていく。凶悪な攻撃が次々に悪党どもを

壁へ天井へ地面へとめり込ませていく。

「ハッハ！　自慢するだけはあつて鍛えてるじゃないか！　なかなかいい殴り心地だ！」

びっくりすることにこいつらはハッグベアー並の耐久力を誇っていた。ほぼ全力で殴つても手や足は簡単にひしやげたが体を突き抜けずに耐えていた。ただし衝撃を殺せずにほとんどが吹つ飛んで無残な結果に陥つているわけだが。流石に皆殺しにする気は無かつたのでナックルは装備してはいない。それでも生きてるかどうかは怪しいところだろうけど。

開戦して僅か三分でその人数が半分まで減つたクソッタレ共。阿鼻叫喚の地獄絵図になりつつあつたがどうやらボスグロが指揮した部隊が隊列を整えていた。

「なんだあんた名ばかりのボスじやないんだな」

ちょっと感心。

「つむせえこの化物が！　これで死んでしまえ！」

どうやらボスグロが集めた野郎どもは魔法の使い手だつたようで六人ほどがファイヤーボールを俺に向かつて放つてくる。避けるのは簡単だが装備というか奥の手の試運転には丁度いい。俺は腰に挿したナイフに手を添える。

「『ウォーター』『コード』」

コードシリーズは今まで出た魔法とはまた系統が違う付加魔法だ。物体にその魔法の効果を与えるつてのが単純な説明だが、ウォータ

「コードを今みたいにナイフに付加させると水でコードティングされたナイフが出来上がるわけだ。魔法の面白い現象として、なぜか使用者には生み出した魔法の影響を及ぼさないことだ。水に包まれたナイフなのに俺は水に濡れることなくナイフが掴めるし、火であつた場合も熱くもないし燃え移つたりもしない。服は燃えたり、濡れたりするだろうと思うが、そこまで魔力を流しておけば大丈夫のようだ。

威力が無いなら足せばいい。筋力だけは有り余り、投擲の威力はかなりの物だつたのでそれを魔法に応用して相手の魔術のぶつける。無駄に魔力のこもつた俺の魔法は威力こそ上がりはしないもののやたらと頑丈なんだそうだ。つまり同じ威力の魔法に当たつた場合

「相手の魔術が先に壊れる」

「ぎゃああああああああああ」

しかもボールシリーズの魔法は直線で飛ばすのがオーソドックス。ナイフを魔法に向かって投げればその向こうの術師に当たるのは必然なわけだ。

まあ精度がまだいまいちなんで術師にまで当たつたのは3人だけだ。しかしこれはスプラッタ。腕やら肩がすっ飛んでいる。これは付加魔法がすごいのか判断に困るところだな。要実験だな。今ので最低でも隙を作り出せる算段だつたのか中級魔術を構築しようとしていた奴がいたのでそいつの足には直接ナイフをお見舞いしておいた。結構な深手を負わせたので、痛みで集中力を保つことはできなくなつたろう。

「うわあああ。あああああああああ。ちくしょう畜生。そうだお前そこの女、なかなか美人だろ？ そいつをやるから手を引か

ねえか。なんならもつと美人の奴隸を何人だつて攫つて来てやるさ。  
なんならお前の好みの女でも構わないぞ」

ああ」こいつホントに俺の神経を逆撫でさせるのがうまい。

「今決めた、お前は間違いなく最後に殺す」

俺は逃げようとするものから攻撃を加えて行動不能にしていく。  
運悪く死んだ奴がいるかもしれないが知ったことではない。ボスゲ  
ロの一言で更に容赦なく攻撃を開始した俺は残り殆どを始末した。

「ハアハアハア、さて……残りはお前だけだな」

流石にこれだけの数を捌くのは疲れるな。息が切れるなんてのは  
この世界に来てからはなかなか無かつた現象だ。

あえて最後まで残したボスゲロはガタガタ震えながら腰が抜けて  
いるみたいだ。さあどんな恐怖をさらに刻んでやろうか。なんて吟  
味していると後方から新手が出現する。

「動くな化物。お前この女の知り合いか何かだな？ 最初なんかし  
やべつてたろお前」

新手と言つたのは訂正、どうやら余りの恐怖に氣絶して倒れてい  
た奴が復活したようだ。男はトウ力を羽交い絞めにして捉えていた。

「動いた。どうなるんだ？」

「見りや わかんだろー。」二つの命がどうな

男が言い終わる前におれは渾身の速度で右の突きを放ち、その指をトウカに突きつけられたナイフに引っ掛ける。それを引きつつ、驚いていた男の顎へと手刀を放つた。脳を激しく揺さぶられて男は、紐が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「すまん。怖い思いをせちまつたな」

「いえ、あっがとうござります」

「じゃあもうちょっとで終わるから部屋の隅のまつで待つて」

「……はー」

いい度胸してるよ実際。人間離れした戦う俺を田の前にして物怖じ一つ見せないなんて。

今にもショーンベン漏らしそうなボスゲロに見透かしてやつたいぜ。

「わざわざって死にたい？」

「ひいいいい来るな来るなああああああああああああああああ

ゆづくつとした足取りでボスゲロへと近づいていく。

「頼む許してくれえ。金なうへりでもやるから、なつ？」

「もう薄々気付いてんだろ？ 僕は悪は許さんが別に殺しがしたいわけじゃない。なのに俺が殺気を抑えきれない理由は

「

ボスの襟首を掴んで片手で持ち上げる。

「お前が俺を怒らしたからだ」

そのままボスを壁に投げつける。それを追つて接近して俺が放つのは一本指貫手。それで足と腕の神経がある部分を突き刺し四肢の自由を奪う。

「がああああああああああ

「どれだけの人を不幸にした？」

続いてわかりやすく血が出る頭部を手刀で僅かに切り裂く。飛び出るようくに流れだす血液。

「ああ、あああああ

「どれだけの人生を狂わせた？」

さりに手刀で右腕を吹っ飛ばす。

「はひやああああ、たす……たひゅへへ

「お前がばら時いた絶望、そつくりそのまま返してやるよ」

止めはその田によく見えるようになるべくゆっくりと正拳突きを

放った。最高に嫌な感触を残して種族人間、性別男、スラム街のボスであつたボスゲロはこの世から消えた。

金の玉を殴り潰すなんて嫌すぎる経験をしてしまった。なんだか自分のも痛い気が……。

## 第九話 正義の鉄拳（後書き）

仮面ラ イダー的に言つとまだショッカーしか出てない感じ。

## 第十話 オーハレルヤ

大乱闘スマッシュヒーローズを開催した後、捕まっていた子供たちと一緒に捕まつてた何名かを解放して俺たちはアジトを脱出した。帰り道にまだボスゲロ一味がリックを探すためかうろついていたが速攻でぶん殴つて眠らしておいた。

40人弱に膨れ上がつた大所帯をどうするもんか困つたのだが、取り敢えずリック達が滞在していた廃屋に留まることにした。

そうだ、話を進める前に説明しなくちゃならないことがあつた。前回傍若無人に全力で暴れまわつた俺に対して「この鬼畜！」とか「やりすぎだろ！」とか感じた人が多くいたんじゃないかと思う。たしかに誘拐が初犯だった場合ぶつコロはやり過ぎだとは俺も思う。個人的には子供を攫つたその時点で万死に値するが。しかしそれはブローナスに入つてからというも情報収集には余念が無い。主に常識を身につけるために、だつたのだが。物価とか国的情勢、噂話しに最近あつた出来事に今の流行。取り敢えず思いつく限りの話題を色んな人から聞き出す事をこの三日間費やしてきていた。

そんな中でも悪い噂が問題だ。それを全体で10としたら8がゲイロス一味に関するの黒い噂だつた。しかも話される事件はほとんど別件で、その裏や実行犯がゲイロス一味に違いないというものだつた。札付きの悪の集団なら、こんな憶測の飛ぶ噂の一つや二つはあるようなものなのだが、いくつかといつてもかなりの数だがどう考へてもゲイロス一味の仕業としか思えないものが多くあつたのだ。

場合によつては目撃情報まで飛び出してきた。

ここまであればそれを知るものはなんとなく氣付くだらう。警備兵がグルなのではないかと。俺の推測ではもつと上にも共犯者がいそうだが。

そしてゲイロス一味の悪行は殺し、誘拐、強盗に強姦。酷いのは一家虐殺なんてのもあつた。ここまでやつて共通の容疑者になっているのにもかかわらずゲイロスは世にのさばつていたようだ。ぶつちやけリックに頼まれるまえからおれの悪人ノートには第一筆頭になつていたので、遅かれ早かれ同じよづな結末になつっていたはずだ。

殺した罪悪感？ その質問良く聞くよね。でもさ、俺から言わせれば救いようのない悪人に、欲望で人を食い散らかすような奴に殺意を抱かない。そっちの方がどうかとおもうぜ？ もちろん殺しに嫌悪感はある。でもそれを天秤にかける重さが圧倒的に悪を許さない事の方が重いってだけなのさ。

今回は……たぶん死んではないとは思つ。結構おもいっきり殴つてしまつた時もあつたので瀕死なのは確かだが。皆殺しなんて選択肢も無くも無かつたりもしちやつたりしちやつたんだが、まあ生きて捕まつた方が後々役に立つ時もくるとおもつのか。余罪が追求されれば間違い無く絞首刑だらうけどね。

さて困った。そろそろ夜が明けるのだろう、東の空が白い光がさしだしてきた。もしかしたら危険がまだ残ってるかも知れない懸念から、朝まで子供たちと一緒したのだが。……距離が遠い。

まあね！ まあね！ 物騒な格好に、今だにマスクは外さずにいる完全な不審者スタイルだし、おまけに色んなとこ血まみれだしね！

「お、やつじー」出勤か

逃げ出した時に一緒に捕らえられていた女性や男の人は俺と同じくらいの歳だった。その人達には警備隊の詰所に行つてもらい事情を説明してもらつことにしたのだ。グルの警備兵のところに駆け込んで嫌な結果になりそうだったんでそれぞれ別の詰所に駆け込んでもらつた。指示を託して送り出してから大体三時間は経つてやつと警備兵らしき多数の足音がスラム街に聞こえ出した。おっせー。時間の田安はもちろん俺の腹時計である。

「さて、それでは俺はこれで」

子供たちをなだめていたトウカが去ろうとする俺に急いで駆け寄つてくる。

「あ、あのありがとつひざいました。本当にあなたは命の……いえ心の恩人です」

「いや……勝手にやつたことだ気には」

「

朝日が上り建物の隙間から光の筋が溢れ出す。その光がトウカを照らし出しその見に纏つた白いドレスを煌びやかに輝かせていた。衝撃。そうこれはまるで始めて特撮ヒーローものを見た時に匹敵する衝撃だった。

なぜならその幻想的で美しい光景よりも彼女の目に宿る輝きの方が優つっていたからだ。

なぜそうしたのかは分からぬ、もしかしたら正氣を失つていたのかもしれない。俺はマスクを取り外した。

「俺はキドーと言います。改めてあなたのお名前を聞いてもいいだろうか？」

「えつ？ あつはい！ 私はトウカといいます」

ヒーローを見た時の衝撃で俺は歓喜の渦に飲まれた。そして今もそれに似た歓喜に包まれている。しかし熱い力が漲るわけでもなく、震えるわけでもなく、俺は涙を流していた。そして力なく膝をトウ力の前で地面へと付け跪いて手をトウ力に差し伸べた。

「いきなりですまないとと思う。でももつ俺には止められないんだ。どうか俺の愛を君に送らせてもらえないだらうか？」

心の中では感動の反面、嘘だろつ！？ と叫んでいるほどに自分でも信じられなかつた。恋愛のレの字にも興味が無かつたし、可愛いいや美人だなどいう感覚こそあれど異性としての意識なんかしたことなかつたのに。いや確かに惚れましたともさー認めましょうそこは。でも俺は自分的に理性ある人間で自制心の強い男だとおもつてましたよ！ この時まではなー！！

「…………え？ え？ へえ！？」

ドン引きなんですねわかります。私もドン引きです。長い長い、本当に長い沈黙。凍りつく空氣。混乱と未体験のプレッシャーで死んでしまいそうです。

「……はい

ウカは指し伸ばした手を握り返してくれた。

「……

「……

田と目が合つてマジかよ！？ 混乱したまま取つてしまつた行動の結末が自分でも信じられなくて信じられなくて頭が真っ白になつて固まる俺。そんな空白の脳裏に浮かんだのは。

（血濡れの戦士が純白の姫に誓いを立てる……か。絵にしたらいい値がつきそうだ）

なぜか現実逃避の末、魂が抜けて第三者視点でその情景を見ている、といつ設定の感想だった。

## 第十話 オーハレルヤ（後書き）

主人公は変人に見えるアホですね。努力家と言つ名前の猪突猛進であります。

## 第十話外伝 オテットの歴史

私はブロニアス騎士団が一つ紅玉の騎士団副団長オテット・ポレヴァンヌ。若くして栄えある騎士団の重役に任命されている。普通ならありえないことなのだが、貴族が幅を利かせるこの国に置いてもそれらを優遇する気が欠片もない事でも有名なほどに我が騎士団は実力主義の塊だ。そんな事をすれば疎まれて妨害や嫌がらせの嵐にあり、場合によつては人事すら上からの命令に従わされる事になります。しかし我が騎士団の団長を動かせる者はこの国には國王様以外には存在せず、国王様も団長に全幅の信頼を置いていたためにその自由奔放な意思は例外として扱われている。

どうやら戦の才能があった私は、その団長に師事されたお陰でここまで駆け上がる事ができた。その役職における責任を果たすために、私は警備隊の戦闘指導を連日行つていた。はつきり言って我が騎士団に比べればこの北西区の警備兵は素人同然で、まるで教い甲斐がない。やる気はそこまで無かつた指導ではあつたが、それも明日で終了する。そんな事を思いながら警備隊の宿舎で就寝していると、外がざわめく音で目が覚める。

「何事ですか？」

素早く身を整えて下で装備を着込んでいる警備隊の一員に声をかける。寝起きだから少し機嫌が悪かったのだろう、若干ではあるが威圧するような態度な私に隊員は萎縮しながら答えたした。

「突発的な大捕物が始まるらしいので、北西区の警備隊は全員出動とのことです」

全員出動しなければならない大捕物とは初めて聞くな。……面白

い。この連日飽き飽きしていたところだし、指導の成果を確認するにも丁度良い。私達も見学と洒落こませてもらおうか。

問題の場所は大捕物が行われる修羅場というよりも、まるで野戦病棟の様だつた。警備隊が通報されて急いで人数を集めて踏み込んだ時にはすでに悪党一味はほとんどが瀕死の状態で転がっていたらしい。今は応急処置のために兵とかき集められた治癒師が奮闘中であつた。

私達騎士団は基本的に国防と大規模な魔獣討伐などが主な任務で街の治安については警備隊に一任していた。おかげで治安や犯罪に関する情報などはあまり知る所ではなく、側にいた警備隊の隊長格をひつ捕まえて状況報告と事情説明にあたらせる。

「……不可解過ぎる事が多い話だな」

「はい……まさかこの人数を誇るゲイロス一味が一夜のうちに壊滅するとは……」

「そんなレベルではないがな……」

殲滅された云々の話しどころか、このゲイロス一味に関わる資料

そのものが不可解な部分だらけだつたが、その場では呴くだけに留めておいた。まずはこの惨状を誰が起こしたかを探るのが先だ。

中へと入り、最も被害が多かつた中央広場へと踏み入る。元神殿を悪党どもが根城にするとは度し難い話である。だからこそ天罰が下つたかも知れないが。

「意識を取り戻した者からの話では、信じられない事に100名からの一昧を壊滅させたのはたつた一人の人物だつたそうです」

なんでもその戦力の高さゆえにこの一味へは迂闊に手出しできなかつたと汚らしい言い訳していたが、戦力自体は本当に高いのであらう事は倒れていた男たちの体つきを見れば分かる。しかし、この人数を相手取る事が出来る、いわば怪物呼ばわりされる類の人物は私が知るかぎりでもかなりいる。もちろん私自身もその内の一人だという自負はある。

「…………さりに信じられない話なんですが」

「言つてみろ」

「相手は素手だつたそうです」

「魔法師なのか?」

「いえ、補助的に使つてはいたそうですがまさに拳で戦つていたようです」

訂正する。この人数の武器持つ相手に徒手空拳で魔法もほとんど使わずに圧倒することは私には無理だ。おまけに、これは予測ではあるが首謀者は手加減をしている。本当にギリギリ助かつた者もい

たが、結局死人は出ていないのがいい証拠だ。皆殺しで良いのであれば魔法を使えば私にも殲滅は可能だが……。

とにかくこんな芸当が出来るものなど国内には片手で数えるほどしかいない。私の師匠である団長の仕業か？ とも一瞬脳裏をよぎつた。天然かつ生粋の女好きの団長のお気に入りを酷い目にでもあわしたのなら考えられなくはない事だ……。実力としても、素手どころか裸であろうと三分もかからず仕留めるだろう。他の規格外の者達も同様に性格や行動原理が飛び出てしまっているので、気まぐれでこの状況を作ったというのは有り得なくは無い話だ。

だが

「容疑者は探すな。そしてその容疑者の情報の一切を隊員に口止めしておけ」

「え！？ いいのですか！？」

「こんな規格外をブロードアスの敵にするつもりかお前は？」

「い、いえ……」

心当たりのある者たちは全てあらゆる方面の超が付く重要人物達だ。悪党をのした事で彼等を法で裁こうものならどんな問題が発生するか考えるだけで頭が痛くなる。もしもうちの団長だった場合であれば国が割れかねない。そして警備隊から取つて寄越したゲイロス一味に関する資料を見る限り明らかに国の一員と結託していると思われ、確実にこちらに落ち度があるのは直ぐに明白になるだろう。後ほど私の部下を配置して洗い出しておくが、だからこそあまり表沙汰にはしたくはない。

重い気持ちを口から吐き出して下を見ると、なにやら手投げナイフが地面に突き刺さっている。その刃の先には紙が留められている。

「『悪よ闇を恐れよ 我はシャドーファイスト 悪の天敵なり』」

それを読んで私ははつとした。まったく思いもしていなかつた可能性を思い付いてしまつたからだ。この惨状を作り出した者が私、いやいまだ世に知られていない者だという可能性だ。

なぜなら私の知る者たちは気まぐれでこのような事態をしかすことはあるても、確固たる意思に基づいた理由を持つて勸善懲悪を行うものなどいかつたからだ。もちろん断定などできはしない。この紙をその本人が書いた確証もないし、可能性は限りなく低いが規格外の者たちの誰かが心変わりして正義に目覚めたという場合もある。

だが私はなぜか期待、いや僅かな願望を抱いていた。

「シャドーファイスト…… フツフツフいつか会つてみたいものだな」

期待を胸にして、その紙を私は胸へとしまい込む。謎の事件として処理させ有耶無耶にしてしまつた事件であったが、一つだけゲイロス一味を壊滅させたのはシャドーファイストと名乗る者だという噂だけを街中に流してやつたのは好意の表れでもあり、ある意味挑戦状でもあつた。

## 第一話 幸せ家族計画

なんだろ？これ、足元がおぼつかない。幸せすぎて体が浮いているようだ……。

とうノロケからスタートのみんなのヒーロー木堂です。

あの後血まみれの装備を取り敢えず外して布に包んで警備兵の目を掻い潜つて宿屋に帰還。帰ってきた俺を見て安堵したのかリツキーは俺に抱きついて泣き叫んでいる。よしよしもう心配ないからな、だから落ち着け。おれの服が鼻水だらけになつてすでに腹に直接感触が伝わってるんだよ！

泣きじやぐるリツキーをなんとかなだめて落ち着かせる。心配のため一晩中緊張していた糸が切れたのか立つていても関わらず、リツキーの頭がコラコラと宙を彷徨い出した。まだ年端もいかない子が全力疾走した上で徹夜していたのだ、眠気の限界に來ても仕方がないだろう。むしろよくここまで頑張れたと感心してしまつた。すでに半田になつて意識朦朧とするリツキーを俺のベッドに運んで寝かしつける。

さて俺は急いでこの宿を出る準備に取り掛かる。理由としては色々あるのだが、なによりも昨日のリツキーが駆け込んできた騒ぎで

俺の装備の一部を見られてしまつてはいるのが大きい。ヒーローで在り続ける為には正体不明をなるべく守らなくては。

なぜここまで俺の戦闘力を隠しなるべく目立たないよう計らつているのかという疑問をお持ちだろう。これは俺の尊敬するヒーローの一人である蝙蝠男さんから学んだことで「人は目に見えぬものを見る」なんだそうだ。要は正体がバレればそっち方面の人に四六時中狙われるだらうし、下手をすれば周りにまで被害が及ぶ。さらに正体を隠しつつ正義を名乗ることで悪党にプレッシャーを与える事ができる。闇から人を脅かす物がさらなる闇から逆に足を引っ張られるのだ、さぞ怖かろう。

「お帰りキドー」

用意をしていると欠伸をしながらフイリーが起きてきた。護衛を任せたのにがつたり熟睡していたようだが、これでもフイリーは俺より格段に危機察知能力が高い。たとえ寝ていても危険が迫れば直ぐに感じ取つて起きれるのだ。ヨルガの森では大変お世話になつた。

「お土産は〜?」

「喜べ今田は大漁だ」

準備を終えるとまず朝飯を取り、女将さんに宿を出ることを告げる。一週間予定で前払いしていたが手間賃として残りの分は貰つてもらつた。そしてまず生産ギルドに行き証明カードを受理する。なんか色々言われたり絡まれそうになつたが華麗にスルー。忙しいんだ今度にしてくれ。

そんでもつてボライアズ家に訪ねジーーさんに予定を聞く。ちょうど午前中は開いていたらしいので銀行での手続きをしてもらう。口座を開くだけならいいのだが、そんな開いたばかりの人が28万という大金をいきなり得るというのは理由を聞かれかねない。そこでしつかりジーーさんから受け取つたという確認をもらつた方がいい、とジーーさんか助言してもらつていたからだ。

こちらがなるべく目立ちたくないという事への配慮だらう。ほんとこのひと出来る人だわ。まああの時、もしあの話が世間に広まりだしても俺の名は出さずにジーーさんが考え付いた事にしつてつて言つたしね。

「それでは28万ティクス確かに納めさせて頂きました」

どうやら國に属した証明である市民カードがギルド証明カードは銀行カードの替りになるようでカードさえあれば金銭のやり取りができるらしい。もちろん盜難防止のため登録者本人にしか使えないそうだ。

「また何かありましたら是非我がボライアズ商家をご利用ください」

「あつ早速それじゃあいいですか？ 今回は販売じゃなく単純に相談なんですけど？」

「はいもちろん。キドー様には大変有意義な商談をさせて頂きました

たので「

「それじゃ

「

結局頼みごとになつてしまつた相談を終えた俺は次に商店に向かい手で引く荷車を購入。武具の購入で更に増えた俺の荷物は街中ではさすがに背負うわけにはいかない。荷車を買つた雑貨屋で力仕事兼雑用係のゴーレム、ミスター・ハニエスをお勧めされてかなり心を揺らしたが今は金が入り様なのでぐつと我慢した。

宿へと帰宅した頃には毎前といつたとこだ。

「おーい、起きろリッキー起きろ～家に帰りますよ～

「む～」

寝起き悪いのか?いつ?

「フー」

必殺桃色吐息! 耳に優しく息を吹きかける」と相手は死ぬ!  
いやびっくりするだけだけね。

「ひょわああああああああああああああああああああああああああ

ああああああ

「ああああああ

書いて字の如く飛び起きる。50センチは浮いたか？ どうやら耳は弱点のようだった。今度から起きなかつたら攻撃してやる。耳への衝撃と見慣れない場所で起きたためか部屋の隅に張り付いてキヨロキヨロをあたりを見回している。…………涙目で戸惑う姿はなんか「ひ……くるものがあるな。

「ほれ家族の元に帰るんだろ？」

手を伸ばしてコツッキーを起き上がらせる。

荷車の余ったスペースへできるだけ多くの食料を買い込む。調理器具がないので出来合いでの物を色々買ってみた。

「いやーお待たせお待たせ」

荷物を引いて俺はリツキー達の一応の家である廃屋へとたどり着いた。

「リツキー！」

「みんな！！！！……トウカ？」

いち早くこちらに気付いたトウカがリックキーに駆け寄つていくが  
なんだかリックキーが戸惑つてゐる。

「私ヨリックキー！ トウカよ」

おお美しい。

「トウカってそんなに美人だつたんだ」

おつと惚れるなよ？ それはおれんだ。

感動の熱い抱擁を交わす子供たち。でも34人の抱擁は多いよ！  
なんだか胴上げの光景を思い出す。

「リックキーがキドー様を呼んできてくれたのね！？ こんなにも強  
い人がリックキーの知り合いにいたなんて」

「ええ！？ 兄ちゃんがゲドロスぶつ倒したの！？」

やつべ。なにも事情を説明してなかつたなそいいえば。

買つてきたお昼ごはんを食べながら積もる話に華を咲かせる。リ  
ックキーは俺がどれだけ優しかつたかを語り、トウカは俺がどれだけ

強かつたかを語った。俺はとこつと拍手喝采、英雄伝のよつて口々に褒められてそこあまりの気恥ずかしさを空の雲を数えて耐え忍んでいた。

「あの雲はイカに見えるな」

褒められた事は今まで無くも無かつたが、こじまで感情むき出しで喜ばれるところはなんだかむず痒い。

「それでキドー様はこんなにも荷物を持ってどうしてこいへ？」

やつと話題が途切れた。それにしても様付けとかその呼び方は背中が痒いよトウカちやん。地球でも君とか、さん付けだつて恥ずかしかつたのに。

「様付けは恥ずかしいんでやめてくれるとありがたい、気軽にキドーでいいよ。ここに来たのはまだ心配だつたのとリッキーを送るため、それと」

「キドー殿——キドー殿はこちりに面会してこますか——？」

「俺もこじまもつて思つてね」

「あこじまじめよつじやなこか、俺の幸せ家族計画を——」

## 第一話 幸せ家族計画（後書き）

英文を日本語に直訳するなどなんでもない物になることってよくあるよね。

## 第一話 家と鍋と箱と笑顔

廃屋に俺を呼ぶ声を響かせていたのはジーーーさんの執事である、セバスチャンさんだ。セバスチャンは俺命名だぞ？ 本名知らないしね。さすがに執事でセバスチャンとか無いよ。

あつきたつす、あるわー！ でもこれの呼び名つてどこからきたんだらうね。

「キードー殿、『ひらが』注文の権利書になりますぞ」

執事の爺ちゃんが持った封筒を受け取る。

「なんか予定よりも大分安くないですか？」

「そこは我が主の説得の賜物です」

説得といつ名の値切りなんですね。でも予定額から3割も引いてくれるとか不動産屋は泣いてるんじゃなかろうか。

「じ、心配せずともふっかけられた分を見破つて正々堂々買上げたものですから」

流石の手腕だ。これから俺の心の中では『流石のジーーー』と呼ぶことにじみづ。値段を確認してカードから金銭をやり取りする。

「それと主から『いつかお茶で』一緒にしましょ』と受けたわって『じゃこまく』

「ありがとう。近々顔を出すって言つて置いて

なんだか気に入られたなー。今のところ信用できそだだからいいけど。丁寧にお辞儀をしたセバスチャンは馬車に乗つて帰つていった。

「あのー何をお買いになつたんですか?」

まだ敬語はやめれないらしい。ていうかストリートチルドレンのわりにはえらく教養あるよねトウカつて。

「この場所、君たちの家の正式な権利書を

「え……」

「俺もここに住もうと思つてね」

俺が買ったのはリックやトウカ達が住んでいた廃屋とその土地である。廃屋はなんとか屋根が見て取れるが壁が崩れ、一部はすでに斜めに傾いている。建物の価値としてまったくの

なので金額的には土地の値段だ。これはかなり広く60×40メートルの敷地だ。立地としては一番端の方と言つてもスラム街にあるので価値が低くなるとは思つたが10万ディクスはすると予想していたんだけど。

「六万八千ディクスかあやつすいなあ」

「このちよつとした公園レベルの広さがこの値段か……いやこれが常識的なかもしれない。日本は特別土地の値段が高かつたから余計に感じる。

手に入れた廃屋と敷地を見つめながら今後の予定を組み上げていく。取り敢えずあの廃屋がどこまで使えるかの点検と調査が必要だな。庭だつたらしき広場も今では頭の高さまで伸び

た雑草で埋め尽くされているので刈り取りなき。

「あの～」

「こきなり不法占拠していた土地を買い上げて一緒に住む宣言をした俺に呆気に取られて沈黙したままの子供を代表してトウカが質問してきた。

「これを聞いてしまうのはきっと失礼な事なんでしょうナガだえて聞きます……なぜここまでしてくれるんですか？」

まあ戸惑つて当たり前か。俺だつてちよつとびつべつしているんだけどね、自分の行動力に。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思つたんだ。

理由はそれで十分だ」

ための集中力で百メートル全力疾走したくらいの体力が消耗されたよ！

でも顔を赤くして俯くトウカの姿を見れたからよしとしよう。うむ、大変良し！

「リッキー、リッキーおこでおこどー」

「おれはイヌか！」

あついるんだ犬。いやだつて飯を食う仕草とか表情とか見てたらねえ。初めて見た時から思つてました。

「わかつてゐる範囲でいいから家中を案内してくれ」

ପାତ୍ରିକା

午後からの時間を全部使って有意義な廃屋の調査は完了した。時間がかかり過ぎて辺りが真っ暗になってしまった。街中なら幾らかの灯りがあったものの、このスラム街はほとんど無

い。

### 「『ライトボール』」

ボールシリーズで唯一攻撃できない光魔法。そして最も簡単な魔法でもある。明るさを持つた光の玉を頭の上に浮かべてみんなのとこに戻る。

帰ってきたらみんなの視線は俺の荷台に釘付けになっていた。あお腹がすいたのね。子供たちの興味の大半は食べ物に向いているだろうしな。環境的な意味でも本能的な意味でも。

「よーじじやあお兄さん頑張つて晩ご飯作っちゃうぞ」

買つておいた大きな鍋を荷台から取り出す。中には野菜と肉が入つていて。俺はそこまで料理はうまくはない、そこそここついた所だ。だから大漁簡単でおいしいパンに合う料理とい

えばシテューでしょ。

### 「『ストーンウォール』」

ウォールシリーズはその名の如く壁を創りだす防御魔法だ。出力をかなり弱めて膝下ほどの石の壁を創りだす。俺はそれを三枚出して簡易のかまどを作り上げる。俺の無駄に注がれた

ストーンウォールなら一時間は余裕でもつだろ。そして薪を組み上げて出力最低にしてファイヤーボールで点火する。包丁で野菜と肉を切つて鍋で若干炒め、そしてウォータボールを

そつと鍋にいれる。

「キドーって魔法も使えるんだね」

「ランランと輝く田で料理風景を眺めるリッキー。てか全員近いよ！ 危ないからちょっと下がつてね。」

聞いていてお気づきだろうがここで魔法について解説しよう。魔法は出力の調整ができる。ただし上限が決まっており出来るのは弱める事だけだ。それを利用してのマジッククッキン

グをしてみせたのだ。さらに魔法で作った石や水などはその込められた魔力の密度に比例してしばらく経つと粒子状になつて宙に消えてしまう。しかしだ、火の魔法で付いた木の火は消

えないし、少しだけ加工を加えれば水も消えなくなる。ウォーター・ボールの水は純粹に水だが、例えばそれに砂糖を加えれば砂糖水になる。なぜか出した時の状態から変化を全てに加え

ると世界に定着して消えなくなるらしい。出力の調整はイメージの問題で、魔力を注ぎ過ぎな俺だがその力の強弱には関係性は無いらしい。

なぜそうなるのかって？ 知らん！ そういうのはもつと偉い人に聞いて下さい！ 魔法初心者なめんなよ！ あれだあれ、その時不思議な事が起こった！ だよ、それでいいだろ。

鍋に入れた水が煮立ち火が通った後、塩コショウと宿の女将から教えてもらつた調味料を加えて完成だ。更に主食に買つてきているフランスパンのような長いパンを輪切りにして火

で炙る。フランスパンといつてもその太さは首より太い一切れでもなかなかの大きさになる。

全員にシテューの入つた皿を配り、大きなバスケットに焼いたパンを入れて配置完了！

「それではみなさんいただきまーす」

返答は無し。

「それは何の掛け声なんですか？」

おつとつにテンションが上がりつて日本の挨拶を使つてしまつた。

「これは俺の生まれた国の食事をする前の挨拶で食べ物を生み出した自然への感謝をあらわす為にするつていわれてる。最初にいただきます、最後にごちそうまで一組の挨拶だ」

たしかそんな感じだつたはず。当たり前のようにやつてきたから詳細な話は忘れた。

「それはいいですね。普通は信仰する神に祈りを捧げるんですけど

私達はどの神の信仰していませんからね。じゃあみんないただきま  
すってキーデーさんには感謝して食べましょうか」

「やいや自然に感謝だからねー!?

「「「「「いただきまーす」」」

はい感謝されましたー。たくさんあるからおかわりもありますよ  
ー。

「ねえキーデー。もしかしてお土産ついての予定のことなの?」

「こまそり付いたのかフイリー」

「ほんと変だよねキーデーって。お土産までありますなー」

「それじゃ今更だぜ」

最高に決めたドヤ顔を向けたフイリーはクスクスと笑つて俺のポ  
ケットに入つて眠つていった。

次の日、朝から全員の体を水洗いするところから始まった。敷地内にあつた井戸が幸運にもまだ使えたので紐に水桶を付けて利用してもらう。リックキーちゃんちや坊主のトマス、無口な

がら面倒見の良い少女のコーリにひょろ長優男のロイなどの年長組に面倒を任せて俺とトウカは空にした荷車を引いて街にくり出した。べつべつにデートだなんて思つてなんかないんだ

からね。確かに胸は高なつたけど。

買い物描写は省略して昼に差し掛かる前に自宅へと荷車に山のような荷物を引いて帰還する俺。背負つたり引いたり背負つたり引いたり、俺は馬か！ なんて思つてみたりなんかして

。

「はーいそれでは身長順に並んでくださーい

トウカの指示で順番に並んでいく子供たち。サプライズを兼ねてトウカ以外には何をするのかは伝えていない。ニヤニヤするのを我慢出来ないでいる俺とトウカは、荷車に積んできた

箱をそれぞれ一人に一個づつ皿の前に置いていく。箱は膝くらいに高さがある正方形のなかなかに大きな箱だ。

「それでは合図で箱を一斉に開けましょ

トウカが指揮して全員が箱に手をかける。

「ハッセーの一で！」

懐かしい掛け声だ！？ なぜに地球と同じ掛け声が……いや違つた、これはナーブに貰つた特典で脳内で自動変換してゐるな。

「ハハハハハハハハ！」

「わあああああ

「あわわわわわ

「ふお――――――！」

歓声の中に奇声が聞こえた気がするがあえてハッキマニ。喜ぶ人へのツツ「ミミなど無粋の極み。

箱に入っているのは全員分の服と靴だ。上の服とズボン、そして下着のセットが5。靴は一足づつ見繕つてある。大きめはトウカに選んでもらつたがあとで俺が調節してやるうと思つ

てる。

あまりに興奮しすぎた男の子がその場で着替えようとしたのをトマスがゲンコツで止めていたほどにみんな喜んでくれているようだ。無理もないだろ？とは思うよ。全員服はボロボロ

で一着しか持つてなかつたし、足なんて裸足だつた。みんなを引っ張つて来たというトウカだつて服選びをしている時の全身から溢れる輝きは凄まじかつた。

「うそうそやうぱつ子供は」「うだなくつや」  
「やけ」

「どうしたんですか？ キューケン」

「「う」に一緒に住むといった理由の一つに俺は無類の子供好きなんだ。そんでもって勝手なことかもしれないけど俺は子供は笑つているべきだと思つてる。だから笑つてない子供を見る

と無性に笑わせたくなるんだよね」

やつぱり子供は笑顔が一番だ！ 異論は断じて認めない！

「はい」

でも俺の一番はトウカの笑顔だけどな！ 一万ディクス払ったかいがあるぜその笑顔には。よろこぶ子供たちを尻目に人生最大の勇気を振り絞つてトウカの手を握る。

「……フフ」

それに優しく笑つてみせたトウカは手を繋いだまま、はしゃぐ子供たちを俺と一緒にしばらく一緒に眺めていてくれた。

「……」

正直動悸がヤバ過ぎて心臓止まりそうでした。

## 第二話 リフォームリフォーム

三十五人家族になつて一日目も無事終了。なんだか人数を言葉にしてみるととんでもないな、それを養つていくと言ひ出したんだからなあさらだ。

そして朝飯を頂いた庭では元気を取り戻しだした子供がフイリーと遊んでいた。初日の夜にフイリーにこいつらとは家族になつたことを説明してからは一日目の夜まで沈黙したままだったのだが、今日の朝になつて。

「キドーの家族ならいいよね。許可します」

と言つて急に子供たち全員がフイリーを認識できるようにして、朝食を食べる俺らの前で自己紹介を始めたのだ。神様関連のことはごまかしてくれたが妖精が人に憑いてるなんてのはとんでもないことらしいので、その挨拶を見た俺は朝飯を吹き出しかけた。

しかし世間からある意味はずれた子供たちは「へー」とか「すごい」なんて感想で終わつてしまつた。そして子供の持つ適応能力を発揮して朝飯が終わつたそばから一緒に遊び出したのだ。

ブローナスに来てからは慌ただしくて俺と遊ぶ機会が少なくなつて、いたフイリーは子供たちと同じくらい楽しそうにしていたので、俺としてもこれでいいかな。いやかなり良かつたね。

食後の休憩を終えて俺は気合を入れて立ち上がつた。せつかう買

つた男性の夢の一つであるマイホームだ、このまま廃屋ではちょっとまずいし嫌だ。今でも多少の雨なら防げそうだが嵐がきでもしたら崩れてしまいそうな勢いだ。

昨日は広い空間で全員でプランケットだけ被つて雑魚寝した。起きた時におれを枕替わりにした奴が6人もいて大変だつた。あれはあれで楽しいがいつまでもこのままというわけにはいけない。

それにこんなボロ屋に住むというのも職人のプライド的な意味でもいただけない。

幸いな事に家は主な部分の柱や土台は石造りになつていて朽ちた木の壁を取り替えれば充分住めそうなのだ。傾いた部分は流石に専門知識が要りそうだが応急処置だけなら俺でもできそうだ。

自分の家を自分で作るつてのは男にとつてはなんとも心躍る響きではないだろうか？ 少なくとも俺はこの計画を立てた時から興奮で胸が高鳴りっぱなしだ。早速木材屋から資材を調達してマイホームを改造せねば！

木材と大工道具一式を荷車に買い込んでミスター・ハニエスに引いてもらう俺。釈明しておくが決して我慢できなくなつてハニワを買つてしまつたわけではない。これから家を作るという労働作業とか予定している力仕事は今の栄養失調気味に衰弱している子供たちに手伝つてもらうのはとてもじゃないが無理がある。かといってやつ

ぱり人手は欲しいわけで、かといってあんまり関わる人を無闇に増やすのも問題がありそうな気もする。わざわざこれだけの人数のストリートチルドレンを養おうとしている俺はこの世間では変人どころか狂人扱いだらうと予想されるからだ。17歳の成年が三四人もの人を養うとか言い出したら地球でだつて頭おかしいんじやないかと俺でも思う。やりたいと思つても出来ないのが普通なのだが、今の俺は普通とは程遠い存在になつてゐるのでそこんとはまあいいだらう。

そこで単純労働力であり絶対に情報が漏れない運搬担当のミスター・ハニエスと家事担当のミセスハニーウェイトを一組購入した。買ってびっくりしたがなんと同型でもそれぞれデザインに若干の違いがある。店員さん曰く開発者の趣味らしい。作品に対する愛を感じるぜ。

土というか頑丈な陶器っぽい材質で出来たこいつがなんで動くのか分からぬ。分かつてゐるのはこいつの燃料は魔力つてことだ。大体一般の成人が持つ魔力一日分で半日ほど動くそうだ。魔法は下手だが魔力の量だけは多い俺には四体同時に一日中動かすくらいの魔力を与えても何の問題もない。いつかこいつらの構造とかを学んでみたいものだな。

「リックキー！　トマス！　ロイ！　手伝ってくれ～」

子供たちの中の男年長組だけは手伝つてもらう。彼等はすでにかなり血色が良くなつてゐる。もちろん俺の作った飯で回復してはいるが一日で六食いや今日の朝飯を合わせて七食程度で直ぐに長年の

不摂生な体が回復するわけはない。実はスープやらシチューなどの水物には栄養剤でもある疲労回復剤を混ぜてあるのだ。枯れたスポンジのようになってしまっていた子供たちも一週間服用を続ければ健康児までは全員いけないかもしれないが、力を取り戻すくらいはできるはずだ。

ちなみにこの三人は一日の朝には既に走り回るほど元気になっていた。いやー若いね！

「はーー

「おひよー。」

「ちょっとまつてー

手伝うといつても近くに置いた道具屋釘を取つてもひつだけなんだが、将来を考えて作業を見てもらうのは彼等の為になるんじやないかと思つての判断だ。いざれは元気になつた人から順次手伝いを増やすつもりだ。

さてまずはみんなの寝床からだな。その次は風呂、そう風呂だ！この世界には湯浴み場は合つてもどうやら風呂とこう文化そのものがないらしい。うかつに地球での文化や知識の持ち込みは田立つという危険が伴うとは思うが自分の家で使う分にはいいだろう。もしもバレたらジーーーさんに薬草の時みたいに売り込んでみよ。

一週間経過。なんとか寝床の床と壁、そして天井の修復を完了した。なんとも早く終わつたが、そもそも建築構造の知識は少しあつたのでちょっとアレンジして直ぐに出来た。ただそれでも一ヶ月は掛ると俺も思つてたんだが、なんとミスター・ハニエスの説明書きに釘打ち可能という文字を発見した。場所さえ指定すればハニエス一体が次々に釘を打つてくれたので作業効率が段違いにアップした。しかも見た目からは想像できないくらいに器用さがあつて、俺より釘打ちがうまかった。お礼に一体にはハチマキを巻いてハッピを着せてあげて、もう一体には付け髭をプレゼントした。そして建築をするのにすごく便利なものがあつたのだ。それは隙間などを埋める粘土なのだが、これがアスファルト程ではないが固まるとかなりの硬さをほこり、しかも通気性、保温性、耐久性にも優れている品で、木の板と板の間に挟んで乾かせば直ぐに壁が完成出来たのだ。最近の開発されたもので今の建築物にはほとんど全てに使われているようだ。

更に強度を上げるための俺的工夫も施した。生産ギルドを通して幅一センチほどの長い鉄の棒を発注して、その粘土を埋め込む場所に部屋の四角い形に対して斜めに固定して配置した。現代建築によくある補強の構造ではあるが、この時代としては抜群の頑丈さを手に入れただろう。全面石か、鉄のほうが頑丈ではあるだろうが金がかかりすぎるので知恵を絞つたわけなんだが。

せりに一ヶ月経過。ここまでやればかなり手馴れてきたので作業スピードはかなりアップ。子供たちも殆どの子が手伝えるまでに元気になつていていたので尚更だ。

出来上がつたのは一階の部屋が三つと一階の床、一階への階段と一階の床と屋根だつた。いや、我ながらよくやつてるんじゃないかと思うよ。最近余裕が出てきて装飾を付けたりしてゐるしね。

しかし問題だつたのは風呂だ。床と壁は粘土を見つけた時点で決めた方法があるのでそれを試した。磨き石といつて丸い石をただ磨いただけの石だが、それを更にガラスでコーティングして、なるべく平たく壁一面に粘土を使って組み合わせた。石のコーティングは武具を貰つた店の爺さんに全部頼んだ。

「ガラス加工は皿とか防具に使つたことはあるが、なんで唯の石にそこまでするんだ?」

という全力の疑問をぶつけられたが。

「趣味です」

とだけ返しておいた。嘘ではないしね。

しかし資材ではこれが一番高かつた。なんせ風呂場は家族の人数から考えてものすごく広い仕様になつていていたため、石の総数は一万個に届いていたからだ。一個あたり加工料で3ディスクス、さらに粘土が全部で一万ディスクスかかつたので合わせて四万ディスクスもかかった。普通の部屋の三倍はかかつた計算だ。たつけー、しかし後悔はしていない。

問題は湯船にあつた。俺的こだわりで檜ではないがどうしても木造にしたかったのだ。しかし唯でさえ難しい木造の湯船を巨大に作つたため何度もやつても水漏れが出てしまつたのだ。補強をしたら見栄えが悪くなるので何度も何度も作りなおした。正直これに一ヶ月のうちの半分はかけていた。

これ以上俺には無理！ つてとここまでやつてみたがチョロチョロと流れる程度だが少しだけ水漏れがあつた。しかし現段階の俺の技量ではそこが限界と判断してハチマキが似合つミスター・ハニエス一号に頼ることにした。

「これが後に『溢れるのなら足せばいいじゃない作戦』である

風呂の外側にタンクを設置、そこから溢れる量と同じだけの水を湯船に足していく作戦である。ハニエス一号君の役目は水を送るために延々と歯車を回し続ける重大な役割だ。なんともハニエス頼みの力技だがこれ意外おもいつきませんでしたよ。がんばれハニエス超がんばれ！

そんなこんなで風呂場は完成へとなんとか漕ぎ着けた。装飾など一切ない簡素なもので、もちろん後でのあたりは足して行く気満々なのだが、どうしても今は手も金も足りないので今回はバス。風呂に初めて入った時のことだ。完成を喜ぶ俺と子供たちはその日に早速入浴することになつたが、初めて俺は家族の一員になつてワガママを申しました。

「一番風呂に入りたいです」

俺が俺が状態の子供たちに先んじて一人湯船に入るのは多大な罪悪感があつたのだが、風呂はおれの欲望でもあつたのでそこは譲れなかつた。

子供たちの視線に後ろ髪を引かれながら脱衣所へと向かい、湯氣に覆われた風呂場へと足を踏み入れた。まだ不完全ながらもそこはこの西洋っぽい異世界で唯一、純和風な空間だつた。銭湯を意識したような、加工した石と固めた粘土でできた床。完全木製の大きな湯船に、木製の手桶と小さな椅子。

それでは髪を流し髪や顔を洗い、心を洗めてしき入浴！

「はあ～～～～～～～～～～～～」

あまりの気持ちよさに腰が抜けてしまいそうになつた。てかちょ  
つと抜けてたと思う。その湯の温もり、木の香りが俺の全身を溶か  
していった。

涙が出た。こんなに風呂と云うのは気持ちいいものだつたのか、

癒されるものだつたのか。まさに極楽だ。

オーバーだ！ なんて思うのは無理もない。しかしここは、この場所は単純に風呂として作つたわけではなく、それとは別の俺にとって大きな意味を持ち合わせていた。風呂場の内装は純和風、つまりここだけが生まれ故郷の日本を思い起させる場所。そんな意味を込めて作りこんだ。広さとしては家の風呂より大衆浴場のほうがしつくりくるが充分だ。

向こうの俺は死んだ。今ではこのアトレアの世界の住人であることは確かだ。でも日本人、木堂正志であつたことを俺は忘れない。むしろ誇りにして胸に秘めている。それを噛み締める場所でもあつたのだ。だからこそ最初だけはここに一人で入りたかったのだ。日本の香りを感じたかつた俺だが、他に思い付いた味噌や醤油、緑茶に畳といったものは流石に俺では再現不可能だつた。だからせめてこれだけでもなんとか似せて作りたかつたが予想以上の大成功だつた。

じゃあ一番風呂じやなくとも良かつたんじやないかつて？ ハハハ、そこは单なる欲です。

『満悦になりながら虚空を見つめて、その気持ちよさにだらしくヨダレを垂らしそうになつていると、脱衣所が騒がしくなつてきた。

「いけね、もうそんなに時間たつてたのか

不満ブーブーだつた子供たちを納得させるためにどれぐらいで風呂から出ると言つて入浴に向かつたのだがどうやらその時間を過ぎてしまつたようだ。

「おひ——いけ————————！」

「突撃突撃

！！！！

素裸の子供たちが風呂場へとなだれ込んでくる

「おおお！ なんだこれ！ ？」

「すりば———！——！」

田の輝かせようが半端ない。田から光線でも出るんじゃないだろ  
うかという勢いだな。今まで楽しいなんて事を経験したことのなか  
つたこの子達にいろんな事を教えていくとその分子供らしい元気さ  
を取り戻していき、今では暴走してしまいがちになつてきた。小学  
生ほどの年齢ならあたり前と言えばあたり前のことなんだけど。

「オラ！ 走るなよ！ 滑つてすつ 転ぶぞー！」

俺は取り敢えず湯船から出て子供たちを統制する。脱衣所から服を来た優男のロイがひょっこり顔を出していた。

「スイマセン……僕じゃもう抑えるの限界で……」

「いいよいよ、時間を守れなかつたのは俺なわけだしね」「

「じゃあお願ひしますね」

ロイは脱衣所から退場していく。なぜ一緒に入らないかと申しますと、ここにいる子供たちはもちろん全員では無い。十五×十五メートルと無駄にだだっ広く作つた風呂場だが、流石に35名全員が同時に入ることはできない。せいぜい入れて多くて十人ちょっとといつたところだ。なので厳正なクジを引き組み分けを行い年長者を誰か付けて入るという形になつた。

ついでなので説明しておくが、我が大家族の男女構成は男二十四、女十一人の割合になつてゐる。

今回は男八人づつと女性組に別れてみた。まだ湯が入つていない状態の時に年長者組には風呂の説明はしておいたがなにぶん入るのも見るので初めてのことなので俺の受け持つ第一組が入り終わつても脱衣所で待機しておくつもりだ。

女性組の時まで脱衣所にいるのかつて？ 居れるか恥ずかしい！  
流石に廊下で待つよ！ えつ？ 覗き穴は勿論作つたんだろうな  
だつて？ 覗き？ トウカの入浴シーンを…………ヒツヒーロ  
ーがそんな事出来るかあ！ ベつ別に一瞬迷つたわけじゃないんだ  
からね！

騒がしく元気にはしゃげるようになった子供たちに苦労はさせられてはいるが、何とも幸せを感じる毎日が続いていた。でも何もかもが順調に進むわけがないのが世の常。  
俺の足元には決定的で致命的な大きな問題が差し迫つて来ていたのだった…………。

そろそろ金が無い。

## 第三話 リフォームリフォーム（後書き）

風田は日本の心ですなんて言葉を噛み締める時がたまにあります。

大体家を改築し出して一ヶ月経つた頃から問題には気付いてたんだ。どれぐらいで俺の貯蓄が底をつくのかどうかは。底と言つてももちろん無一文に成るわけではない。食い物とかを買つたりする生活費はもちろん残しているのだが、このままではこれ以上家の改築資材が買えなさそうにないのだ。

現在は三十万ディクスあつた俺の残高は五万ディクスを切ることまで減少してしまつた。日本円にして五百万円もあるのならまだまだ余裕があるじゃないかと御思いだろうが、この国では、もしもなにかあっても俺たちは全員市民権を持つていないので支援も助けも国からは期待できない。そう考えればこれだけあってもむしろ不安なぐらいだ。

もちろんとても有意義に使うことが出来たので微塵も後悔はないのだが、いかんせんおれは三十五人家族の家長で、唯一の稼ぎ頭だ。子供たちには今までやつていたスリや盜難の類は一切やめてもらつている。働きに出れそうな人もいるにはいるが、そうなると子供たちの面倒を見る人がいなくなる。俺でさえ外出は最小限に抑えて子守を手伝つほどだからともじやないが無理だ。

なにより今外に働きに出ること自体も不安が残る。どうせならその労働環境も俺が作り出してみるのもいいと思つてはいるし、案もなくはない。だがそれにもやっぱり大量の金がいる。

まだまだ色んな問題を抱える家族だが、やっぱり何をするにもまず金だ。

だが商売の知識なんて大して持ち合わせて居ない俺が頭をひねつた所で「近所で出来て早く大きな金に成る」なんて都合の良い金稼ぎの方法なんて思いつくわけがない。

「どうわけなんだがいい仕事ない？」

「何がどうわけなのか全然かわからん」

まったく考え方がないから誰かに相談してみた。相談相手は最近特に仲良くなつた武具屋の主人であるガナド爺さん。買い物に出た時は毎回寄つてだべつてます。

「いやだから、街で出来て早く稼げる仕事はないかつて聞いてるんだけど」

これに『簡単な』つて付けば完全にダメ人間です。

「ひや  
あんな都合の良い仕事がそうそう転がつてゐるはずないじ

「でありますね～」

「街の外でつて条件ならそれなりにはあるんじやがな。希少な素材の確保、名前付きの魔獣の討伐、盗賊団の捕獲や、危険地の調査とかな」

それは最初のほうに考え付いたけど、街を離れる必要性がある上に日いちがかかりうるので却下。主に子供たちの心配の為に。

「今言つたのは全部冒険者ギルド発注の依頼だし冒険者ギルドに顔

出してみたらどうだ?」

冒険してお金を稼ぐ? いやいや完全にそれじゃ道楽だな。冒険者ギルドはいわば危険性のある依頼を請負い金銭を得る荒くれを紹介しまとめ上げる組織だ。命がけの物も多々依頼の中にはあるが、危険が増せば増すほどその報酬金額は馬鹿高い。頑張れば一週間で一万ディクスを稼ぐのも夢じゃないので今の俺にはうつてつけなんだけ……。

あとギルドは調べたところによると俺が登録している生産ギルド、調理ギルド、医療ギルド、鍊金術ギルドに魔法ギルド、そんでもって冒険者ギルドの六つだ。なんでも噂では調査ギルドという謎のギルドが存在するなんて噂もあつたが実態を掴めることはできていなか。ありそうなギルドだけね、日本でも情報屋は実在したらしいし。

なんでもギルドを複数重複して登録することは可能なんだとか。おすすめはできないなんて言われたが可能なこと自体がちょっと意外。あまりやる人はいないらしく、いてもどこか自分の実用的部分がかぶるよう二つだけ登録するのが普通なんだとか。

なぜ登録したらお得なことがあるギルドになぜ重複登録したがらないかというと、生産ギルドの査定のようなものはどのギルドにも存在し、それをクリアしていくのは大変な労力のようだ。下の方のランクの査定なら簡単そうだが、ギルドを有用に使うためには最低でも五段階中三まではあげる必要があり、そこからはあがるもの維持するのも格段に難しいようだ。しかも途中でランクダウンどころか除名なんて不名誉を被るとあつという間に悪い噂は広がってしまう。そうなりや他の街にでも移動しなりや商売上がつたりなのだ。

「ほんとは生産ギルドの仕事して稼ぎたいけどまだ仕事場すらないしね。仕方ないちょっと覗いてきますか」

「そりだトウ力連れていこう！」最近煮詰まり気味だし久しぶりにデートもいいかもしないな。グフフ。

「それならもう一ついい稼ぎになるものがありますよ」

午後からの予定を決めた俺の背後から爺さんの娘さんであるマリナおばさんが話しに入ってくる。

「いいのかマリナ」

「フフッ。キーデーさんは信頼するには充分な程にお人良しみたいですから」

「何の話だらうか。

「私は武器屋の店員ですけど、調査ギルドの構成員でもあるんですよ」

「な、謎のギルドキタ――――――――！ あれか…？ コーデネームは酒の名前だったりするのか！？」

「そこで私に情報を売ってみませんか？ キーデーさんはちょっと変わった視点をお持ちのようですからいい取引ができると思いますの」

「……」

いや商才すらない俺に情報の価値とかわからんから。情報収集に余念はないが、あれは基本俺の為と目的のものにしてるだけで他の使い道使えるとは思わないしな。

「なんでもキドー様は人から情報を聞き出すがお得意とか……」

ヒィ！ 僕の情報収集活動が簡抜けだーーー。壁に耳あり障子に目あり、いやそこは同じ穴のムジナか？ どうにしても専門家にはかないません。

「なにかお金になりそうな、今求めてる情報つてありますか？」

ダメもとで聞くだけ聞くか。もしかしたら日々の活動の中で小耳に挟むぐらいしてるとかもしれないし。

「そうですね……。今ですとジーーー・ボライアズ様のこれから活動向。汚職役人情報。正体不明の窃盗団。あとは一月前に起こった旧ナーブ神殿で起こった惨状に関する情報で jóうか」

おつとーつも引っかかりましたよ。ジーーーさんはあれから数回お茶に招かれている。なんだか友人のように接してくれているジーーーさんの会話はすごく為になり楽しいものだったし、一緒に連れてつたトウカやリックキーがガツチガチに固まっていたのはとても面白かった。世間話をしたりしてるのでしかしたらその会話を売れるかも知れない。まつ個人的にこれはパスだな。恩人を売るとかマジ勘弁。

あと一つは……。

「ゲイロス一味が全員逮捕されたのって街で有名話じゃないですか」

あれだけ悪評を振りまいていた一味があつさり全員御用となつたあの事件は街中がその噂でしばらく持ちきりだつたはず。

「はい、そなんですが……。ここまで話題になつたこの一年以内じゃ屈指の事件なのに詳細な情報があまりでてこないんですよ。なぜ今まで放置していた一味が突然逮捕されたのか？ 現行犯逮捕との知らせはありますか罪状不明。近辺に住んでいた人の話では捕まつた日の夜中にすごい物音が神殿内から鳴り続けていたという話もあります。しかし警備兵や騎士団が踏み込む前の話だと聞きますし……。単純なはずの事件なのにとても謎が多いんですよ。つまりこれは隠したい事があるんじゃないかという推測が成り立つているんですね」

なーるほど・ザ・世界。

たしかあの連中に絡んでいた役人はいたはずだし、現場の惨状はとてもじやないが説明しても信じられない。それにおそらくあの連中を締め上げれば「口口口余罪が浮かんだはずだ。そうなつたら今まで放置していた警備隊や国に批判が向かう。だから臭いものには蓋をしたか……政治的判断つてのはどこの国でも変わらないな」。

「それについてなら一個だけ知つてる事がありますよ」

「えつ！？ ビツビれについて！？」

なぜにびっくりした。

「ゲイロス一味が逮捕された罪状ですよ。あれは確か誘拐罪です」

「……証拠は出せる？」

「実際に行方不明なつていてその日取り下げられた人が複数いると 思います。あとは直接そつちに聞けば分かるかと」

「…………」

やばかったか？

「す、」いわ、期待していたのは事実だけじゃきなりこんな大物を出してくるなんて……」

よかつた感心してくれてただけだつたようだ。セフセフ。

「報酬は裏付けが済んでからになるから、受け渡しはこの店の奥で行いましょう」

「い、く、ら、ぐ、り、いにな、りそ、うです、か？」

なんだが業突く張りな話だけど、今は切実に一デイクスでも多く金が欲しい。

「そうね……低くても一万、高ければ四万にも届くんじゃないかしら？」

「高、つ、！？　噂話を確定させただけなのになんぞそんなに高額なことに、ー、？」

「ふふ情報つていうのは使う人によつてはす、」にお金に変わるのはよ

あつそういえばジー、ーーさんとこで俺も変えたな大金こ。完全に運要素が百パーセントだったけど。

「それとキーデー君、情報ギルドに登録する気ないかしら？」

「はい？」

本当にこの世界は俺をどれだけ驚かせれば気が済むんだよ。知り合いが実は謎のギルド構成員でしたってだけでもかなりの衝撃だったのに、更にその場でスカウトしてくるとかどんでもないよ。……受けたけど。

なんでも情報ギルドは査定制度がないらしく別に仕事に励む必要がないらしい。気が向いた時に売り込みにきてくれるだけでいいそうだ。そんな制度でダイジョブか？ とマリナおばさんに聞いたところ。

「いいのよ、この道は信頼こそ最も必要なものだからね」

「だそうだ。よくわからん。」

さて現在、一応の稼ぎは出したと思うがこれからのことを見据えて冒険者ギルドへの訪問は実行に移した。もちろんトウカと手を繋いである。ヌフフグフフムフフ、何度も握つてもトウカの手は俺を満たしてくれるな。

一月もあつたんだからなにか進展したと思った？ 残念私にそんな度胸はない！ 今だに手を握るだけで精一杯であります！ これより先は即昏倒の可能性のある危険ゾーンです！ もっと偵察をし

て現状把握する必要があるあります……すゞいへタレとも言つけど。

「あれが冒険者ギルドですよ」

道案内を任せていたトウカが指をさす先に大きな建物が見えてきた。黒鉄で一面を覆つた生産ギルドと対称的に冒険者ギルドは支柱を除けばほぼ木製だ。カーペットや壁紙すら貼つていない木目調。なんというか荒くれ集う場所としてはらしいつむぎやらしいね。それでも

「でかいなあ」

「うでかいのだ。今までこの街でみた建築物の中では城に継いで一番田にでかい。地球でいうなら学校の敷地を一つ繋いで全部が建物だと言つたら分かりやすいと思ひ。

「なんでも色んな店や酒場、あと登録者専門でお貸しする安い宿屋も経営しているらしいですよ」

「なるほど冒険者たちからすればここにいれば全部揃えていくことが出来る施設なわけだ」

すゞく至れり尽くせりな場所だな、それでもちよつとテカすぎると思つけど。ドアさえないあけっぴろげな正面の場所から中へと入場、目の前には受付っぽいカウンター、右側は武器屋などの店が並び左は酒屋のようだ。昼間だけかなりの賑わいが見て取れる。まあこの街すづく人が多いしデカイもんね。

とにかく広くて自分ではあくすることすらできていないのだが、一度総人口がどれぐらいかガナド爺さんに聞いてみたが、

「五百万はいるんじゃねえか？」

「だつてさ。多いしそれが全部入りきる街つてどんだけだよ。さて今日は今後の参考にするために見学しにきただけだしどんな依頼があるのかだけみようかな。その後はトウカと店でもブラブラしますか。」

「キドーさん。冒険者ギルドにお入りになるんですか？」

「いや、今のところはその予定はないな」

「せつかくあれだけお強いのに……」

「ハハハ、アレはあんまり人前では見せたくないからね」

「フフ、そうでしたね」

恋人の関係のはずだけどお互い緊張してか、今だに敬語っぽい会話になつてしまつ。

トオウカ談笑しながら依頼の貼られた掲示板へと向かう。するとなにやら受付カウンター前で言い合いになつてているグループが目についた。

「チームで仕事したんだから報酬は均等に山分けだろ！？」

「ハツてめえ等みたいなガキのひよつこなんて一人で一人分で充分だろうが！ わざわざ俺が駆け出しあみ付き合つてやつたんだそれぐらいは感謝してもらいたいぜ」

新人とロートルがどうやら成功報酬の分け前について揉めているようだつた。新人側は俺より年下に見える男と女のコンビ、ロートルは剣士っぽいのが一人に槍を背負つたのが一人の構成だ。ロートルといつても全く強そうではないが。

「そんなバカな話があるか！　薬草の採取にだつてミミルの知識に頼つてばつかだつたくせにどこが付き合つてやつただよ！　むしろそつちが付いてきてたつて言つたほうが正しいじゃないか！」

ねつねつ猛々しい少年。嫌いじゃないよ。

「テツメヒ！ せきやがつたな、表に出る。ぶちのめしやる」

おいおいどう見ても少年は弓使い、それに盾持ちの剣士が決闘を仕掛けるとか有利すぎんだろ。ボコりたいだけだなあのオッサン。

「受けてやるよホッサン！」

「駄目だよおジョイ」。怪我しちゃう……」「

熱くなりすぎて自分の状況がよくわかつていないご様子です。若いね。少年の裾を引っ張つて制止しようとしている女の子の方が冷静みたいだな。

「あれは、ジョイとリリル?」

「え？ あの喧嘩しそうな二人って知り合い？」

「はい私達北西区とは別のスラムの子でちょっととした知り合いだつたんですけど冒険者に……」

「ほのストリートチルドレンから冒険者になるとほ見上げたやつだ  
な。

「キューーー……助けてはあげられないでしょ、うか？」

トウカの上目遣いからの頼み事來たこれ！ 『うかはばつぐんだ  
！ どうからみても理不尽な決闘だしな、助けるのもやぶせかでは  
ない。とこつかトウカの頼み事を断る気なんて全くないけどね！

## 第四話 いんじわ御仕事（後書き）

リアル求職中の私です

## 第五話 ジヨイ&ミール

「はいはーい、そこまでそこまで～」

今にも胸倉掴んで殴りあいそつた険悪な一団の中へと笑顔で乱入する俺。

「なんだテメエはー？ 関係ないやつはすつこじんでもー。」

「いやーそれがあつちの関係者なんだなーこれが」

「「え」」

俺の言葉に少年少女の方が驚く。それに対して田でトウカのいる方へと田線を送つてもうづ。

「あの傷はもしかして……トウカ？」

よかつたよ気づいて貰えて。

「という事で見苦しい真似はやめて大人しく報酬支払つていただけませんか？ こんなこと評判が下がるだけですよ？」

ギルドで悪評上げたってなんの得にもならんでしょう。しかも受付前でとか正氣の沙汰とは思えないな。

「くつ知つたくつちやねえよ。そつちに一人分払つて残りが俺らの配当が正当な報酬だよ」

やべえお話の通じない系統のお方でしたか。でも周りの反応が薄いな……受付のお姉ちゃんも苦い顔してるけど注意しないし……。もしかして「こいつら」ことの常習犯か？

「ねえ、この依頼は誰の名前で受けたんだ？」

ジョイと呼ばれる少年に向き直つて聞いてみる。

「え？ もうおれだけ……」

「じゃあ依頼の配当権は確かジョイ君が握ってるはずだよね？」

「だからなんだよ」

「では別に君たちの報酬が全くなくとも誰にも文句言えないよね？」

男二人の眉間にシワが寄る。

「そんなことが通ると思ってんのか？ それともなにか？ この金を力づくで奪い取るつてつもりでいるのか兄ちゃん」

手に持つた金袋をじつらに見せ付けて薄ら笑いを浮かべるアホ。

「ホントにあんたら頭悪いんだな。今君らは強盗と同じ扱いなんだよ？ 力づくでその金をこいつらが取り返しても法律的になんの問題も無いんだ」

受付のお姉ちゃんがあつと驚いている。気つけよギルド員。

「大人しく報酬を受け取つてお家に帰るか、何の報酬も受け取らず

に痛い目に合つか選べよ「ロロシキ」

「！」のガキイ……」

文句を言いながらも報酬を支払うロートル三人組。これだけ人のいる場所で強盗を証明されたて慣れようものなら即警備隊を呼ばれて牢屋行きは確定だ。流石にそこまでするアホでは

なかつたようだ。ていうかそこまで救いようの無いアホだつたら冒険者はやつてられないだろ？

「覚えとけよ」

お決まりの台詞を吐いて「ロロシキ共はその場から退場していった。いやいや覚えとけつて悪いの完全にそっちだからね？」

「ありがとウサ」しました

「……」

ミミルちゃんが頭を下げて俺に感謝を述べてくれる。ビービービービョイ君は收まりが付かずに納得できていないう様子。

「よかつた、なんとか丸く収まつて」

トウカが走り寄つて来て胸をなで下ろしていた。

「余計な事すんなよな、つたく」

「気が強いな、ジョイ君は。」

「ジョイ君のバカー————！」

その一言を聞いてミミルちゃんが手に持ったメイスを全力でジョイの頭に打ち付ける。

「何すんだよミミル！」

「あのまま決闘して三人がかりで来られたら私達ふたりじゃ絶対かてなかつたよ」

怖いのを我慢していたのか涙目でジョイにいかに危なかつたかを訴えるミミル。この子はなかなか頭が良さそうだな。

「そんなの気合でなんとかなる！」

それに比べてジョイ君は残念だな。

「なつりませ————ん————！」

再び全力で振るわれたメイスがジョイの顔面にヒットしてその体をふつ飛ばしたのだった。

「あつ……が……とつ……『ゼロコモ』……た」

食事処に移動した後、顔面が腫れ上がった瀕死の状態のジョイ君がおれに息も絶え絶えに感謝してきた。いかに自分たちに危機が迫つていたのかを、その身を持つてミミルに説明され

た結果なんとかご理解できたよつだ。

その後、色んな話を交えながら俺のおじりで昼飯を取ることにした。家の昼飯は最近メキメキと料理の頭角を現してきたコーリーに作つてもらひ事が多くなってきた。すでに味付けだけ

なら俺よつもうまくなつてゐる。単純な作業はミセスハーネウエイトが手伝ってくれるのでとても楽チンだ。

なんでもトウカが仲間を集めようと思つたきつかけは彼等だつたらしく、ジョイとミミルも五人ほどの小さな子供の面倒を自分の稼ぎで面倒を見ているらしい。普段はジョイが獵師と

して、ミミルは光の神殿の巫女として働いており、時折自分たちにできそうな依頼を見つけては冒険者ギルドの依頼を受けているそうだ。

「君たちホント偉いね~」

「いやキドーの兄ちゃんのほうがすぐえだる」

年齢を聞いたら一応一五歳のはずと返つてきた。俺と二つ下ですでに独立して子供を養つてるとかやつぱつこつこと。

「やつこやつさみたいのはよくある事なのか？」

「報酬を奪つほどの事はないですが、組んだチーム内でトラブルはよくあります」

「あいつら俺らがストリートチルドレン上がりだって知ってるから、いつも舐めてかかってきやがるんだ！ むかつくな！」

「ならびつしてチームを態々組むんだ？」

「面倒事が起きる上に分け前が降る行為をなぜ毎回する必要があるのか疑問でしかたなかつた。」

「私達、神官と弓師のペアだからびつしても前衛で頑張ってくれる人が必要で……」

「ああなるほどね。弓師も回復術主体の魔法使いである神官も接近されると困るもんね。接近戦に長けた人もいるらしいが、それは上位陣に限つた話らしいし。」

「とするとその弱みに漬け込んでくるやつが多いってほうが正解かもしれないな」

「…………そりゃも…………しません」

「元からそのつもつで近づいて来てるのかよあいつ……」

「こりは他のギルドに比べてあらくれ物が多いからね。隙なんかみせたら骨までしゃぶられそうだ。」

「待てよ？…………良い事を思い付いたぞ！」

「俺から一つ提案があるんだけど聞いてみる?」

トウカの話と今まで喋った感じからこの一人はかなり信頼できそうだ。なら、ギブアンドテイクでみんなでハッピーな関係だつて築けるような気がしたんだ。

「俺らと一緒にチームを組もう〜?..」

「そう、ただし俺は冒険者ギルドには登録しないから毎回助つ人として参加する」

「強いんですか? キドーさんつて?」

「それはもうびっくりするぐらい強いわよ

少し俺の迷惑を感じ取ってくれたのかトウカが一人の説得に回つてくれている。

「その条件を飲んでくれるなら、俺からもそつこしてあげられる事がある

「……もし飲んだら?」

「俺んちで住める権利をやる?」

聞いた話じや 現在一人は借家住まいで、いつも子供五人にはお留守番をさせているらしい。俺と心配の種が似ているだけにこの条件はなかなかの妙案じやないかと思うんだけど。

とりあえず家を見てもらうために一人を自宅へと案内する。

「つか……だろ……」

「信じられない……」

何に対してもそんなに驚いているのだ君たちは。ボロさ加減か？  
おつかしいなあ、なんとか一階の部分の大半を改築してボロい壁は全部といっぱりい。支柱は綺麗にして屋根は完成して

いる。いまだ柱しかない一階はともかく一階は見れるよう今までにはなったはずなんだけど。庭だって身の丈ほどに伸びてた雑草だって子供たちが頑張って整地してくれたので広さの分

かる綺麗な庭になっているし。

「これを一月ちょっとでしかも一人やつたのか？」

「ああ、そこなんだ驚く所」

確かに早いとは思うけど今だに古いの部屋にも壁紙なんて貼つて

いない角材丸出し状態だし、唯一寝ている広い居間にはカーペットを引いてはいるがそれでも色々な事を省略しての強

行だからこなもんじゃないだろうか？

「ほんとにいいのか？ 僕たちがこんなとこに住んでも？」

「せっちが良ければこくらでも」

正直俺はこの一人がかなり気に入っている。トウカと同じように苦難の日々を過ごしながらもそれに負けない日の輝きを持った彼等と一緒に過ごしてみたい、家族になつてみたいとお

もつたのだ。

「あつでも//ミルちやんは神殿勤めだから光の神殿まではここからは遠いか」

この広すぎる街中にあるといつても光の神殿までは定期的に大通りを回っている馬車を利用して一時間くらいかかる。往復毎日一時間は俺も嫌だなあ。

「いえ~巫女と言いましてもお私は下つ端もいこなので~。直接神殿ではお勤めしているわけではないんですよ」

なんだか緩いな~この子は。

「ですからあ住まいが代わったと申請すればあ近場の奉仕先を斡旋してくれるとおもいます~」

「問題はないのか。じゃあどうするよ、今すぐなんて話じゃないから返答を急がなくともいいんだけど」

「一つだけいいですか？」

「どうしたなぜ急にかしこまつたんだジヨイ君

「こうへりうどむどいわ」

「キュー兄ちゃんの実を見せて欲しい……です」

「おっとそれは重要だよね。」

「じゃあ軽く組手でもしてみるか」

その後存分に組手をしたジョイは元の口調に戻つて家族の一員に加わることを了承した。

## 第五話 ジョイ&ミル（後書き）

前から思つてたけどなんで洗剤のジョイは関西弁なんだろ?うね。

「飯が三食毎回食べられて、綺麗な服を着て、温かい毛布に包まつて眠れる。今までからは考えられないような生活を私達は送れるようになりました。いまだに信じられないこの光景を作り出してくれたのは、その存在感が凄すぎて信じられないキドーという男の人です。

そもそも私とキドーさんの初めての出会いだって人に言つても信じては貰えないようなものでしたし。

あの時、私は何もかもが終わつてしまふんだなって思つてました。分厚くて私じゃとても壊せない大きな壁に囲まれてこれから的人生を過ごすんだなって。でも空から現れたキドーさんはあつという間にその壁をなんと拳で叩き割つてしまつたんです。驚きましたよ、驚きますよ普通。ゲイロス一味は警備隊でも迂闊に手を出せないほどの実力を持つていると聞いていたのに、それをたつた一人で圧倒してしまつたんですから。私はその戦う姿を見て、火と武の神バー・ダグノミス様の使いなのではないのかと思いましたもの。

そして私達全てを見事救出して下さいました。心配だから一緒にいてくださると言つてくれるこの御方は本当に優しい方なんだと心から思いました。

そんな中で周りが騒がしくなり、夜が明けだすとずっと座つていたキドーさんは静かに立ち上がりました。私はもしかしたらここでお別れになるんじやないか、もうあえないんじやないかつて思つて

勇気を振り絞つてお礼を言ひに駆け寄りました。

「あ、あのありがと「ひ」わいました。本当にあなたは命の……いえ  
心の恩人です」

「いや……勝手にやつたことだ氣に

」

そんな私の言葉を聞いたキティーさんは田を見開いてしばらく固まつてしまわれました。なにか気に障るような事をしてしまったんでは無いかと思い、私もそのまま見つめたままで立ち止まつていました。すると顔を隠していたマスクを外して私に問いかけて来た。その顔はなんでだろう、始めて田にした時からイメージしていたそのもののお顔だつた。

「俺はキティーと言います。改めてあなたの名前を聞いてもいいだろつか?」

「えつ? あつはい! 私はトウカといいます」

正体不明、ここまで名前も明かさなかつた人が突然私に名前を教えてくれて、なぜか私の名前を尋ねてらつしゃつたので本当に私はこの時焦つてしまつてちゃんと喋れていんでしょうか。

するとキティーさんは私の目の前まで近づき、その膝を付いて私に手を指し伸ばしてござられました。これはもしかして物語なんかで聞いたことがあるよつな……。いやそんなはずはない、私なんかに。

「いきなりですまないと思つ。でももつ俺には止められないんだ。  
どうか俺の愛を君に送らせてもらえないだろつか?」

やう心の中で否定したのにあつといつ間にそれを覆されてしまつた。

「…………え？　え？　へえ！？」

そのあまりの唐突で、予想外の出来事にひどく狼狽してしまいましたよ。無理もないじゃないですか、だつて私はストリートチルドレンでこんな貧相な体をしていて、顔にだつて大きな傷を負つてゐなんですよ？ そんな私にこんな凄い方が、あ、愛のこゝ、告白をするなんて……。思い出すだけでも顔が赤くなつてきます。

でもその真剣なキドーさんの雰囲気はその言葉が心の底からの真実なんだと物語つていました。

私は嬉しくつて嬉しくつて、心に花咲いたよつに嬉しかつた。でもちよつと「ずるい」とも思いました。だつてきつと私のほうが先だつたから。空から現れてその手を差し伸べてくれた彼と初めて目を合した時から私の心は彼に向かつていたから……。

「…………はい」

喜んで心からその愛を頂きます。その代り、私の全てをあなたに送りたいと願います。

初めての驚きの出逢いからも、キドーさんは私の心に大きな大きな驚きを送り続けました。

まず、次の日にはあそこから逃げ出したリッキーを連れて来てくれて、しかも私達が住んでいた場所を購入してしまったなんて言つて。

「俺もここに住もうと思つてね」

なんて言い出すんですもの。あまりの驚きにきっと頭が麻痺していました。今考えるととても失礼ですけどその訳を聞いてしまいました。

そしたら。

「……俺は君が大切にしているものも大切にしたいと思つたんだ。理由はそれで十分だ」

私の為とおっしゃいましたよこの方! あまりにストレートでわかり易い理由に私はしばらく耳まで真っ赤にして俯いて固まつてしましました。

その後も驚きの連続でした。全員分のご飯を魔法を駆使して作ってくれたり、全員分の衣服を買ってくれたり、なんと家は自分で作り上げるなんてもおっしゃいましたし。この人の凄さがどこまでいくのか測ることを諦めそうになりましたよ。

でも衣服に喜ぶ子供たちを一人で見守っていた時、静かに私の手を握つて来られました。ちょっとビックリして見たキドーさんは見るからに緊張して額に汗までかいっていました。

ここまで凄さを見せたキドーさんの初心さといふか純情さを見て私はなんだか「かわいいな」なんて思つてしましました。

「……フフ」

でもそれが私に向けられてるつて思つと嬉しくて自然と顔が綻んでしまいました。

それからも驚きを絶やすことなくキドーさんとの日々は続きました。あまりにおどろかしてくれるものだから。

「キドーさんつてまるで体中がビックリ箱みたいですね!」

つて言つてみたらなんだか少し悩んでいたようでした。……これだけ色んな事をしてきたのに自覚が無かつたようですね。鋭いのか鈍いのか、ほんと面白い人です。

そんなある日、冒険者ギルドに案内を頼まれてキドーさんと一緒にで行くことになりました。一人つきりでどこかに出かける時は手を繋いで歩くのが最近の決まりみたいになつてていたので、勿論この日も手を繋いでゆつくりと歩いていました。家から冒険者ギルドまでは徒歩で一時間以上かかるので、もちろん市内の大通りを回る大型馬車を利用しましたけどね。

そして人気の少ない通りを歩いている時、ふとある事を思い付いたんです。いつもいつも、驚かされてばかりのキドーさんをいつか驚かせてみたいと思っていた私は今までしたことのない恋人っぽい話題を振つてみたんです。

「キドーさんつて私のどいが良かつたんですか？」

初心なキドーさんなら「いつ質問は苦手なんじゃないかな~って思つてみたんですけど。苦手だけど嫌いじゃないはずですし。

「どいがつて……全部だけどい？」

素面で返しましたよこの人！　たまに「いつ事をやひつ」というから私も気が抜けませんよ。

「でも、私つて孤児でしたし、あの時初めてお会いしたばかりでしたし、それに……私の顔には大きな傷がありますし……」

「この時、ちょっと焦つてしまつていていたんでしょう。今まで疑問に思つて心にしまつていていたことが漏れ出してしまいました。

「孤児である事は好きになれない理由にはならないし、なにより一目惚れだつたしね」

私も一目惚れでしたけどね。恥ずかしくて言ひませんけど。

「それにその傷の経緯はコーリから聞いたよ？」

いつもは一言一言しか喋らないコーリですが、一人つきりになると凄くしゃべりだす上にすつごく口が軽くなるんです。キドーさん

にも慣れてくれたのかお喋りるのはいいんですが、彼女とは仲間を集めだした時からのなかなか長い付き合いですから、どんな事を喋ってしまっているのか気になる所です。

「それはトウカの……そのなんだ……美しさに何の陰りも見せないし。むしろトウカだつていう魅力が際立つよ」

驚かさないまでも動搖してもらつくらいのつもりで質問したのに、逆に私が驚かされてしまいました。

私が子供たちを守ると決めた時。私の持てる全てを投げうつても守つて見せると決意しました。それは自分の幸せだつたり、将来だつたり、女としての自分だつたり、そしてこの顔の傷もそれの為の一つでした。

手を差し伸べてくれるだけではなく、今まで捨ててきたモノをキーデーさんは簡単に拾い集めてくれるんです。ああなんて、なんて愛おしい人だらうか。

その嬉しさの余り、私は唐突にキーデーさんの腕を抱きしめるように腕を組んでみたのです。

「ト、トウカさん…? ビビビビ、びつしましたか…?」

どうやら急な事に驚いてくれているようです。質問作戦は失敗だつたようですが結果としては作戦成功のようです。驚きのあまりに口調まで変わつてしまつていますからね。今度からこうこうふうな物理的アタックを心がけてみましょうか。

「フフフ、なんとなくじつやつといたい気分なんです」

ガチガチに固まつた体を何とか動かしているキーデーさんはとつてもおかしかつたですね。頑張つたかいがあつたというものです。そ

して私はその腕の力強さと暖かさからとてもとても幸せな気分を堪能させて頂きました。

でもなんだかチラチラと視線を「いらっしゃる」、「いらっしゃり」か一点を気にして見ているような？

「あつ」

しまった！この形で腕に抱きついたら、胸を押し付けるような形に！！かなり時間が経つてから気付いた私は真っ赤になってしまつたのですが、自分から仕掛けでいて離すに離せず一人共無言のまま歩くことになってしましました。

長い沈黙であたふたした一人だったんですが、偶然にも視線が一瞬重なつて見つめ合う形になってしましました。頭が真っ白になつていた私は視線を逸らす事も出来ずに。。つという最高に甘い雰囲気を作り出す真横をかなりの勢いで馬車が通り過ぎてその空気を壊されてしまいました。

おしゃつ！

何が惜しかったのかは、ご想像にお任せしますが、その後改めて

腕に抱きつくな」とは出来ず、また手を繋いで歩くことになりました。よくあそこまで男性に対しても恐怖を抱いていた私がここまで変われたなと自分ながらに思いますね。これもキーデーさんのせいに間違いありませんけど。

そんな幸せ気分で冒険者ギルドに行くと、そこで私の知る友人に再会することになったんです。

ジョイとミミル。子供たちを守りうと決心したころに男性に襲われそうになっていた所を助けて貰つたことがあつたんですけど、その時に話してくれた彼等の話から思い付いてみんなを集めることになつた始まりの人。

ジョイとミミルは私の滞在していた北西区とは逆の南東区にあるスラムを拠点にして、いたストリートチルドレンだったそうです。でも偶然にも光の神殿の神官にミミルの才能を認められてそこで勉強しながら働くことになり、その賃金で年下の子供たちとジョイを養つていけるようになつたらしい。もちろんジョイも負けじと働き口を安い賃金なりにも見つけ出して必死に働いているそうだ。そのうちお金が貯まつたら冒険者になりたいなんて夢も持つて、立派な男の子だ。

その一人を冒険者ギルドで見た時は夢が叶つたんだと思えて嬉しくて、でも同時に少しだけの罪悪感も感じていた。

彼等が私達同様苦労してきたストリートチルドレンなのはわかつていた。願うことならキーデーさんの救いの手がジョイとミミルにも差し伸べられたらどれだけ良い事だろうかと思つた事は何度もあつた。彼等もまた、私の仲間であったから。

でもそれは出来ない。私達にこれだけの事をしてくれているキーデーさんに我慢に等しいお願ひをするなんて事はとてもじやないけどできつこなかつた。

だからせめてもと思つてジョイ達が揉めている所だけでもと思つたのに……。

なぜかジョイとミミルが一緒に住む事にトントン拍子に話が決まつてしまつていた。

もしかして心を読まれてしまつたんじや無いだらうかと疑つてしまつたけど、理由を聞くと確かにお互にひとつといつてお話になつてキーデーさんにもメリットがあるみたいだつた。

その時なんだか笑顔で確信してしまつたの。きっと私がキーデーさんになんかされない日々はこないんだろうなつて。

## 第五話 外伝 トウカの驚愕（後書き）

だいたい最初からここまで勢いに任せて一日で書いた。自分でもドン引きするほどの集中力でしたよ。

そんなこんなで今後の方針はだいぶ固めることが出来た。まず家の完成を目指す事を基本としていき、ジョイとミミルの仕事をたまに手伝い、貯蓄金額が五万ディクスを切つたら家の建造を一旦停止して金を本格的に稼ぐ。それと平行して情報ギルドの仕事を行つていくのをこれから活動プロセスにしていこうと決めた。

家は不完全なところもいいところなので早く完成させたいので当然最優先、ジョイ達を手伝うのは当たり前だし、五万ディクスを切つたらキツイのは前に述べた通りだ。そして情報収集活動については積極的にしていくつもりだ。

元から悪党を見つけるためには必要な行為ではあったし、ここには情報ギルドというものがあり、その話によつてはかなりの金額を得る事が出来る。しかも信頼度を上げていけば逆に向こうからの情報提供にも期待が持てるはずだ。証拠にゲイロス一味の情報報酬を受取りに行つた時、マリナおばさんに詳細を少しだけ聞いてみるとどうやら犯罪に対する情報の金額は他の情報に比べればやや高かつたので、情報ギルドがその系統に対して力を入れているのがよく分かった。結局俺の売つた情報の金額だつて三万五千ディクスにもなつたのでかなりのものだろう。

あまりに高い気もしたのでマリナさんに聞いてみたが。

「一つの情報を確定することで色々な情報が手に入ることもあるのよ。キドー君が売つてくれた情報もそんな類の情報だったわけ。おかげで面白いことが色々わかつて助かつたわ」

「だそうだ。情報の活用方法なんてのはてんて分からぬのでそちらへんのことは専門家にお任せする方がこちらの都合としてもいい。まさに渡りに船とはこういうことだらう。いや、実際その規模と実

力からすれば渡りに軍艦かな？ 本当にラッキーな出会いだつたな。

情報収集に関してはちょっととした自信がある。なんせ地球で俺の生きた世は情報という名が付いた時代だったので、情報の有用性はその身に感じるほどに理解している。機械の勉強に邁進していた俺の学習速度も、図書館、専門誌、インターネットの情報媒介が安易に利用で來たこととその速さは飛躍的に伸びていたことは確定的に明らかだつた。

こちらでいう生まれた時からもつ魔力の感覚の代わりに、俺は情報の感覚を持ち合わせていると言えるだろう。使いこなせてはいなあいけど。

そういえば忘れられれているかもしねないが、ヨルガの森で獲得していた熊の皮などは全て販売した。全部をジーニーさんのところに売るのは流石に目立つので他の五商家にそれぞれ分けて販売した。

五商家はボライアズ家の他には建築のナルバ家、食品のノーアーリス家、武具のグライス家、貿易のロナイホーン家というのがある。それぞれ得意分野で活躍しつつ手広く商売をしているそうだ。ちなみにボライアズ家は資材販売を得意としていて、なんでも石切場と鉄鉱石採掘所がほぼ同時期に取り尽くしにより閉鎖してしまつたために家が傾いたとジーニーさんが苦笑しながら説明してくれた。そこでジーニーさんが新しく色々な販売ルートを開発してなんとか持ち直したそうだ。

まあボライアズ家に持ち込んだ時のように頭首クラスどころか一族の一員が対応することは一度もなかつた。失礼に見えるかもしれないが、お得意様ならともかく有象無象の相手を一々相手に出来る

ほど暇ではないから五商家なのだ。

どつちかと度々俺と会つてくれるジーーーさんのほうが異端であるのだよ。ジーーーさんもかなりの変わり者なんだろ?ね。アレだアレ、「類は友を呼ぶ」ってやつなんだろ?。

そして今回は本当に金欠が大変だったので遂にアレを売ろうと決断したのだ。

「キドーさんは体が全部ビッククリ箱で出来て居るかもしませんね」

俺の持ち込んだサーベルタイガー、正式名称ワイルドカッターの毛皮を鑑定し終えて俺と午後のお茶を楽しんでいたジーーーさんが偉く失礼な事を言い出した。でもこないだトウカにもおんなじような事言われたな。……おかしいな俺的にはまだまだ自重しているつもりなのだが。

「そういえばサーベルの部分はどうされました?」

「あれは加工してから自分で使おうかと思つてゐるそうです」

一応この魔物達の素材は知り合いの人人が集めてきたという設定なのですが、ホントは自分で使う気満々です。

「なるほど、あれは鉄すら切り裂くと言われる素材ですかね」

ジヨーンさんは大体週一ペースでお茶に招かれて「いやつって談笑している。今回はついでに商談も行つた次第だ。

「それでお願いがあるんですけど。この商品の販売を依頼した方は前も言った通りあまりこちらでは有名に成りたくない事情がありまして。なのでまだワイルドカッターの懸賞金は受け取つて居ないのですよ」

「なるほど、それを私が受け取つてこれば良いのですね？」

「報酬の方は折半で構いませんので」

「いやいやこの魔獸を倒したことの労力は相当なもののはず。代わりに受け取るだけの行為にそこまでの報酬を頂くわけには行きませんよ。割合はそちらが九、こちらが一で結構ですよ」

商人つて業突く張りなイメージなんだけど、ホントこの人いい人だわー。なんでここまで氣に入られているのは大いに謎だが。

「どうです最近は？」

「いやー新しい事業はやつと軌道に乗つてほつとしているんですが、不景気な話もあって困っていますね~」

「何があつたんですか？」

「実は家が管理している鉄鉱所の近くで魔獣が出没して作業効率が激減していましてほとんど動いてないも同然なんですよ」

「冒険者ギルドに依頼は？」

「それがこの魔獣はかなり多い上に凄く逃げ足が早くて。何匹かは討伐したもののその度に学習しているらしく、今では冒険者が近寄ると全く出でこなくなってしましました。しかし労働者だけになると狙つて出でくるという厄介なヤツらをして難航してますね」

ふむ、あのベアーハッグも連携してたし多少頭の良いリーダー格が統率している群れがいるんだつたらそれくらいはするのかな、魔獣つて。

そうだ。試しをしてみるのにはこれは都合がいいんじゃなかろうか？

「どうでしょう。」このワイルドカッターを倒したチームに依頼してみるというのは？ チームの一員には猟師を生業にする者がいたはずなので逃げた先を追跡して巣を直接叩くなんてことも出来ると思うんですけど？」

チームを組んで一週間経過していたが、その間に二度ほど既に依頼をこなしてジョイの獣にも一度同行させてもらつていた。猪突猛進タイプのジョイに隠密性の重要な猟師が出来るのかと不安であつたが、思いの外猟師としての才能はかなりのものだつた。知識はまだそこそこでしかないが、とてもなく感覚が鋭いので気配察知や探索行動などがとても上手かつた。それに身の軽さにかけてはかなりの者で、弓師としてはすでになかなか良い線をいつてていると言えるだらう。それがどこまで通用する高さにあるのかを一度限界まで

測つておきたかったのだ。

なんせ今俺はジョイの戦闘技術の指導を頼まれている師匠的位置にいた。空手以外はとてもじゃないが教えることができないと一度は断つたのだがその熱心さに負けて色々と強くなるための方策を検討中だった。

「なるほど……獵師ですか……。問題の魔獣は大型で今まで逃げていく先は森の中だった為にその機動力に振り回されていました。しかし痕跡から後を終える森の専門家といえる獵師ならばもしかするかもしれませんね。戦闘能力においてもワイルドカッターを倒せるほどの力があれば申し分ないですし」

ふむふむと言いながら思考の海に入つて呑んでいたジョーーさん。冒険者の仕事なんて完全に範囲外のことなのによく頭がそんなに回るな～。

「いいですねそれ。是非お願ひしたいです」

「わかりました。それでは俺が直接お願ひしておきますのでそちらは冒険者ギルドにジョイというこの街所属のソード級の冒険者宛に指名して依頼を出しておいてください」

ソード級とは冒険者ギルドのランクで下から、ダガー、ソード、クレイモア、ハルバード、セイントソードの五段階になつていてる。

「了解です」

ジョイについてのシッコリせぬし。ほんと空氣も読んでくれるわこの人。

さあ人を助けながら、少年少女一人の可能性を確かめて、俺の戦

いの手札も試しつつ、しつかりと働くつじやないか。

## 第七話 いっぱいイッパイ

ジーニーさんからの依頼を早速ジョイとミミルに説明して準備を整えて次の日には鉄鉱所の近くにある村であるワインストンへと出発した。今回の依頼は初めて数日間かかるであろう依頼だったのでフイリーにはお留守番してもらうことにした。子供たちだけの場所であり、スラム街にあるあの家がゴロツキに襲われないとも限らない。前の状態ならあまり心配はいらないが改修が進んだ今ではそれなりに良い見栄えになってきたので危険性は大いにある。

食料なんかの買い出しはマリナさんにお願いしておいた。これらから情報ギルドには大いに協力していく所存を伝えると快く引き受けてくれた。どう考へても武具屋での働きより情報ギルドへの献身度の方が上回っている気がするが大丈夫なんだろうか……。

留守番についてフイリーは猛然と不満をブー垂れていた。

「そんな面白そうな事に私を置いていくの！？」

俺とトウカによる懸命の説得によつてなんとか納得してもらつたが、代わりに一個3デイクスもする特別性の飴を一袋も買う約束をするはめになつてしまつた。そして俺は見た……その約束を交わした一瞬にフイリーの見せたしてやつたり顔を、実に悪そうな顔だつたよ。まさか一時間に及ぶ抗議は飴を買わすための策略だったのか？まさに計画通り、に運ばれた事に気づいたが既に時遅しである。ワインストンはブローナスから北にある山岳地帯の手前にあり、歩いて三日といった距離だ。当然そんなに時間をかけたくない俺は馬を一頭レンタルしてミニマルとジョイを乗せて走らせる。もちろん俺は自分で走りましたとも。そして更に早くかつ効率的にするため俺と馬には『ウイングコード』の魔法を常時かけながら進んでいた。

対象をその効果を宿すコートシリーズなのだがその効果はちょっと他とは変わっている。火と水はそのまんまだがウインドはその対象に風で包んで軽くし、ストーンコートは石で包むことはないがその対象を若干硬くする効果を發揮する。ライトコートについてはミルに聞くとなんでもほんのり光る膜ができる闇への耐性がつくとかなんとか。

つまりウインドコートをかけることによって俺と馬さんはより軽快により疲れずに走ることが可能なのだ。

道のりを順調に進み、無事ウインストンにたどり着く。なんだかジョイとミルが道中口数が凄く少なかつたが馬は苦手だったんだろうか？

「…………キドーって強い人じゃなくて化物じみた人に入る人だつたんですね」

「え？ なんで？」

ずっと走り続けてはいたが、ウインドコートをかけた状態の一端の冒険者なら不自然ではなかつたはずだが。

「これだけ長い時間、ウインドコートを維持できる魔力量を持つた人なんて居るもんなんですねえ……」

「あ

しまった。魔法に関しては大した才能もないのに忘れがちだが、魔力量に関しては尋常でない量が保有している事は把握していた。なにせ今までどれだけ使い込んで今だに底を感じたことすらないからな。魔力はその消費量にしたがって倦怠感とか精神的鬱屈感が現れ出すらしいけど、道中魔法を使い続けてきた今も、そんなの毛ほども感じない。

「ごめん、これも黙つといてね」

すでに一人には俺が強さをなるべく隠したいとは伝えてあるのとこれも口止めしておこう。

「こんな話しても誰も信じてくれませんよう」

そこまで荒唐無稽なキャラなのか俺は？　さてとりあえず村人達や鉱夫の人に話でも聞いて回りますか。

朝早くに出発し、ウインストンにはお昼前に到着しておりそこから始めた聞き込み捜査も無事に終了。少し遅いお昼ご飯をジョイとミニルと食べながら情報をまとめる作業に入った。あまり常識的と

はいえないしこの世界の知識量はまだまだ乏しい俺だけで情報から何かを導き出しても間違いとか勘違いが起こる可能性が高いので秘密にしたい事柄以外は常に誰かに聞いてもらつようにしていた。情報の価値もあがるし、俺の足りてない常識も埋まつていって一石二鳥なのだ。

「まず分かった事は、対象はグレイウルフという狼種の魔獣で坑道へと近づく、もしくはその方向に近い山道を歩いている時に襲われることがほとんどらしい」

坑道付近の地図を広げて過去に襲われた場所に印を書いていく。

「かなり分かりやすいね」

「一目瞭然です」

その襲われた場所の印を見れば大体どのあたりがグレイウルフ達の生息圏なのかは誰にでもわかるくらいわかり易かった。

「ジーニさんは単なる大量発生だと思っていたらしく、俺らの前にだした依頼は五匹倒したらいくら追加でも報酬を出す、なんていう形をとつてその数を減らそうとしたらしい」

「結局それで何匹減ったの?」

「一回田いじや七匹討伐出来たらしいけど、それ以降のチームは三日かけて一匹が闇の山だつたらしい」

傾斜のきつい山にある森で四足獣と追いかけっこしても捕まえられるはずもない。

「最初の被害から学習したんですかねえ～すつゞく賢いワンちゃん  
なんでしょうか？」

狼ですよ!!!ミハさん。

「冒険者もその用心深さを警戒して森の奥にまでは足を踏み入れて  
はいな」やうだ」

グレイウルフはかなりの群れを成す種族で、過去最大記録では1  
25匹とぶち当たつてしまつた冒険者がいるそつだ。しかもこいつ  
らは歳を重ねていくと魔法に近い力を駆使する物が現れるらしく、  
数と魔法なんていうかなりの厄介さを持ち合わせている。

「冒険者の鉄則に『群れとは正面から当たつてはいけない。当たる  
なら用意周到な準備をしてからにせよ』なんてものがあるくらいだ  
しな」

何やら思ひとおりがあるのかジョイが椅子を後ろに傾けながら空  
を見出した。

「でも～わたしたちの～任務つて壊滅なんですよ～？」

ああなんだか!!!ミルと会話すると力が抜けるな。

「こんな状況じゃかなり難しいのは分かつて。だからこのやつが  
支払いだ」

グレイウルフは単体ではそこまでの脅威ではない。普通のやつが  
数匹相手でもやりようによつてはジョイ一人でなんとかなるだろ？。

魔法を使う強化型でもジョイとミミルならなんとか勝てるそつだ。

15歳の駆け出しでもなんとかなる程度の魔獣なのだが今回の依頼報酬はなんと三万デイクス。通常のグレイウルフ討伐に比べればおよそ十倍近い。

なんでも既に鉄鉱所は二十日ほど稼動しておらず、そのための損害はすでに一十万デイクスを超えてるといつ。今はなんとか在庫を売りきばいて販売契約は保たれているが、もしも足りなくなりその信用を失うような事があれば以前のお家没落騒動の一の舞になりかねない。つまりボライアズ家にとつては早急に片を付けたい案件なのだ。

「明日の明朝から森に入つてこの襲われた辺りを搜索して群れまたは巣を見つけ出す。最終的に全滅させられなくともバスを仕留める事ができればここから追い出すことは可能なはずだ。もし見つからなくとも暗くなる前には撤退してこの村まで帰つてくる。この人数で夜中にグレイウルフとやり合つなんてのは御免被りたいからね」

「なかなかしんどそうだな～」

「えええ～わたし体力には全然自信ないですよ～？」

「それに問題に対してもちゃんと用意はしてあるから大丈夫だよ。なので探索は明日からだな」

「「了解」」

ああ素直。本当に助かるよこの子達は。

「兄ちゃん一ついい？」

「なんだジョイ？ 今晚の飯でも気になるか？」

「ちげえよ。明日の探索つておれのスキル便りなんだよな」

「ああ、ジョイの探知力があつたからこそ受けた仕事だからな」

「おれが便り……ヌフフフフ……からこそとか……ムフツムフフフ」

なんだかジョイが気持ち悪い笑みをこぼし出した。

「ジョイくんとわたしは今まで利用されても～頼られることなんて～なかつたからね～」

ああなるほど。しかし俺から言わせれば頼らないでどうすると物申したい。ジョイの探知力はもちろんのこと、ミミルの神官として学んでいる薬学の知識はなかなかの物だ。小さい頃に魔法の才能を見初められて神殿に仕えて以来今までべんきょうしてきたから当然と言つていたけどそれでも凄いのは凄い。おまけに光属性の治癒術も使え、ファイヤーボールやストーンウォールなんでもの習得している。ジョイの身体能力もほとんどが平均以下ではなく、その身軽さにおいてはちょっとした体操選手並のものだつた。今まで散々この一人を利用してきたのは足したこと無い奴らばかりだつたんだろうが、利用するよりチームとして引き入れた方がよっぽどお得だつたと思うんだが。

世の中見る目の無い奴が多いもんなんだな。

「便り頼られてこそチームだぜ！」

親指を立ててドヤ顔で決めてみたが、それを見た一人は吹き出した拳旬にしばらく笑いが止まらなかつた。

あれれ～？ かつて良く決めたつもりだったんだけどな～。

次の日は予定通りまだ明るくなり始めた頃に出発。ちなみに俺は武具の類はカバンに詰めて運んで、村を出てから装着した。もちろん怪しいマスク付きで。正体を隠すならやはり徹底的にね。

「ほんと変わってるね～キーデー兄ちやんって」

褒めんなよ恥ずかしい。

一番最近ウルフは目撃された場所へと向かい、そこからジョイに任せて痕跡を追っていく。なるべく気づかれないように忍んでの移動だったが、速度はそれなりだった。一時間もしないうちに山の高配にミミルが根を上げていたが、あらかじめ疲労回復薬を混ぜた水筒を渡してあり。休憩の度にそれを飲ませることでなんとか耐えて貰つた。

といつか冒険者稼業してその持久力のなさなどつなのよ～。

「結構な数がいんのかもしねー

痕跡を追つているなかで狼の気配を遠目に感じる事が度々あったようだ。

「もしやばそつうな数に出くわしたら俺が時間稼ぎはするから一回散  
に逃げろよ」

「もううんそりあるよ」

あれ？ そこの仲間を置いて逃げられるかつて台詞を期待してい  
たんですけど。

探索を開始して六時間が経過した。

「なあジョイ…………俺さすがに嫌な事が思いつきそつうなんだけ  
どぞ」

「気が合つね兄ちゃん…………おれも実はさつきからそんな気持ちが浮  
かんできただ」

苦虫を噛み潰したような顔になる。正直頭痛がしてきそうだった。

それはなぜかといふと、これだけ探索したのにグレイウルフの気  
配を感じてもその姿を見ることは一回もなく、それでも巣と思わし  
き場所まで辿り着いてはいたのだ。なぜか三箇所も。野生に生きる  
魔獣が巣を転々としている？ いやいや、ここに来る前に冒険者ギ  
ルドにあつた魔獣図鑑にはそんなこと書いていませんでしたよ。  
近づくと消え、有り得ない行動をしているのに縄張りに入る鉱夫  
だけを襲う？ ……盛大な違和感しか感じないですよ。

「そういや昨日会った人で、討伐に付き添つた村人に聞いた事を今思い出したんだけど、なんでも「狼の群れにかち合つた時、狼たちは一斉に違う方向に逃げた」らしいぜ」

「……決まつて欲しくないけど決まりだな」

普通逃げるなら同じ方向に全員で逃げる。だが違う方向に逃げて見せればどれを追えばいいか迷つてしまい。結局追いつけなくなってしまう。

つまり狼は危険を犯してまで逃げきる事を優先したわけだ。……ねえよ。有り得ないだろ、獣が本能を置き去りにした行動を取るとか。

本能を抑えこむ事が出来る力は世界でたつた一つ『理性』だ。そしてそれを持ち合わせているのは……。

「人間相手は想定外にもほどがあるぜ……確かに魔獣使役は『ギフト』保持者が可能に出来たっけか……。これは三万ディクスでも安かつたかもしないな……」

神からの加護であり贈り物、大いなる力『ギフト』。そんなありがたい力をこんな事に使う奴を相手にしなきゃいけないとはね。

燃えてきた。

## 第八話 狼の遠吠え

新事実を発見してまつた俺らは長い休憩をとつゝ昼飯を食べていた。これまで魔獣の仕業と思っていた被害が人によるものだと分かつたならこれは事件だ。昼食をとりつつも元から集めていた情報を踏まえて改めて状況を整理していく。

「まずは……目的だな」

強盗の線はない。襲われた被害者にも近場の村にもそういう跡は見当たらなかつたようだし。

「むむむ、とすると……」

ジヨイと一緒に印を付けた地図と睨めっこをする俺。

「ワンちゃんの餌が欲しかつたとか?」

「いや、わざわざ人間を襲うとか面倒くさいでしょ?」

カニバリズムな狼を人間が操つてるとかギャグすぎるだろ。

「誰かを狙つてたなんてのは?」

「ありえそただけな話だけどな。でもそれなら今逃走なんて手段を取つてるのがちょっと不自然だな。最初に亡くなつた人が狙いの人だったら今頃とんずらしてゐるだろ?」

「やっぱり採掘の妨害なんじゃないの?」

「それが妥当なところなんだけれどねえ……」

人も物資も被害を受けているのは鉱山関係だけだ。妨害としてやつてているのなら一応は辻褄は合つといえども合つたのが。

「ここまでする？ 普通？」

数ある鉱山の一角を妨害するために人を殺して、冒険者まで相手取つてなんてのはハイリスクすぎると思うんだよね。いうなればご飯を食べるのを妨害するために手に取つた茶碗を一々叩き割るような難しく面倒くさい方法を使つてゐる。妨害が目的ならもつと穩便かつ気付かれないようにやり方などいくらでもあるように思える。その中でもこれはほぼ最高な程に目立つ部類に入るだらう。

「じゃあさ、例えれば、どこかに近づいて欲しくなかつたとかつてどつ？」

なるほどなるほど、襲つていたのは人払いのためか……。それなら最初だけとはいえ冒険者にまで手を出した経緯にも説明がつくな。じゃあどこに近づいて欲しくないか考えればもしかすると。

「えつと、一回目の討伐以来をこなした場所つて聞いてるか？」

「あつそれなら～わたし～知つてますよ～」

話を聞いていたミミルが地図に指をさす。そこは鉄鉱所に続く道に継ぐ最も人が襲われた場所でもあつた。

「オーケーオーケーなんとなく分かるような気がする

推理なんてのはあまりやつたことはないが、元からあるものを組み立てて答えを導き出すのは職人柄得意だぜ。

「よく見れば被害を被つた場所はその辺りが中心地になつていて。たぶんその先に田標の場所があるな」

「兄ちゃんの予想が当たりかもしない。こんな山越えさえ出来ない道なのに最近馬が走つた後がある」

「やつぱり」ればテカそうな山にあたつたのかもしないな

相手が相手だけに危険だと判断はしたものの、個人的にギフト保持者は今後の為に是非一戦交えておきたかったので任務は続行した。もちろんジョイとミミルには村に帰つておいてといつたのだが。

「キドー兄ちゃんだけじゃ奥に行つたら帰つて来れないだろうから付いて行つてやるよ!」

「えへつと、敵さんが強いなら、治癒術が必要だと思つので、

と言つて俺の指示を全く聞かなかつた。いい子だよホント君達は！　帰つたら存分にハグしてあげよう！　たとえ嫌がつてもな！　正直かなりの我慢で依頼を続行して、危険度は最初の想定を大きく超えているので心配なのだが……。まあこの一ヶ月、俺も鍛錬を怠らずに強くなる術も磨いてきた。相手が獣を操る力を持った人だと分かつていればいくらかの予想を立ててる事ができるのでなんとかなるとは思うんだけどね。

そして俺の予想が当たつているようなので、あとはこの馬の蹄の後を追えば目標まで辿り着ける。

「じゃああとは作戦通りにな。重要なのは落ち着く事だ。どんなに危機的状態になつたとしてもな」

俺たちは人の知恵にて蠢く狼たちの群れの場所へと足を踏み入れていった。

「兄ちゃん……」

「ああ……」  
「……」

狼達の気配を察知したジョイが俺に小声で合図を送る。しかしそ

の数が膨大なため俺にもなんとなくわかつてしまっていた。二人は耳に手をあて、俺は吸えるだけの限界まで息を吸い込んだ。

「出てこいよ魔獸使い！！！！！ 近くにいるのはわかってるぞ！！！」

なぜ分かるか？ それはこいつらが人を襲つてまで秘密にしたかつた遺跡の入り口が既に見える場所まで俺たちが来ていたからだ。いくら冒険者を避けていてもそれを発見されて生きて返す訳には行かないはずだからだ。その為には全力を持つて事に当たる、そんな予想を俺は立てていた。

数秒の沈黙の後、周囲を取り囲むように狼達が姿を見せ、その中に一人の男が大きな狼に跨つて現れた。狼たちの数はパツと見ただけでも四十を超えていそうだった。

「なぜ貴様私の存在に気付いたのだ？」

手足と顔を包帯で巻いたような不気味な男が俺に質問してきた。

「あんたはなかなか几帳面なようだけど、狼までそんな動きを見せれば獸としておかしいって気付くさそりや」

「ん~ふ~ん、完璧にこなしてみたのが逆効果だったわけだよフトソン君。ジョイが居なきや絶対気付かなかつたけどね。」

「なるほど、獵師を欺くことまで考えて使役をしてはいなかつたらな。今後のいい参考になつたよ」

男が手を挙げる。

「では、死ね」

男が手を振り下げると、少し離れた位置でこちらを囲んでいた狼たちが一斉にこちらに飛びかかって来た。

「想定通りなんだよマヌケ！」

「「ストーンウォール」」

俺とミミルが三人で固まっていた場所の後方百八十度に石の壁を作り上げる。元からこういうふうに襲ってくるとは予想済みだったのだ。なぜなら複数であることを有効活用するならこれが最善の手であるからだ。人間なんて必ず死角なんて呼ばれる隙つてのがあるもんで、それをつくなら全ての方向から襲いかかるのが手っ取り早く確実なのだ。

これで攻撃は前方だけに集中すればいい。まあそれでも10匹近くが絶賛俺に向かってきてるわけですけどね。なので今回の俺のビックリドッキリの必殺技の出番なわけですよ！

「『ウイングボール』アクトテン！！」

俺の詠唱と共にファイヤーボールが十個、空中に出現する。ちなみにアクトテンはまったく必要ではなかつたけどカツコイイかと思つて気分で付け足した。

「はあ！？」

「ええ！？」

味方のミミルとジョイが驚きの声を後ろで上げている。ストーン

ウォールを作ったあとは俺がなんとかするとしか言つていなかつたのでビックリしたようだ。

魔法を複数同時に出すことはイメージ次第で直ぐに可能だということはわかっていた。しかし目標に飛ばすために一々指定していかなければならなかつたので脳内の操作だけではとてもじゃないけど無理だつたのでお蔵入りしていた。しかしそこは発想の転換。「飛ばせないなら飛ばさなければいいじゃない」とね。

狼たちは浮かび上がつた風の玉にも動じずに俺へと牙を突き立てる為に迫つて来た。よく訓練されたワンちゃんだぜ、感心するよ。ただし今回はそれが駄目なんだけどな。

側に近寄つた狼達へと浮かび上がつた風の玉が次々に飛び出していき、狼達を吹き飛ばしていった。

俺は全部の球に一つの指定を下していた、それは『俺の5メートル以内に入った物へと飛んで行く』である。発動した時から入つているジョイとミミルは対象とはならないが、襲つてきた狼達は見事にそれに引っかかつてくれたのだ。もちろん一匹に付き一個ずつ飛びようにも設定してある。

「……？ 貴様あ！ なんだそれは！？」

狼達が同時に十五もやられて動搖したのか魔獸使いが俺に質問を飛ばしてきた。

「何つて魔法ですか？」

ウインドボールの数以上に迫つてゐる狼を拳で打ち据えながら質問に答える。

「そんなウインドボールなぞ見たことも聞いたこともないわ！」

「じゃあ俺の特有の使い方つて事になるのかあ～へえ～

いい事聞いたな、オートメーションって名付けるか。後ろから襲えない狼が迂回してきて徐々に前に回つてきているが、俺が拳で、遠目にいるのをジョイがどんどん矢で迎撃していく。いいよいよジョイ、君は土壇場でこそ本領を発揮するタイプなのかもしれないね。

「まずい！？ 集まれお前たち！」

既にかなりの数の狼が動けなくなつたのを見て男の側にいた大きめのヤツらを自分の周りに呼び寄せ始める魔獣使い。

「放てえ！～！」

グレイウルフの上位種が使う『切り裂く風』を5匹ほどがまとめてこちらに放つてくる。見事に統率された狼がその射線上を空けて風の刃が俺に向かってきた。

「『ストーンウォール』アクトスリー！～！」

それを三枚重ねにした石の壁で止めてみせた。強勒さだけなら一級品の俺の壁でも一枚半ほどまで切り裂いていた。これは齧威的だな。

「なんだとお！？」

「どうやら今のが奥の手かな。

「投降する気はないか？ ギフト保持者なんだ死刑にならずに済む

かもしだいぞ？」

ギフトの保有率はなんと全員が持っているらしいのだが、発現させることが出来るのは千人で一、二人。さらに使いこなすのがそこから100人に一人。極める事が出来るのが一世代に一人いるかどうかだそうだ。そんな希少なギフト使いならばここまでこのことをやつたとしても死刑を免れる仮想性がある。といつても人生の大半を無償労働にあてられるだろうけど。

「……ふん。もう勝つた氣か小僧が」

「おや？ 既に勝負は見えてると思つただけど……」

「来い！ ハリアス！」

その呼び声に答えるように地面を揺らす轟音がこちらへと向かつてくる。

「でけえ……」

「うそお……」

「なんだよアレ……」

現れたそれは、一見は一足四腕の変わった成りをしているが牙の生えたゴリラだった。問題はその巨体がハメートルを超えるほどあつたことだ。

「ヤバい。これは俺一人でも勝てるかどうか疑わしいのに、今はジヨイヒミミルがいる。」

「ハハハハハハ！ 貴様が奥の手を持つように私にも当然切り札は用意してあるのよ！ さあここからがほん」

おそらく俺の苦々しい表情にいい気分になつた魔獣使いの語りが最後まで言い終わる前に。

「ぐわや あああああああああ

ゴリラが森の彼方に吹つ飛ばされた。

「 は？」

その場にいた全員が呆気に取られてしまった。

「見つけた。ついに見つけたゾルド・バリアック！！！」

静まり返つた場に響いたその声の主は純白に輝く大狼に跨つた幼い少女だった。

第八話 狼の遠吠え（後書き）

張り詰めタア 二ノオ 一

## 第九話 会話の価値

魔獸使いが乗っている灰色の狼と退避するように現れた大きな狼。しかしその威圧感、高潔さ、存在の大きさは段違いのものだつた。あまりの気高さに自然と畏怖を抱いてしまってなるほどだ。あれも魔獸というのだろうか？ なにか……こつ……違つものような……。てかそんな狼の背中に乗つてゐるあのちびっ子は誰ですか？

「貴様が妾に与えた三年前に与えた屈辱にじきつちり利息を付けて返してくれるわ！」

なんだか幼女のくせに口が荒いな。おまけに何だか物騒な雰囲気が……俺の子供好きさはあれを許容できるんだろうか？

「そ、その狼つ！？ 三年前だとつ……お前まさかリーンバーグの関係者か！？」

「わかつてあるなら話が早い、その素つ首貰い受けるとしようか！」

あれ？ なんか蚊帳の外へといきなり放り投げられた感が……。

「ヒイツ！ お前らのような化物に付きあつてられるか！ 行けお前たち！ 時間を稼ぐのだ！」

なんだか幼女の素性が分かつた途端に魔獸使いのルドと呼ばれた男は逃走を始めよつとした。

「逃すものか！ ボーゼ！ こつら全部沈めてしまえ！」

そんな声が上ると草木の生えていた箒の地面が泥のように溶けてその場にいた全員の足を絡めだした。ちょっと俺らも対象になつてますけどーーー！！！　ストーンウォールを地面に横たわらせるように出現させてその上へと三人で避難する。

その謎の現象の中心の地面から体中に泥を塗りたくり、水苔がそこかしこに張り付いていて何本もの牙を口から生やしたイノシシが現れた。

「よくやつたぞボーザー。ナンフよ雑魚を頬むで、妾と「ハジン」はあの痴れ者にとどめをさしてくれるー。」

「クワッ！」

何やら任されて、泥を逃れて迫つてきていった狼の群れの前に躍り出たのは立派な黄色のトサカをした、もとい黄金色したモヒカンをしたアヒルだつた。すると自分の目の前に幅広い水の壁を作り出したて、それをそのまま狼達へと押し出した。突然起こつた濁流に狼達は為す術もなく飲み込まれていつた。凄い……すつごく凄いんだけどどツツコムよ。

「モヒカンでけえよ！」

ファンシーなアヒルがでかいモヒカンつけてるとかマジでロックだぜ。

なんてアヒルさんの雄姿を見ている間に足を取られていた魔獣使いの周りに居た一回り大きな狼達も全て幼女の白い狼に全てやられていた。開戦一分と経たない内に全滅とか圧倒的にも程があるだろ。

そして幼女は腰にぶら下げる短剣を引き抜き、男へと差し向ける。

「言ひ残すことはあるか下郎」

「クソックソッ！ たかが獸を何匹か売るつとしただけじゃないかよ！ 三年も前の話でここまで追つて来やがつて！」

大氣が震え、いや森全体が震えたように思えた。なんて殺氣だよ、俺がゲイロス一味で放つたものが可憐く思えてくるよ。

「たかが獸？ 妾の家族と言つべき友人達を誘拐しようとしておいて、た・か・が・だ・と？ いいだろう、今直ぐ死ねえええ！ …！」

男の頭上へと短刀が全力で振るわれる。

「何のつもりだ貴様」

なんとかギリギリ俺はその腕を男が殺される前に掴んで止めて見せた。

「いやいやいやいや、後から乱入して来てその言い草はないでしょ。この男には聞かなきやいけないことがあるんまだ死んでもらつては困る」

「……妾は三年前からこやつを追つて來たのだ。妾から言わせればお主達の方が後だ」

「わつ！ この幼女怖いよ！ なんてメンチ切つてくるんだこの子！ 不良と喧嘩は何回かしたことあるでど、見ただけで逃げ出しあくなるメンチなんて初めて見たよ！ つていうか力強いな、かな

り本気じやないと押されられないのはなぜだ？

見た目この10歳で髪はどうやら銀髪で三つ編みに結つてから  
さらに肩より上へ括り上げている。眼の色が黄色とこりよつ金色?  
銀に金とか派手だな。幼いながらに美しいと言える容姿なんだ  
わつばど今は迫力満点な恐ろしさしか感じません。

「でもや、こいつの後ろには黒幕がいると思つから話して貰わないと困るんだよね。さつきの話聞いてる限りじやそつちの誘拐だつ  
けか？ それにも黒幕がいるかもしれないけどそつちの犯人は捕まつ  
てるのか？」

「――」

おつと今氣が付いたのが丸分かりの顔をしてこるが。三年間の間に一回も思いつかなかつたのか……。

「こいつ殺しちゃつたらこじりに迫り着くのは無理だと想つたばど？」

説得なんてやつた」と無かつたけど上手くこきそつかも。

「ウムムムム……しかしここまで来て諦めよとこつのか……」

「こいつを締め上げるか、その他の奴を見逃すのかを選ぶのは君次第だ」

「その黒幕やらとくへは貴様なら迫り着く」とは出来るのか？

「確實とは言わないけど、絶対に見逃してやるつもりはない」

裏で糸を操つてゐる悪党ほど質の悪い輩は居ない。ならばその糸

を見つけたのなら全力でその先を手繰らなければいけない。そういう奴は生きてる限り害悪をまき散らせ続けるからな。

「……………わかった。しかし…」

どうやら懐はなかなか広いのか少し考えて俺の提案に承諾してくれた。了承の意を示した少女は短刀を手から離して魔獣使いへと拳を振り抜く。哀れにもゴムボールが跳ねるように男は森を跳ね回つて飛んでいった。

「これぐらいでは妾の怒り欠片も収まらんが、今はお前……名前はなんと申すのだ男？」

「俺？」

「以外に誰があるか」

すつごく偉そうな喋り方するなあこの子は。いいとこ出のお嬢様だつたりするんだろうか？ まさか貴族とか上級階級のお方だつたりするのかな、その割にはいささか野性味溢れすぎてると思うが。今の格好であまり名乗りを上げたくないが下ろしかけた拳がまた上がつてしまつてはとてもまずい。なぜならこの少女に従う魔獣相手では全く勝てる気がしないからだ。中級魔法並の力を振るつた先の一回もそうだけど、今日の前にいる純白の狼にいたつてはいい勝負するイメージすら沸かないと来たもんだ。上には上がいるのは重々承知だつたんだが、こいつは上は上でも空の上つて感じがする。

「俺はキーデーだ。ゆえあって正義のヒーローをやつている

「ヒーローとやらはよくわからんが、キーデーよこの件は貸にして

おべん」

え？ いやいや、そっちにもメリットあつたよね？ なんで俺への貸しになるんだよ！

「尋問なぞはやつたこともないし、この国にはまだ来たばかりで土地勘もない。あそこで転がつてい男の後始末はまかせるぞ」

文句を言つたかつたのだが、それを発する間もなく少女は狼に跨つた。

「妾はビルマイア・リーンである。また会おう。」

唐突に現れ颯爽と風のようになつていった少女。

「なんなんだアレは……まあでも苦戦しちつになつた所を助けて貰つたという見方もあるか」

その後ズタボロになつた魔獣使いと、泥沼からストーンウォールに飛び乗つて脱出していたジョイと//://ルを回収して下出していく。

村まで降りた俺はまず依頼を達成したことを鉱夫の人達に教え、ジョイとミミルにはジーニーさんに連絡してもらつたため先に街まで帰らせた。

俺はとこいつとその日の夜になつて再び森へと半死半生ではあつたがミミルの治癒術と俺の傷薬の効果でなんとか喋るくらいには回復していた魔獸使いことルド・バリックと一緒に森に入つていた。もちろん尋問するためだ。

「さて、聞きたい事は三つ。誰から頼まれたのか？ お前のような裏の仕事を請け負う奴は他にいるのか？ そしてなぜあの場所だつたのか、だ」

「喋るとしても思つてるのかお前？ へつ！ どれだけ頼まれようと脅されようと何も教えてやるつもりはないね！」

雁字  
がんじがら搦めに縛られた状態でよくも強気に出れるもんだ。それなりに修羅場をくぐつて来たのだろう。

「なにか勘違いしてこいるようだけじ、今から頑張るのは俺じゃなくてあんただよ？」

「……どうこいつ意味だ？」

「今から……そうだね。夜明けまでにあんたが俺に信用されるかどうかであんたの運命が変わつてくる」

「……」

「信用できたら警備隊に、もしも信用出来ないと想つたら……あの

## 狼少女に引き渡す

狼少女といつ言葉に少しだけ反応を見せる。

「選ぶのはあんただ。俺はここから何もしないし何もしゃべらない

ていうより俺も尋問なんてできませんよ！ 話術で相手を突き崩すなんて纖細な作業は無理だし、拷問なんてもつての外。なら素直に警備隊に付き出してしまえばいいのだが、こいつの上がもしかしたらもしかしてしまうのかもしれないでなるべく自分で情報を手に入れておきたい。

たった一つ、俺の持つてきたランプだけが灯り、静寂な夜の森に俺と魔獣使いは押し黙つたまま鎮座していた。沈黙つてのは人間にとつては度が過ぎると体に毒だ。おまけに暗闇で、なにも喋らないままでは確定な死が待つ狼少女という選択肢をプレッシャーに晒されれば何か一つくらいは喋るんじゃないかな？ といつ計算だ。

「……」

「……」

長い長い沈黙の時間が続く。しまった！ この作戦すつごい欠点がある！ それは俺もこの沈黙が辛いってとこだ！ 野郎と二人で静かな暗闇の中で待ち続けるとかどんな拷問だよ！ 仕方ないトウ力の笑顔でも思いだして何とか耐え忍ぶか……ヌフッ。

星の位置から詠んで、尋問開始から大体六時間が過ぎようとしていた。その間男は一言も喋らないままだった。俺はとうとう妄想でしばらくは頑張っていたが、沈黙との戦いから次第に眠気との戦いへとシフトしていった。ねじ切れるほどに太ももを抓つて頑張つていたが、その甲斐あつてもうすぐ朝を迎えようとしている。ふと魔獣使いの方を見ると冷や汗だらつか顔中に汗が吹き出でていた。死というプレッシャーをここまで耐えられるのは感心する物があったが、逆になぜここまで精神力を持ち合わせておいて悪党なのかという疑問も抱き出した。

「もう直ぐ夜が明けるな……」

最後通知のつもりで俺は呟く。どうやらその意図を感じ取つたらしくビクッと肩を震わせる魔獣使い。

「どうまで喋れば信用してくれるのだ？」

「ここに来て初めて男が喋りだす。そういうえば裏稼業だつたら喋つただけで殺されるような情報もあるかもしれないのか。」

「さつき聞いた三つを出来る限りで詳細に説明してくれ

命に関わるような話は無くともいいよと、暗にお情けをかけてみる。俺だって人死はなるべくならして欲しくはない。

「…………まず誰から頼まれたかどうかは俺には分  
からない。」うういつたやばい仕事を斡旋する組織があるらしく、ど  
こから嗅ぎつけるのか俺らみたいな奴に間接的に話を回してくれる。  
だから依頼主本人に会つたことは一度だつてない

うつわあ厄介な話がいきなり出てきたぞお。

「俺のよつな裏の仕事をしている奴は『まんとい』のはずだ。何度か  
数名でチームを組んで仕事をしたころもある」

## 組織力の高い犯罪組織か……。

「あれれバレてた?」

「あの場所を嗅ぎつけた時点で予想はつづく」

「じゃあやつぱり新しく発見した遺跡があるんだな?」

「この世界の遺跡には滅びた文明の遺物や歴史を示す物、時によつては魔法を帯びた強力な道具なども発見される宝の山だ。しかし危険な物や厄災を封印されたような場所も多々発見されてるので、そういうた遺跡はその場所にある国に管理され。許可された物だけだ探索を許されるものなのだ。

つまりこいつが隠していたのは盗掘。多大なリスクを伴う行為だが、それに見合つ金額が手に入れられる事は確実だ。

「他にも仲間がいるんだな?」

「仲間つていうより、あっちの方から派遣されてきた野郎で詳細は知らねえよ。俺の担当は人払いだったもんでね」

業務分担まできつちり管理してるとかマジでしつかりしてるとか組織だな。

「そいつらはまた来る予定はあったのか？」

「本当ならあさつてくるはずだが……俺からの定期連絡が途絶えた時点でもう来ないだろ?」

わあ、ほんとしつかりしそぎてウザいわあ。

「俺のポケットに大きめのコインが入ってる。それを出してくれ」

男の腰のポケットをまさぐると嫌すぎるが、ここは我慢して言われたとおりにコインを取り出す。この世界の硬貨は基本丸い形なんだが、取り出した硬貨は六つ角形になつていて色は銀色だった。絵柄は……たぶん何かに髑髏だろ? けどなんの動物なのかはわからない。

「それはその組織からお墨付きを貰つた奴に渡しているコインだそうだ。その絵は牛の頭蓋骨だつて話だがなんでそれなのかは知らないな。仲介として派遣されてくる奴もそのコインか同じ文様の刺青なんかがどこかに入つてる。全容なんて全くもつて掴める物じやなかつたが、今まで十以上の国で仕事してきたんだよほどのそしきなんだろ? よ。」

聞けば聞くほどその規模と体勢の整い方に驚きを隠せない。はつ

きり言つてまだまだ文明の進歩としては元の世界に比べれば四段階程は遅い、年数で言えば五百年といったところか。そんな中で組織として機能しているのは国といつ母体意外には基本無かつた。商會とこう物もあるのだが、基本的にはワンマン企業といった一番上の実力次第といったものだった。それを考へるとこの組織はどれほどに根が深く、強大な力を持つてゐるのか想像すら出来ないでいる。

「これ以上は俺の知つてゐる事はないが……いや、もう一つあつたな」

「なんでもいいぞ、とにかくその組織の情報はなんでも欲しい」

「名前だ。組織の名前は『ルドラの右手』と言つていた」

俺はその名を胸に刻みこむ。確實に近い将来この名を背負う者たちとの熾烈な戦いが起こるという確信を持っていたからだ。もちろん俺の正義感から言つて放おつておけない奴等なのは確かなのが。予想すら立てられないほどの大規模な犯罪組織が世界でも三本の指に入ると言われるプローナスで活動していない訳が無い。俺の故郷である地球で言つなれば、ここは日本の東京、アメリカのニューヨークやロサンゼルスに匹敵すると言つていいだらう場所なのだ。

「よくここまで喋るきになつたな」

「俺だつて死にたくは無い。それに好きで裏稼業をしてきた訳じゃないんでな」

どうなるのか俺へと窺う視線を送る魔獣使い。まあ脅しはしましたけど最初から警備隊にする予定でしたしね。じゃないとあんな怖い狼と少女の間に入つてなんていきませんから！ 思い出しだけで股間が縮み上がるほど怖かつたんだぞマジで！

それから俺は無事に魔獣使いを冒険者ギルドに引渡し、報酬を受け取る。その事情を説明した結果、ジー二ーさんからは更に一万デイクスの追加報酬を頂けた。そこからマリナおばさんの所へ直行し、この事件の顛末と謎の犯罪組織、そして犯人がギフト能力者である話を情報ギルドに売つぱらつた。謎の犯罪組織については知つていたらしいので大した額にはならなかつたが、合計で一万八千デイクスになつた。どうやら新しい遺跡とギフト能力者の情報がかなり高額になつたようだ。

もちろん冒険者ギルドの報酬はジョイとミールで均等に分けようとしたが、家の改築代ですと俺が多めに貰うことになつてしまつた。そんなこんなで金策を初めて一週間の出来事で俺は七万二千デイクスを手に入れたのだった。これでしばらくまた大工仕事ができる。やつたねハニワちゃん！

## 第九話 会話の価値（後書き）

文明的にそんな組織力を持つた犯罪組織が居るか？ なんて思うかも知れませんが日本でいうと実際に居た忍者なんかは一つの国なんかよりも組織力があったと思われる所以有り得なくは無いかなと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7690w/>

---

正にその義は煌く拳

2011年10月14日21時02分発行